〔表紙〕

文化朋党実録

文化朋党実録

享和二年壬戌

正月

十六日　御目附秩父太郎・同清水源左衛門・同若松平八共ニ御役被差免慎被仰付、

太郎名ハ季保、故ノ御目附伊地知新太夫季　ガ子ナリ、季　本姓川上氏、父ヲ彌右衛門ト云、仕官未考ヘス、兄ヲ彌三太ト云（後甚太夫ト改称ス、今ノ、甚左衛門カ承重祖ナリ）、仕テ長嶋移地頭タリ、季　出テ伊地知新太夫季周（伊地知越右衛門重ガ次子ナリ）身族ヲ別シ、仕テ御側御用人タリ、寺社奉行ニ遷ル、今ノ越右衛門カ義曹祖ナリ　カ嗣トナル、故ニ伊地知氏ヲ冒ス、故ノ京都御留守居東郷源五實孝（今ノ次郎太郎カ養曹祖父ナリ）カ女（名ハ久）ヲ娶テ、安永三年甲午ノ歳ヲ以季保ヲ　府下平馬場ノ宅ニ生ム、季保幼ニシテ三七ト称ス、早ニ父ニ嗣テ伊地知氏ヲ継キ新太夫ト改称ス、寛政元年己酉十一月九日十六歳ニシテ御近習番トナル三年辛亥正月十一日奥御小姓ニ改ラル、　内朝ニ給事スル事トモ五年ナリ、五年癸丑七月廿五日　御目附ニ遷サル、時ニ二十歳、八年丙辰伊地知氏ノ宗子秩父十太夫将種（将種ハ秩父氏ノ庶族弾正少弼季随カ後ナリ、世々伊地知ヲ以テ氏トス、勘助重直ニ至テ始テ秩父氏ニ改ム、先祖大隅今ノ垂水ヲ領シ一所衆ニ列ス、子孫反ヲ謀ツテ邑ヲ（将種カ曹祖父）、収メラル、其後爵ヲ降シテ小番トス、将種仕テ植方検者タリ）病テ旦ニ死セントス、遺言シテ季保ヲ以テ後トス、三月廿一日　季保命ヲ請テ将種カ後ヲ継キ改メテ秩父氏ヲ冒ス、十年戊午十一月廿四日　太郎ト改称ス、季保性剛強ニシテ橈ス、法ヲ執ル事厳刻ナリ、其道ニ非サレハ一毫モ人ニ貸ス、（サ脱カ）貴戚ト雖トモ避ル事ナシ、先是（享和元年）国老大目附ニ令シテ御目附・郡奉行ヲ遣シテ

諸郷ヲ巡リ、民ノ貧富ヲ視セシム、大目附新納内蔵久命、季保等ヲ台子ノ間ニ召シテ是ヲ命ス、皆敬テ命ヲ聴ク、季保独肯セスシテ曰ク、民貧キコト有テ富メルコト無シ、行テ視ルヲ待スト、久命怒テ曰ク、我国老ノ令ヲ承テ子ニ命ス、而ルニ子是ヲ拒ム、豈令ニ従ハサルカ、季保曰ク、令ニ従ハサルニ非ス、某辱ク御目付ノ員ニ備ハル、聞見スル所敢テ告サスンハアラスト、久命辞屈ス、同幕島津登久兼旁ラニアリ曰ク、子郡奉行ニ非ス、何ヲ以テ民ノ貧富ヲ知ン、季保曰ク、方ニ今苛政大ニ行ハレ民皆生ヲ聊セス、五尺ノ童子モ是ヲ知レリ、豈郡奉行ヲ待ント、辞色並ニ厲シ、久兼等怒甚シト雖トモ皆答ルニ辞ナシ、季保退ク、久命、本田助之丞（季保カ同僚、時ニ月番ヲ以テ事ヲ大目附座ニ執ル）ヲ召シテ曰ク、季保令ヲ聞テ唯セス、言ヲ発シテ敬セス、宜ク諭シテ罪ヲ待シムヘシ、助之丞以テ季保ヲ促ス、季保以為、罪ヲ待シテ理ナシト、私ニ清水盛之ニ謀ル、盛之慫慂シテ曰ク、吾子言フ所其位ヲ出ス、何ノ罪ヲ待ツ事カ有ント、若松平八モ亦是ニ雷同ス、季保遂ニ固ク執テ従ハス、久命乃チ実ヲ以テ国老山田伯耆有儀ニ告ク、有儀素ヨリ其強直ヲ悪ム、因テ上ヲ侮リ法ヲ罔スルヲ以テ劾ス、是ニ至テ遂ニ職ヲ罷ラレ家ニ閉塞セラル、是歳季保二十九歳、源左衛門名ハ盛之、（雅名尚、字子志、号竹渓命、其斎曰浩然堂）先祖ヲ清水監物ト云、本志布志ノ町人ニシテ大慈寺ノ寺児タリ、嘗テ龍雲和尚（大慈寺住持）ニ従テ琉球ニ航シ、唐物ヲ買帰テ是ヲ鬻キ家富ヲ致ス、遂ニ龍雲カ薦ヲ以テ徴レテ士トナル、其孫彌三兵衛ニ至テ仕テ御側御目附（今ノ御側役）トナリ、始テ歩行ヨリ騎馬ニ升ル、是ヨリ爵位相承キ父源兵衛職京都御留守居ニ至ル、島津仲久隣（今ノ仲カ曽祖父ナリカ）女ヲ娶テ、明和八年辛卯ノ歳ヲ以テ盛之ヲ　府下山ノ口馬場ノ宅ニ生ム、盛之幼ニシテ源太郎ト称ス、父ニ嗣テ家ヲ承ケ源左衛門ト改称ス、天明七年丁未七月十二日十七歳ニシテ表御小姓トナル、寛政二年庚戌四月十九日御近習番ニ改ラル、五年癸丑七月廿八日又奥御小姓ニ改ラル、内外ニ給事スル事トモ六年ナリ、同年八月二十五日御目附ニ遷サル、時ニ二十三歳、

盛行為人敏達ニシテ拘ラス、文雅風流ヲ好ミ書画琴〔之カ〕
棋ヲ翫テ、常ニ俗客ヲ聚テ游談ヲ事トス、然トモ英
邁ニシテ才略アリ、能ク吏務ニ堪タリ、秩父季保兄
弟ノ交アリ、事毎ニ必是ト謀ル、嘗テ人ニ語テ曰ク、
清水ハ吾ノ蕭何ナリト、盛之モ亦謀議ヲ以テ自任ス、
是ニ至テ季保ヲ慫慂スルヲ以テ職ヲ罷ラレ家ニ閉塞
セラル、是歳盛之三十二歳、
平八ハ若松氏ノ別族ナリ、祖父十左衛門仕テ御用人
タリ、罪アツテ職ヲ罷ラレ終身ヲ禁錮セラル、伯父
官太左衛門御小納戸タリ、実学党ニ与シテ獄ニ繋カ
レ海島ニ放タル、父十左衛門御使番タリ、独終リヲ
克ス、平八少ヨリ進達掛ヲ以大番頭座ニ給事ス、寛
政七年乙卯五月十五日御目附ヲ授ケラル、是ニ至テ秩
父季保ニ雷同スルヲ以テ職ヲ罷ラレ家ニ閉塞セラル

文化元年甲子

七月

十二日　雷大ニ鳴ル、声四方ニ振ヒ人皆耳ヲ掩フ、南林
寺山中ハ勿論、鎌田愛太夫宅大目付格御側御用人勤其外雷ノ落ル処
凡七十余箇所ト云云、故老ノ衆近代ノ為珍事由相議ス、
今年若松平八慎御免被仰付、秩父太郎・清水源左衛門
儀ハ未及其沙汰、

同二年乙丑

二月

廿六日　若松平八与方進達掛被仰付、依内訴也、

三月

十七日　酉刻乱心体ノ者赤裸ニテ　御殿ヘ致推参、虎ノ
間御縁頰高欄口ヨリ強上リ、従杉間御対面所縁頰檜垣
ノ間如御側御用人座、廊下推通リ廊下ヘ有之帳箱引離
シ帳面取散シ、夫ヨリ御古筆所廊下筋ヘ出、彼ニ有之
掛槌ヲ取リ、桃ノ間ヨリ雉子間辺ヘ致徘徊ノ間、表茶
ノ湯所下番見咎メ、表坊主平瀬正庵ヘ相告ル、依テ泊
番御目付西覺太夫ヘ申出ノ故、早速御兵具方ヘ捕ヘ方
手当申遣ス内、早郡方下物奉行所前掛通リ、掛槌ヲ両
手ニ持、声ヲ懸テ御目付役所下辺叩廻リ、桃ノ間御額

打破リ、勢ニ懸テ芍薬ノ間縁頰駆通リ、御対面所ヘ推入御柱等打挫散々致狼藉ノ処、島津木工頭当番今夜泊番ニテ家来達山貞助相付居、挾箱〔ママ〕扨首襲取来テ詰込打倒ス、表坊主毛利春意不透後ヨリ押ヘ付無難相捕テ引出ス、及穿儀ノ処、鎌田伴之進下人吉野村福永門名頭釜助四男市蔵ト申ス者ノ由ニテ、昨日迄ハ今和泉屋敷ヘ日雇ニ雖参、従今朝ノ儀一向取覚不申由申スト云云、

九月

四日　惣身ニ墨ヲ塗リ島ノ袷ヲ著シ従　白木綿ノ廣袖ヲ為加者、田ノ浦御茶屋御内証様御隠居所ヘ致推参、　御直ニ奉申上儀有之由申ノ間、御番衆相捕及披露、依テ廻方横目ヘ被相渡及御穿儀ノ処、櫻島有水村素生ノ萬蔵ト申者ノ由ニテ年六十四歳ト云云於入來山日本鎮守ノ為蒙仰トテ怪敷儀トモ申スト云云、

十月

三日

太守様中村御茶屋ヘ　御滞在ノ処、惣身ニ為塗粉ヲ者御門番所ヘ致推参、　御直ニ奉申上儀有之由申ノ間、御門番相捕及披露、依テ廻方横目ヘ被相渡及御穿儀ノ処、市來湊舅町ノ金太郎ト申者ノ由ニテ書付差出シ怪敷儀トモ申スト云云、

〔文化〕同三年丙寅

三月

十三日　当番頭樺山權左衛門御用人勤被仰付、当番頭如元、

權左衛門名ハ久言、故ノ御小姓与番頭樺山相馬久〔ママ〕カ　子ナリ、久　本姓新納氏〔ママ〕新納氏ハ道儀公ノ第四子四郎左衛門尉時久ヨリ出ツ先祖新納院（日州高城・高鍋ノ二邑ヲ新納院ト云今高鍋国ニ属ス）ヲ領シ、世々一所持ニ列ス、父ヲ波門久侶ト云、仕テ若年寄ニ至ル、兄ヲ織部久褒ト云、見ニ寺社奉行タリ、久〔ママ〕出テ樺山左京久倫久倫カ先ハ道儀公ノ第五子安芸守資久ヨリ出ツ、世々薗牟田ヲ領シ一所持ニ列ス、久倫仕テ国老ニ至ル、カ嗣トナル、故ニ樺山氏ヲ冒ス、久倫カ次女ヲ娶テ安永七年戊戌ノ歳ヲ以テ久言ヲ　府下荒田ノ宅ニ生ム、久言生テ六・七歳ノ時、久〔ママ〕久倫ノ為ニ出〔サカ〕ザレ帰テ兄ノ家ニ依ル、新納氏ニ復シ九郎ト改称ス、而シテ久言独母ト久倫ノ家ニ留ル、遂ニ立テ

久倫ノ嗣トナル、故ヲ以テ系ヲ樺山氏ニ属ス、幼ニシテ大助ト称ス、天明五年乙巳八歳ニシテ久倫ノ後トナル、仍テ其号ヲ襲テ左京ト改称ス、後又今ノ称ニ改ム、〔マ〕〔マ〕ニシテ世蔭ヲ以テ当番頭トナル、久言質残忍、物ヲ待スル恩ナシ、付僕差ク過アレハ召シテ端座セシメ終夕食ヲ与ヘス、其苛刻ナル此類多シ、然モ少ヨリ大志アリ、身有道ニ親キ行検ヲ励ス、故ヲ以テ温恭ノ風ナシト雖トモ、先生長者亦是ト遊フ事ヲ厭ハス、久保之兄平内左衛門ト称ス、学ヲ好テ議量アリ、無役ヨリ起ツテ屋久島奉行トナリ郡奉行ニ遷ル、等常ニ其材ヲ称シテ曰ク後生畏ルヘキ者ハ樺山ナリト、是ニ由テ名望夙ニ著ル、是ニ至テ本職ヲ以テ御用人ノ事ヲ掌ル、是歳久言二十九歳、

廿二日　去四日江戸上御屋敷并西南向御屋敷御類焼ノ由到来ス、

七月

十一日　赤松市正依願被免御家老職、昨日親類御用ニテ病気分ヲ以御断可申出旨被仰渡ト云云、

十三日　秩父太郎・清水源左衛門共ニ慎御免被仰付、長髪見分并赦免ノ御礼ニ不及、月代勝手次第可仕旨被仰渡、去戌年慎被仰付ヨリ是ニ至テ及五箇年ト云云、

季保家貧フシテ余畜ナク閑居スルコト五年、妻子其憂ニ堪ス、兄弟怨望シテ已ス、季保是ニ居テ略屈色ナシ宅中ニ圃数十畝アリ、力ヲ尽シテ耕種シ歳ニ其毛ヲ売テ以テ養ヒニ給ス季保歳ニ毛ヲ売テ動スレハ数千銭ヲ得タリ、出シテ民ニ貸シ長生銭トス、敷衍シテ二百緡ニ至ルト云、国挙テ其抗議ニ慕ヒ其不遇ヲ哀ム、会是歳公直言ヲ求メ近臣ヲシテ事ヲ言シム鶴問答ヲ著シテ国老ニ示シ玉ヒ、教戒ノ文ヲ作テ近臣ヲ諭シ玉フ、皆是時ニアリ、近臣因テ季保及盛之カ寃ヲ訴フ者アリ於是　命シテ曰ク云云、蓋シ待スルニ有罪ヲ以テセス是歳季保三十三歳、

十六日　秩父太郎・清水源左衛門共ニ御目付御裁許掛被仰付、

八月

八日　樺山權左衛門御勝手方御用人寄被仰付、

十三日　〔磯カ〕礒御茶屋番隈元平太御廣敷番之頭被仰付、

平太ハ隈元軍六カ従祖父ナリ、父ヲ與三右衛門ト云、

兄與一右衞門（即軍六カ祖父ナリ）ト居ヲ同フシテ族ヲ分タス、南林寺ニ吏トシテ死ス、故ヲ以テ平太・軍六カ父玄積カ家属トナリ其家ニ畜ル、為人諒実ニシテ頗ル学識アリ、敦ク詹泊（澹カ）（俗ニ廉直ト云）ヲ尚フ、玄積盲ニシテ家貧シ、平太常ニ仕官シテ俸禄ヲ得以テ養ニ奉ス、玄積死ス、軍六幼シ、平太助ケテ家事ヲ幹ス、得ル所アレハ悉ク是ニ供シ一銭尺帛モ私房ニ入ス、親旧或ハ妻ヲ娶ンコトヲ勧ムル者アリ、肯セスシテ曰ク、我吾宗子ヲ養フ豈敢テ妻ヲ畜ンヤト、終ニ娶ラス、郷里称シテ独行ノ善士トス（橘口杏庵・徳田善蔵、平太ト交ルコト久シ、曾テ其行ヲ許スコトナシ、曰ク、性ヲ忍ヒ情ヲ矯ルノ徒ナリト、三子皆質直ヲ以テ称セラル）、中年ニ及テ御腰物方役人トナリ、兼テ御腰物切（俗ニ冷物切ト云）ノ事ヲ掌ル、善ク其職ニ称フ、事ニ従フコト数年、会磯御茶屋番贓罪（官物ヲ私スルトカ）ニ座シテ罷ラル、　命シテ家累ナク廉恥アル者ヲ選テ是ニ代ラシム、時ニ懇請スル者八十人ハカリ、有司特ニ平太ヲ以テ是ニ応ス、是ニ由ツテ御茶屋番トナリ、遷テ磯宮ノ内ニ居ル、園ヲ監視シ庭ヲ灑掃シ旦タ懈ラス、

公屢磯宮ニ来遊シ玉ヒ、其能ク事ヲ勤ルヲ賞シ嘗テ召見テ酒ヲ賜フ、左右近侍ノ臣モ亦其為人ヲ慕ヒ従ヒ遊フ者多シ、是ニ至テ遂ニ御茶屋番ヨリ挙ラレテ御広敷番之頭トナル、

（文化）四年丁卯

正月

十一日　樺山權左衞門当番頭御勝手方御用人寄ヨリ大目付ヘ転役被仰付、秩父太郎・清水源左衞門共ニ御目附御裁許掛ヨリ道奉行ヘ改職被仰付、去年御裁許掛被仰付ヨリ是ニ至テ僅ニ六箇月ト云云、

季保・盛之既ニ御裁許掛トナル、国人皆曰ク、二子是ヨリ升ラント、道奉行ノ命下ルニ及テ衆疑惑シテ已ス、或曰、二子職ニ在テ多ク新法ヲ議ス、同僚旧章ヲ執テ合ス、是ニ由テ毎快々トシテ楽マス、事ヲ執テ勉ス、其改職セラル同僚蓋シ是ヲ与リ知レリト、

四月

七日　權左衞門殿依願主税ト改名被仰付、

八月

朔日　大ニ風雨ス、海水相溢レ御作事方・屋久島方両御船手其外所々致破損、荒田村・鹽屋村・大門口・両築地等海辺ノ人家不残潮相揚ル、島津若狭殿家来永井圓長外科医師外ニ一人未詳溺死ト云云、故老ノ衆六十年来未曽有ノ由相議ス、

十月

十二日　御作事奉行御裁許掛勤山口孝右衛門御目付岡元千右衛門後ニ見ユ従主税殿別勤被仰付、大事ノ為聞合由相聞ユ或人曰ク、岩下佐次右衛門等カ事ヲ聞合スト云云、佐次右衛門等カ職後ニ見ユ、

十五日　御目附堀甚左衛門後ニ見ユ従主税殿、孝右衛門・千右衛門別勤ヘ被相加旨被仰付、

廿三日

太守様去ル九月六日江戸　御発駕ニテ今日未刻　御着城、即刻御小姓組番頭御用人勤川上右近為御礼使被差立、御家老島津將監殿・頴娃信濃殿・新納内藏殿・鎌田典膳殿・若年寄島津内膳殿・島津安房殿・島津仁十郎殿・島津登殿・大目附樺山主税殿・喜入主水殿・町田監物殿御目見被仰付、

廿四日　岡元千右衛門・堀甚左衛門別勤相済御届申出ル山口孝右衛門同断、致復命処、主税殿邑〔色カ〕相変即刻御目附小島甚兵衛・郡山權助共ニ後ニ見ユ被召出別勤被仰付、不知何子細或人曰ク、山口孝右衛門カ事ヲ聞合ト云云、孝右衛門免職後ニ見ユ、

今日主税殿始テ御側役石黒戸後左衛門ヲ以達　貴聞度儀有之由被相窺、依テ　御前ヘ被　召出ノ処、戸後左衛門　御側ヘ致伺候ノ間可罷退由被申、懐中ヨリ書付一通取出被備　御覧、従夫及御密談刻移テ退出ト云云此後主税殿毎日御用有之、　御前ヘ被罷出不知何子細今日主税殿於　御前御脇差正宗被拝領之、

三日　隈元平太御広敷番之頭ヨリ御小納戸頭取ヘ転役被仰付、

平太素ヨリ樺山久言ト断金ノ契アリ、久言是ヲ公ニ薦テ登用セシム、故ヲ以テ御廣敷番之頭タルコト二歳ナラスシテ御小納戸頭取ニ遷サル、尋テ御側役トナル其事下ニ見ユ、

十四日

太守様為御躬前濱ヘ御遊船、及晩景磯御茶屋ヘ被為入

直ニ　御滞在、

十七日　未刻御勝手方御家老新納内藏殿・大目附格勝手方勤岩下佐次右衞門殿・当番頭薬丸猪右衞門・御側御用人御側役勤石黒戸後左衞門・御勝手方御用人高田猛太夫・御広敷御用人國分一郎右衞門以下六人勤方可差扣旨被仰付、

十八日　從磯御茶屋、御小納戸二階堂左守為御使主税殿宅へ被差越、　御細書被成下ト云云、不知其旨趣、

十九日　主税殿大目付ヨリ御勝手方御家老へ転役、加判同役同前、座順島津將監殿次被仰出、御役料高千石被下置、

太守様磯御茶屋御滞在ノ故、島津若狭殿御名代ニテ被仰付之、

御家老　　樺山主税殿

右之通　御名代島津若狭殿ニテ被　仰付、加判同役同前、席順島津將監殿次、御役料高千石被下置候、

右之通被　仰出候条、此旨表方江致通達奥掛御勝手方江も可相達候、

十一月　　信濃

一御勝手方掛

一琉球掛　　樺山主税殿

右之通被　仰付候条、表方江致通達奥掛御勝手方江も可相達候、

信濃

秩父太郎道奉行ヨリ当番頭御用人勤へ、清水源左衞門道奉行ヨリ御用人へ転役、若松平八与方進達掛ヨリ御鉄炮奉行被仰付、

此年国家事多ク財用足ラス、

公方ニ慨然トシテ治ヲ求ムルノ志アリ、時ニ樺山久言大目附ヲ以テ屢進見セラル、久言素ヨリ季保・盛之ト

刎頸ノ交アリ、因テ季保ヲ薦テ国士無双トシ、又盛ニ盛之カ才ヲ称ス、

公モ亦嘗テ二子カ事ニ堪タルヲ知ル、以テ然トシ玉フ、是ニ至テ二子遂ニ登用セラル、平八ハ旧久言ト相識ス、其嘗テ季保ニ与スルヲ以テ賞セラルト云、

廿日　新納内蔵等六人被　聞召通趣有之、御役被差免、佐次右衛門・戸後左衛門・猛大夫・一郎右衛門事隠居被仰付、内蔵・猪右衛門儀ハ不及其沙汰、

先輩嘗テ言フ、六人ノ者各其過失アリ、然トモ姦悪ヲ為ニ至ラス、当ニ秩ヲ貶シテ是ヲ懲スヘシ、当ニ名ヲ除ヒテ是ヲ廃スベカラス、輿論此挙ヲ以テ久言ノ劾スル所トス、良ニ以アルカナ

島津登殿　御叱被仰付、大目附役ノ時分不束ノ取計有之ト云云、高橋縫殿・赤松市正共ニ隠居并剃髪ノ願可申出旨被仰渡、

廿一日　高橋縫殿・赤松市正共ニ如願隠居剃髪被仰付、縫殿事霽山、市正事圓山ト改名ス、

或人曰、間戯レニ伊作湯ノ浦浴舎ノ壁ニ題スル者アリ、曰ク、傾レ球傾レ蔵上ノ坊主、為レ島為レ鍋下ノ隠居、古来未レ聞人ノ所悪、昨日今日忽相変ス願ハ遂ニ日参一付ニ帳面一、願ハ取ニ益銀一復セン故役遂ニ日参一謂レ謂ニ千眼寺一樺山のやまのあらしのはけしさに根からほきつと折るゝ赤松

秩父川清水高く出流浪に高橋おちて跡のひささし

廿三日　主税殿大口ヨリ出水ヘ、主水殿高山ヨリ大口ヘ地頭替被仰付、隈元平太御小納戸頭取ヨリ森山三十御小姓頭取ヨリ共ニ御側役ヘ転役被仰付、平太御小納戸頭取被仰付ヨリ至是僅ニ廿一日ト云云、

三十名ハ〇〇〔ママ〕雅ニ名レ兼字ニ益之一ト先祖世々御兵具方付与力タリ曾祖父長春ニ至テ始テ医ヲ以テ信證院君前ノ太守大玄公ノ継夫人ニ給事シ、年労ヲ以テ御小姓組トナル、祖父長元父ノ業ヲ続テ御側医師ニ至リ御馬廻格ヲ賜ハル、父長左衛門仕テ横目タリ、早ク死ス〇〇〔ママ〕幼ニシテ市之丞ト称ス、後今ノ称ニ改ム、甫メ九歳ニシテ召サレテ御小姓トナル、成童ニ及テ奥御小姓ニ改ラル、久クシテ御小姓頭取ニ遷サル、内朝ニ給事スルコト殆ト

三十年、
公ノ動静与リ知サルコトナシ、性巧慧(恵)ニシテ能ク人ノ微指ヲ察ス、事ニ因テ思ヒヲ進メ慮ヲ献ス、多ク明旨ニ称フ、曽テ秩父季保・清水盛之等ト友タリ、交兄弟ノ如シ、二子ガ登用セラル蓋カアルニ与レリ、是ニ至テ身亦御側役トナル、　樋ノ口ノ里ニ家ス、
禄九十六石、
廿四日　隈元平太・森山三十共ニ御側役ヘ転役ニ付、代々小番被仰付、
頃日下乗ノ旁土居ノ張縄ニ挾紙アリ、行人取テ披キ見ルニ一首ノ狂歌書付有之ト云云、
何人ノ不知所為、
清水にすく秩父のふんとしハ三十しまりて主税つよさよ
　此条十二月四日ノ事ニ係ル或人の日記ニ見タリ、
廿八日　秩父太郎当番頭御用人勤ヨリ大目附ヘ転役、座順町田監物次被相定御役料高三百石被下置、御勝手方ヘ可相勤旨被仰付、御用人勤被仰付ヨリ至是僅ニ十日ト云云、
一大目附
一御役料高三百石
　　秩父太郎
右之通御役替被　仰付、席順町田監物次、御役料高被下置、御勝手方江相勤、御用向御家老名前を以致取扱候様被仰付候、
　右之通、今日被仰付候条、此旨表方江致通達、奥掛御勝手方江も可相達候、
　十一月廿八日　　信濃
大目付御役料高本ト二百石被下置、多年相勤ルノ後御加増被仰付モ有之処、此節太郎殿ヘ直ニ三百石被成下儀、所帯方不続ノ由被　聞召上　思召ヲ以如此ト云云、
季保平生病多シ、道奉行タル時病テ赴上セサルコト久シ、檄ヲ奉スルニ及テ辞セスシテ　朝ニ造ル、既ニ命ヲ承ケ御用人座ニ詣テ職ニ説ク、明日復病ヲ称シテ出ス、居　日ニシテ又檄ヲ奉ス、既ニ大目附トナツテ

日ニ入ニ事ヲ視ル、未嘗テ懈ス、

廿九日　式日飛脚被召延、来月四日被差立旨被仰渡、

晦日

太守様磯御茶屋ヨリ　御帰殿　典膳殿為試業造士館ヘ被為下、童子十七人ヘ暗誦、諸生十三人ヘ説経被仰付、

御側御用人大山宗之丞席詰、

今月下旬比ヨリ御目附岡元千右衛門・小島甚兵衛・堀甚左衛・本田助之丞（後ニ見ユ）・郡山權助別勤被仰付、毎日演武館御目附扣所ヘ会集、諸役場聞合セノ由風聞ス（或人曰、山吹ノ間、御兵具方・御記録所・御目附役所・郡方等ヘ聞合セ入ルト云云、）

御目附川上權之進・曽木藤太郎（後ニ見ユ）追テ演武館会集ニ相加ル、月日記ヲ失フ、姑是ニ付ス、

十二月

朔日　太郎殿御用有之、　御前ヘ被為召、及申ノ刻過退出ト云云、

二日　金子二百両太郎殿ヘ、同百両隈元平太ヘ御内々ヲ以拝領被仰付、家格相応諸事可相整旨被　仰出、太郎殿御時節柄如何ノ由御佗雖被申、強ニ被成下ノ間不及是非拝受ト云云、

三日　明日式日飛脚被召延不時飛脚今日被差立、大目附衆以上申刻過迄長詰ト云云、

今日申刻過太郎殿　御前ヘ被為　召、及夜陰退出ト云云、

季保金ヲ受ク、閭里ノ人士貶議スル者往往有之、然トモ但国用足ラス、士民困阨スルヲ以テ説ヲ為スノミ、未君子ノ大道ヲ以テ是ヲ議スル者アルヲ聞ス、間有識ノ士アリ是カ論ヲ為テ曰ク、大臣ノ君ニ事ルヤ動容必ス義ヲ以テシ周旋必ス道ヲ以テス、道ニ非サルカ君命モ受ス、義ニ非ラサルカ君賜モ拝セス、故ニ曰ク、君ハ令ヲ行ヒ、臣ハ志ヲ行フト、又曰ク、命ヲ制スルハ君ニ在リ、行ヲ制スルハ臣ニ在リト、且古ノ君子位ニ在レハ必ス其職ヲ尽ス、尽スコトヲ得サル〔時〕寸ハ去ル、未嘗テ一日ヲ以テ素餐セス、故ニ孟子ノ齊ニ在ルヤ仕テ禄ヲ受ス、今季保度支官ヲ以テ財用ヲ務ムルコト僅ニ五日、君未其善謀ヲ聞ス、民未其恩澤ヲ被ラス、三百石ノ俸猶恥ツヘシ、況ヤ

二百金ノ賜ヲヤ、而ルニ受テ辞セス、上下何ノ儀ル所アランヤ、苟モ儀ル所ナクンハ言ヲ発シテ朝ニ満チ、令ヲ出シテ野ニ布クト雖トモ徒ニ空文ノミ、国家ニ於テ何ノ補ヒアラン、夫既ニ補ヒナクンハ素餐孰カ是ヨリ大ナラン、或人曰ク、百金ノ賜季保辞セサルニ非ス、辞シテ命ヲ得ス、已ムコト無シテ是ヲ受クト、曰ク季保義受クベカラスト為ルカ応ニ有司ニ就テ全封シテ還シ納ムヘシ、何ソ必ス言ヲ以テ辞スルコトヲセン、或又曰ク、季保家貧フシテ余畜ナク宮室・車馬営弁スルニ由ナシ、其金ヲ受ル亦名ナシトセスト、曰ク、君子言スヤ貧キカ為ニシテ仕ル者ハ尊ヲ辞シテ卑ニ居リ、富ヲ辞シテ貧ニ居ルト、季保苟モ宮室ノ広カラサルヲ患ヒ車馬ノ備ハラサルヲ慮テハ何為是ヲ行ハサル、夫唯然ラス、寵ヲ利リ位ヲ固ス、是其令名ヲ失フ所以ナリ、惜ヒカナ季保彊有力ノ士ヲ以テ大臣ノ体ヲ知サルコト、

四日　御近習番野元源五左衛門奥小姓へ転役被仰付、

源五左衛門ハ横目源左衛門カ嫡子ナリ、荒田里ニ家ス、爵世々小番タリ、幼フシテ童子以テ府学ニ入ル、成童ニ及テ父ニ従テ江戸ニ如ク、享和三年辛亥召サレテ御近習番トナル、今茲十月　公ニ従ツテ江戸ヨリ至ル、木藤武清大ニ大極ノ学ヲ唱ヘ、秩父・清水皆其門下ニ出ルト聞テ頭ヲ突テ是ニ趨ル、是ニ至テ為ニ奥御小姓ニ遷サル、

五日　太郎殿大目附へ転役ニ付家格寄合被仰付、家筋連名ノ次第岩下佐八郎次ニ被召入旨被仰渡、

秩父太郎

大目附江御役替被　仰付候間、家格寄合家筋連名之次第岩下佐八郎次ニ被仰付候、此旨可承向江可申渡候、

十二月　　信濃

六日　太郎殿大目附ヨリ御家老へ転役、加判同役同前、

座順鎌田典膳殿次被　仰出、御役料高千石被下置御勝手方へ相勤、表方御用可兼承旨被　仰付、大目附被仰

付ヨリ至是僅九日ト云云、

御家老　　秩父太郎殿

右之通今日　御直被　仰付加判同役同前、座順之儀者鎌田典膳殿次、御役料高千石被下置御勝手方江も相勤表方御用兼承候様被　仰付候、

右之通被　仰付候条、此旨表方江致通達奥掛御勝手方江も可相達候、

十二月六日　　信濃

初季保御目附タル時、清水盛之・若松平八等ト劄子ヲ上テ大目附以上寄合ニ升ルコトヲ議ス、以為寄合ハ民ノ長ナリ、宜ク身ニ止ルヘシ、宜ク世ニ及ホスヘカラスト、又嘗テ同僚ト語リ御家老山田有儀カ事ニ及テ曰ク、家老ハ国ノ相ナリ、須ク巨室ノ臣ヲ用ユヘシ、須ク寒族ノ士ヲ用ユヘカラスト、季保登用セラルヽニ及テ衆皆目ヲ側テ其動止ヲ視ル、是ニ至テ爵スルニ寄合ヲ以テスレトモ辞セス、禄スルニ国老ヲ以テスレトモ譲ラス、一ツモ言ノ如クナルナシ、故ニ　府下語シテ曰ク、病忘患風鄙野之子朝吐暮食不知其旨、

御納戸奉行勝部軍記御側御用人ヘ、御目附堀甚左衛門御納戸奉行ヘ、同河野安之右衛門御鉄炮奉行ヘ、御広敷番之頭八木孝次郎御広敷御用人ヘ、御小納戸見習川田梢（後次右衛門ト改名）御小姓頭取ヘ、同土岐仁之助御小納戸ヘ遷秩被仰付、御納戸奉行山本宇源多御鎗奉行ヘ、同面高源之丞御弓奉行ヘ貶秩被仰付、

軍記ハ本姓能勢氏、出テ勝部某カ嗣トナル、故ニ勝部氏ヲ冒ス、初削髪シテ清竹ト称ス、後還俗シテ今ノ称ニ改ム、少フシテ表坊主ヲ以テ大目附座ニ給事ス、遂ニ表御茶道トナリ又奥御茶道トナル、累ニ御小納戸ニ擢ラレ御納戸奉行ニ至ル、為人不学無議又他ノ技能ナシ、唯身ヲ敬テ上ニ奉ス、頗ル嬖幸ヲ得タリ、樺山久言・秩父季保志ヲ得ルニ及テ己ヲ恭フシテ是ニ事フ、敢テ違フコトナシ、故ヲ以テ為ニ仕用セラレテ御側御用人トナル、軍記新照院里ニ家ス、

爵世々御小姓与タリ、禄八十八石、
甚左衛門ハ御小姓組番頭四郎太夫カ嫡子ナリ、荒田里ニ家ス、爵世々寄合タリ、初彌八郎ト称ス、後今ノ称ニ改ム、寛政十一年己未正月十七日無役ヨリ起テ御目附トナル、甚左衛門素ヨリ秩父季保・清水盛之等ト刎頸ノ交アリ、常ニ往来シテ相与ニ国政ヲ評論シ人物ヲ品題ス、会集スル毎ニ必夜闌ニ至ル、二子志ヲ得ルニ及テ遂ニ是カ股肱トナル、是ニ至テ為ニ登用セラル、
安之右衛門故ノ御小姓組番頭外記通護カ子ナリ、竪馬場巷ニ家ス、爵世々寄合タリ、無役ヨリ起テ御目附トナル、初秩父季保カ母安之右衛門カ父ニ嫁シテ一女ヲ生ム、実ニ山田有昌カ妻タリ、既ニシテ其母昏ヲ絶チ改テ季保カ父ニ嫁ス、而シテ安之右衛門カ父更ニ堀甚左衛門カ姑妹ヲ娶テ安之右衛門ヲ生ム、故ニ安之右衛門季保ニ於ル其親ナシト雖トモ、女兄ノ同母弟タルヲ以テ是ニ来往スルコト猶姻族ノ如シ其登用セラル蓋職トシテ是ニ由ル、

七日　勝部軍記御側御用人へ転役ニ付代々小番被仰付、
十一日　御近習番岩山半兵衛御小姓転役被仰付、去ル四日野元源五左衛門同前御用雖被仰渡病気ノ故今日被仰付之、
今日太郎殿始テ御書付ヲ以諸御役場被仰渡、御勝手方御用人島津右平太通達之、
御勝手方江諸向より何そニ付吟味之趣又は調書差出置候ても未何分不相片付、其成ニ召置滞居候儀於有之は、来ル十五日限写を以可差出候、且本書何某江相付差出置候儀相知居候分は右之訳も可申出候、尤何分被　仰渡置候ても、於役場職分之道難叶御為ニ不相成、且国民及疾苦候儀有之候ハヽ、是又細々取調可申出候、此旨支配中江致通達奥掛・表方江も可相達候、

卯十二月　　太郎

十二日　太守様為御狩吉野へ　御光越、当番頭十二人御供被仰付、

十三日　先月弐日飛脚今日被差立、

十四日　隈元平太へ本澁谷名字ノ七左衛門御取揚屋敷上後迫、一ヶ所拝領被仰付、信濃殿ヨリ御用人二階堂左門御取次ヲ以被仰渡之、

平太本宅地ナク従姪軍六ニ依テ生活ヲナス、磯御茶屋番トナルニ及テ宮内ニ遷リ宮ヲ以テ家トス、既ニシテ御広敷番之頭トナル、仍権ニ御茶屋番ノ事ヲ領ス、尋テ抜擢ヲ蒙リ乃チ還テ軍六ト同居ス、是ニ至テ　特命アリ、別ニ宅地ヲ賜フ、

十七日　郡奉行平田平右衛門不宜聞得ノ趣有之、御役被差免、

十九日　御小納戸林安右衛門御納戸奉行へ、金山奉行税所新助物奉行吟味役勤へ、御側目附關山鬼散太・御供目附大重五郎左衛門・若殿様御付御小納戸松崎善八郎共ニ御小納戸へ、御鳥見頭大橋次平太御広敷番之頭へ転役被仰付、御小納戸頭取野村傳左衛門・御小納戸鷲頭喜兵衛共ニ御使番へ、御側目附平田桑衛道奉行御能方掛へ、同野田勘兵衛道奉行御鳥見頭勤へ、同大迫次郎九郎道奉行御鷹匠頭勤へ故職被仰付、横目曽木藤太郎・御目附御鳥見土師孫左衛門・御鳥見頭横目愛甲半藏御裁許掛見習被仰付、横目大河平喜左衛門・郡方書役東郷仲藏共吟味役被仰付、

安右衛門名ハ昌世、其先ハ国分ノ町人ナリ、売酒ヲ以業トス、曽祖玄珠ニ至テ医ヲ学ヒ乃遷テ　本府ニ家ス、祖父玄達遂ニ医ヲ以テ徴サレテ御側医師トナル、始テ爵御小姓与ヲ賜フ、父玄長亦御側医師タリ、銭ヲ入ルヲ以テ賞セラレ升テ小番トナル、昌世少フシテ府学ニ入テ文字ヲ学ブ、遂ニ諸生ヨリ起テ御記録方見習トナリ添役ニ遷サル、既ニシテ女弟　後宮侍スル故ヲ以テ擢ラレテ御小納戸トナル、初玄珠カ本府ニ遷ルヤ質ヲ委テ樺山氏ニ臣タリ、故ヲ以テ昌世毎ニ久言カ家ニ詣シ起居ヲ候シ、慇懃ヲ致スコト猶臣僕ノ礼ノ如シ、其登用セラル蓋亦久言カ力ニ頼レリ、昌世中懐ノ里ニ家ス、秩二百石、

新助本姓相良氏、出テ税所某カ嗣トナル、故ニ税所氏ヲ冒ス、加治木馬場巷ニ家ス、爵世々御小姓与タ

リ、少フシテ藏方目附ヲ以テ銭穀ノ出入ヲ監ス、遂ニ御代官ニ擢ラレ金山奉行ニ至ル、初秩父季保カ父ノ姉（川上甚左衛門カ祖姑）相良氏ニ嫁シテ今ノ市郎左衛門カ父及ヒ新助ヲ生ム、故ニ新助・季保ト内外兄弟ノ親アリ、季保既ニ志ヲ得テ多ク親族ヲ挙ク、新助・大河平隆器ト皆其一ニ居レリ、

五郎左衛門故ノ寺社奉行五郎左衛門兼寛カ孫ナリ、父ヲ仲兵衛ト云仕テ御供目附タリ、早ク死ス、故ニ五郎左衛門嫡孫ヲ以テ祖ニ承ク、初彌三太ト称ス、後今ノ称ニ改ム、祖蔭ヲ以テ無役ヨリ起テ御目附トナル、既ニシテ又御供目附ニ改ラル（文化元年）、初五郎左衛門カ祖姑限元軍六カ祖父与一右衛（門脱カ）ニ嫁シテ其父玄積ヲ生ム、既ニシテ昏ヲ絶テ大重ニ帰ス、与一右衛門既ニ死シ玄積後ヲ承ルニ及テ家貧フシテ自ラ給スルコト能ハス、五郎左衛門ガ祖父外姪ノ故ヲ以テ是ヲ棄ルニ忍ビス、時ニ粟ヲ与ヘテ養ヲ資ク、是ニ由テ限元氏大重氏ノ恩ヲ感スルコト久シ、五郎左衛門カ御小納戸ニ遷ル、限元二子蓋是ヲ与リ知レリ、五郎左衛門加治屋町里ニ家ス、爵世々小番タリ、禄二百三十石、

善八郎ハ御鉄炮奉行善兵衛カ嫡子ナリ、城カ谷里ニ家ス、爵世小番タリ、初十太郎ト称ス、後今ノ称ニ改ム、幼ヨリ召サレテ御小姓トナル、長スルニ及テ奥御小姓ニ改ラル、後御小納戸見習ニ擢ラレ御小納戸ニ至ル、皆世子ニ給事ス、善八郎毎ニ限元平太カ為人ヲ信シ是ニ親炙スルコト久シ、又秩父季保・清水盛之ト交厚シ、其本殿御小納戸ニ遷ル、蓋職トシテ是ニ由ル、

藤太郎ハ故ノ出水地頭代權之助カ子ナリ、西田里ニ家ス、爵世々小番タリ、頗ル文字ヲ好ミ秩父季保ト交ヲ通ス、故ヲ以テ為ニ登用セラル、

半藏ハ本姓坂元氏、出テ愛甲新右衛門（仕テ御裁許掛タリ古学党ニ与シテ職ヲ禁錮セラル）ガ嗣トナル、故ニ愛甲氏ヲ冒ス、滑川里ニ家ス、爵世々小番タリ、花車風流ヲ以テ清水盛之ト友タリ、其挙ラル盛之蓋是ヲ与リ知レリ、

喜左衛門名ハ隆器、郡奉行源右衛門カ嫡子ナリ、西

田里ニ家ス、爵世々御小姓与タリ、初学生ヲ以テ府学ニ入ル、頗ル才識アリ、句読師ヲ授ケラル、遂ニ句読師頭取トナル、会館中物論アルニアフ、乃自ラ引去ル、未幾ナラス請テ横目トナル、初秩父季保カ義父ノ母ハ伊地知喜右衛門カ姑ナリ、而シテ喜右衛門カ姓ハ乃隆器カ母タリ、故ニ隆器季保ト再内兄弟ノ義アリ、往来交親シ是ニ至テ為ニ挙ケラル、仲藏ハ上ノ園ノ里ニ家ス、爵世々御小姓与タリ、郡方書役ヲ以テ事ニ人馬方ニ従フ、曾テ樺山久言カ為ニ銭穀ノ事ヲ理ム、久言既ニ御勝手方ニ主タリ、乃引テ吟味役トス、

限元平太ヘ上後迫屋敷一箇所雖被下置、先被召揚追テ御見合ヲ以拝領可被仰付旨被仰渡、信濃殿御差図ニテ清水源左衛門取次之、

平太後迫ノ賜宅不便ノ故ヲ以テ同僚ヲ私シテ請フコトアル故ニ是　命アリト云云、

廿一日　郡奉行鎌田四郎左衛門御目附御裁許掛ヘ転役被仰付、一昨十九日御用雖被仰渡、他行ノ故今日承知之、四郎左衛門ハ西田里ニ家ス、爵世々小番タリ、初進達掛ヲ以テ大番座ニ給事ス、後唐船改ニ擢ラレ郡奉行ニ遷サル、頗ル才学アリ、郡山權助・木場傅内・芦屋驢齋〔ママ〕友タリ、交兄弟ノ如シ、其登用セラル三子蓋力アルニ与レリ、

廿三日　限元軍六御近習番被仰付、軍六事長崎御付人書役ニテ長崎ヘ相詰居ノ処、先月三日月番御用人倉山作太夫ヨリ、御用有之間可罷帰旨被仰越、依テ一昨廿一日罷帰、昨廿二日御届申出ノ処、今日如此被仰付、

軍六ハ先祖世々串良郷士タリ、五世ノ祖喜兵衛始テ徴サレテ御小姓与トナル、祖父与一右衛門嘗テ狂ヲ病ミ父玄積〔生カ〕上レナカラ目ナシ、軍六不肖ノ父祖ニ生レ顕悟ヲ以テ称セラル、甫メ十一歳ニシテ講堂童子トナリ米俵十八苞ヲ給セラル天明八年、成童ニ及テ造士館書役助トナル寛政四年、事ニ従フコト七年、嘗テ告フシテ市来温泉ニ往キ、無頼子ニ与シテ国老伊勢貞矩播磨ト称ス、ヲ浴舎ニ犯侮ス頭ニ髪ヲ三所ニ結ヒ身ニ毛氈ヲ纏フト云、、故ヲ以テ役ヲ奪ハレ家ニ閉塞セラル寛政十年、居ルコト三百日ニシ

テ免ス、未幾クナラス御記録所書役助トナル、事ニ従フコト僅ニ十余日、又故ナフシテ大磯ニ遊ヒ、少年輩ヲ助ケテ学生圖師長藏ヲ〔ママ〕路旁ニ陵暴ス（背ニ乗リ肩ニ上ル）、故ヲ以テ又役ヲ奪ハレ閉塞セラルコト初ノ如シ、亦七十日ニシテ免ス、文化元年甲子書役ヲ以長崎御付人上野善兵衛ニ従テ長崎ニ如ク、長上スルコト四年、為人膽気不羈ヲ負ヒ世務ヲ蔑視シ俗吏ヲ嘲弄ス、其長崎ニ在ル常ニ花柳街ニ遊ヒ放蕩淫佚至ラサルナシ、時ニ或ハ女娼ヲ召テ官舎ニ在リ、然トモ性巧機（物ヲ上手ニ仕合セ気点ノ能廻ルコト）ニシテ能ク事ヲ営弁ス、其御付人ヲ助ル亦少カラス、平生秩父季保・清水盛之等ト友タリ、交水魚ノ如シ、常ニ往来会集シテ已ス、又樺山久言ト善シ、久言志ヲ得ルニ及テ是公ニ薦メテ英才比ヒ罕ナリトス、故ヲ以テ長崎ヨリ召還サレテ御近習番トナル、累ニ御納戸奉行ニ遷サレ御側役ニ至ル（其事皆下ニ見ユ）、〔禄〕軍六高麗町ノ里ニ家ス、録十四石、是歳三十歳、

廿四日　頃日御用人格教授勤山本傳藏偽実学党発起スル由聞及ヒ、斥非論一冊ヲ相著シ学術ノ邪正故事ノ得失ヲ致評論、館中諸生ヘ所示諭ノ課業口諭一冊御家老中ヨリ被仰渡置、学規一冊ト相合セ奉備　御覧含ニテ、折角致清書ノ処、何人ノ為レ告ヤラン、（ルッゲ）　御側ヘ相聞得（時ニ木藤市右衛門・森岡孫右衛門造士館書役タリ）早速可差出旨被仰渡ノ間、三冊合テ学術ト名ケ序書相調今日林安右衛門御取次ヲ以　御前ヘ差出ス、

進二学術一序

竊ニ聞治道ト与二学術一相二為ス表裏ヲ者也、非二学術ニ無三以資ルコト二治道一、非レハ二治道一無三以行二学術ヲ一、学術正レハ則治道正シ、学術邪レハ則治道邪セ、故ニ曰、生ジテ於其心ニ害アリ二於其政一ニ、発ジテ於其政ニ害アリ二於其事一、学術之関二係於治道一ニ也大ナリ矣、臣山本正誼職為二教授一時ニ侍二講筵一ニ去年既献ス二治道ヲ一、今茲復上二治道続編一、又取テ文化元年所レ示二館中諸生ニ学術三巻ヲ一繕写呈上ス、于時文化四年冬十二月某日也、御用人格知府学教授事山本正誼謹テ撰ス、

廿六日　巳刻後山本傳藏　御側ヨリ御用ニテ罷出ルノ処

限元平太席詰ニテ森山三十御意ノ趣申渡ス、教授役ノ儀ハ諸生教育ヲ専トシテ他事ニ不レ可二差構一ノ処、猥ニ書ヲ著シ政事ヲ致二評論一ノ条奇怪ノ至ナリ、依テ所レ著ノ学術焼捨被二仰付一ノ間、草案等於レ有レ之ハ飜故類迄モ不レ残可二差出一、重テ政治ニ為レ預儀一切書申間敷旨被仰出ト云云、今日性理大全大極図助教ヘ講釋可レ被二仰付一旨被　仰出、森山三十書付ヲ以申達ス、

性理大全

大極図

右者御講釈可申上旨被　仰付候間、其心得を以八ツ時より可被罷出候、已上、

十二月廿六日

追て傳藏儀は外ニ御用候間、助教より可申上段被　仰付候、

上附
助教　　森山三十

只今

依テ未刻御右筆頭格助教勤橋口權藏・御記録方見習助教勤宮下主左衛門　御側ヘ罷出相扣ルノ処、押付　御前ヘ被　召出、大極図ノ首章講義被二仰付一權藏相勤レ之、御家老將監殿・太郎殿・大目附監物殿　御前ヘ被レ伺候、講義畢テ太郎殿高聲ニテ今日ノ講釋甚麁略ナリ、今一返可二相返一ト被レ仰、幾度雖レ読ト為二同前一ノ由權藏雖二謝申一、強ニ有レ仰ノ間、無是非重テ大意ヲ述ルノ処、解説ノ趣難二未聞得一由ニテ、主左衛門ヘ可レ講旨被レ仰、權藏同前ノ由主左衛門依二佗申一、軈テ三箇条ノ疑問ヲ発シテ權藏ヲ被二相詰一、權藏雖二弁説一更ニ無二合点一、已ニ及二大議論一、森山三十・限元軍六等呼出シ各意見ヲ被レ尋、何ニモ太郎殿ニ合体シテ一向ニ不通ナル由申ス、然ル間、大鐘已ニ鳴リ申下刻ニ雖レ及議論無二止時一、御前ニハ結句退屈ノ　御気色ナリ、依監物殿御前ニ向ヒ、今日ハ先是迄テ可レ然ト申上權藏可二罷退一由被レ申間、權藏・主左衛門　御前退出ス、傳藏儀ハ先刻　御叱ノ趣致二承知一、序手ニ御用モ為レ有レ之カ未タ御殿ヘ罷在ルノ処、助教大極講義被二仰付一由聞付、未刻前如二造士館一罷帰書籍方ヘ性理大全取ニ差遣ノ処、大極図ノ巻ハ書役木藤市右衛門見ユ後ニ拝借ノ由ニテ不二有

合一、市右衛門事当病ニテ不二罷出一ノ間、宿元ヘ取ニ可二差遣一ヤト雖致吟味、間後ニ相成不レ可レ然トテ島津藤次郎御小姓組番頭宅造士館ノ前ニ在ヘ申越、彼方蔵書借入漸致二持参一ノ故、時刻推移テ講義ノ間ニ不レ逢ト云云、

秩父季保早歳ヨリ学問ヲ好ム、訓導師種子島時敏伊蔵ト称ス、今御広敷番之頭タリニ従テ四書ノ句読ヲ受ク、稍長シテ助教赤崎偵幹源助ト称ス、後教授トナリ山本正誼ト職ヲ共ニス、尋テ御側役格ニ遷サレ江戸邸ニ長上ス、ニ就テ章句ヲ学フ、又、橋口子璉即権蔵カ門ニ出入スルコト久シ、後絶テ問ス、独精ヲ励シテ書ヲ読ム、昼夜懈ラス、時ニ或ハ二三ノ同志ノ講習討論ス、性質魯鈍ニシテ発明スル所ナシト雖トモ力ヲ用ルノ久フシテ、遂ニ其一班ヲ窺フコトヲ得タリ、素ヨリ慨然トシテ大志アリ、寃ヲ蒙テ閉居スルニ及テ愈奮ヒ愈励ム、耕稼ノ暇勤学シテ息ス、隈元軍六・川畑平蔵即森岡孫右衛門有馬次左衛門・奈良原助左衛門カ徒毎ニ来訪シテ、相与ニ学術ヲ評論シ人才ヲ品題ス、此数子ノ者嘗テ木藤武清即市左衛門、ニ従テ大極図説ヲ受ク、因テ其為人ヲ称シ為ニ其説ヲ言フ、季保仰キ慕フコト久シ、既ニ教ヲ得テ遂ニ武清ニ詣テ見ヘン事ヲ求ム、武清素ヨリ其名ヲ聞ク、屣ヲ逆ニシテ出迎ヘ款好笑語旧相識ノ如シ、季保図説ヲ出シテ疑ヲ質シ惑ヒヲ問フ、武清為ニ弁説シ畜フ所ノ秘訣ヲ悉シテ是ニ授ク、季保退テ人ニ語テ曰、治体ノ要ハ大極ニ備ル、木藤子ハ道徳ノ先生ナリ、図説ヲ究ム、吾是ヲ師トシテ足レリト、喜ブコト甚シ、遂ニ其同志樺山久言・清水盛之・森山三十ヲ勧テ武清ニ見ヘ其業ヲ受シム、是ヨリ日ヲ定テ往来会集シ相与ニ図説ヲ講論ス、未幾ナラス季保・久言皆御家老トナリ、盛之御用人トナリ三十御側役トナリ軍六御近習番トナル、是ニ於テ物論囂々トシテ流言已ス、教授山本正誼即伝蔵斥非論ヲ作テ　朝ニ上リ、其学党ヲ斥シテ偽実学輩トシ、又嘗テ書吏ト語リ武清ヲ称シテ大極先生トス、是ニ至テ季保等遂ニ大極ヲ以テ子璉及ヒ宮下希賢即主左衛君前ニ面斥ス、既ニシテ武清御広敷番之頭トナリ、亦大極ヲ以テ大奥ニ侍講ス、而シテ次左衛門・助左衛門等皆武清カ門人ヲ以テ御近習番トナル、是ニ由テ

国人其党ヲ名テ大極党トス、而シテ庸夫愚婦其説ヲ知ラス、大極ヲ以テ釈門ノ名トシ、図説ヲ以テ内典トス、事ヲ好ム者因テ武清ヲ目シテ大極禅師トシ、季保ヲ伝法沙門トシ、久言ヲ護法善神トスト云、其余各其称アリト雖トモ未是ヲ聞ス、軍六幼ヨリ書ヲ読ムコトヲ好ミ、句読師松元泰寛（千左衛門ト称ス今訓導師タリ）ニ従テ句読ヲ受ク、遂ニ府学ニ入テ業ヲ肄フ、略経伝ニ渉リ兼テ文字ヲ作ル、後木藤武清カ門ニ遊テ図説通書等ノ書ヲ受ケ頗ル大意ヲ見ル、衆推シテ木門ノ高弟トス、三十モ亦少フシテ書ヲ読ミ詩ヲ賦ス、業ヲ赤崎楨幹ニ受ケ、又宮下希賢ト遊フ、後秩父季保ニ従テ木藤武清カ門ニ出入シ図説ヲ講論ス、略聞クコトアルニ与レリ、

廿七日　隈元軍六御近習番ヨリ御納戸奉行ヘ転役被仰付

御近習番被仰付ヨリ至是僅ニ五日ト云云、橋口權蔵病気ノ由ニテ従今日出勤無之、宮下主左衛門儀ハ首尾掛ノ御用有之間今日迄ハ致出勤ト云云、

廿八日　隈元軍六御役ニ付一代小番被二入置一

廿九日　主税殿造士館ヘ被二掛置一、折々出席諸生教育可二行届一様可二取計一旨被二仰付一、疱瘡未平愈シテ間以二名代一被二承知一之、

樺山主税殿

右造士館被掛置候条、折々致出席学館中之儀承之、諸生教育等万端行届候様可取計旨被　仰付候、此旨教授江申渡、可承向江も可申渡候、

十二月　信濃

久言少ヨリ学問ヲ好ミ日置兼儔（五郎太ト称ス後ニ見ユ）ニ従テ学庸等ノ書ヲ受ク、又久保之兄等ヲ師友トシテ相与ニ義理ヲ講究ス、性質甚鋭カラス、其意ヲ得ルコト少シ、後秩父季保勧テ木藤武清カ門ニ学ハシム、遂ニ之兄等ト絶チ、季保及ヒ清水盛之・森山三十等ト日夜会集シテ大極図説ヲ討論シ、自ラ以テ道ノ大本ヲ知レリトス、初山田有儀国老ヲ以テ府学総教事ヲ掌ル、是ヲ造士館掛ト云、有儀既ニ死シテ其職亦廃ス是ニ至テ久言ニ　命シテ有儀カ後ヲ襲カシメラル、今日太郎殿再ヒ御書附ヲ以大身分以上并諸士ヘ被仰渡

清水源左衛門通達之、

講堂之儀は御領国中諸人一統学問相励往々御用立候様ニとの　御趣意ニて御造立被　仰付、就中大身分以上之重御役とも被仰付事故、押并学問可致出精、若又等閑之向も候ハ、父兄より致教訓、行状正敷文盲無之様可仕旨分て被　仰出置候得共、講堂出席之人数有少去々年　御沙汰之趣有之其段申渡置候処、此節尚又　御沙汰被為　在候条御賢慮之趣得と奉汲受、先達て申渡置候通式日無闕座致出席於宅も出精可有之、諸士之儀も夫々相応之勤方をも被仰付事候故、文盲有之候てハ理非弁別届兼候儀も可有之事候間、若年之折より折角心掛追々御用立候様可致出精候、此旨向々ニも可申渡候、

十二月　　太郎

晦日　従限元平太教授助教ノ内一人御用有之由申達ス、

依テ助教寄山口大右衛門（後御記録奉行御供目附勤ニ遷ル、事後ニ見ユ）罷出ルノ処書附一通相渡ス、

山本傳藏へ

一講堂諸生之内心掛も宜廉直成者も有之候ハ、、大概其生質年輩等助教申談可書出候事、

一諸士聴聞日外ニ講堂中迄は講釈日有之候ハ、、奥向人数之内より間ニは聴聞ニ可差越候間、其節ハ折角丁寧ニ講聞セ候様被　仰付候事、

御作事奉行御裁許掛勤山口孝右衛門何分被仰渡迄之間勤方可差扣旨被仰渡、

今月主税殿・太郎殿へ御腰物正清拝領被仰付、共ニ赤銅拵ニテ金御紋相付ト云云、

今月上旬比ヨリ主税殿疱瘡被相煩出勤無之、

〔文化〕同五年戊辰

正月

二日

今日梅之間講釈山口大右衛門相勤、終て来ル八日八ツ後近思録侍講可被仰付旨前以　御内証候段、森山三十より大右衛門致承知傳藏江申聞候事、

五日　卯刻

太守様為御鷹野谷山へ　御光越、御側役讃良善助・限元平太・御〔小脱カ〕姓頭中山次兵衛・川田稍、御小納戸二階堂左守、奥御小姓吉井新七郎・大橋彦次郎、奥御茶道西嘉長見ユ後ニ等御供ニ候ス、

六日　御滞在、今日於御仮屋鶏蹴合　御覧ノ由相聞ユ、且相僕〔模カ〕御覧可有之由ニテ、御鳥見高島善之丞・伊地知筑右衛門罷帰人数相催スト云云、

物奉行吟味役勤大場市左衛門・郡奉行格吟味役勤上原源兵衛・吟味役肝付彦八何分被仰渡迄ノ間相慎可居旨被仰付、

七日　従谷山御乗船ニテ築地御茶屋へ被為入、夫ヨリ御帰殿、

十一日　御近習番若松新之丞御供目附へ、唐船改尾上甚五左衛門御目附御裁許掛へ転役、御馬廻伊集院善太夫・寺社方取次無役奈良原助左衛門・御庭方助佐竹次郎右衛門・横目宇宿十次郎・宗門方書役助有馬次左衛門共ニ御近習番被仰付、

甚五左衛門ハ故御用人甚五左衛門言房カ孫ナリ、父ヲ權六ト云、職ナシ、早ク死ス、甚五左衛門初奥御小姓タリ、後寺社方取次ニ遷サル、久フシテ唐船改ニ改メラル文化二年、頗ル才学アリ、未大道ヲ聞ス、樺山久言・秩父季保志ヲ得ルニ及テ、甚五左衛門ガ妻ハ清水盛之カ姉ナリ、因テ盛之ニ従テ二子ニ通ス、二子其与ニ事ヲ権ルヘキヲ知ル、遂ニ登用ヒテ御目附トシ御裁許掛ノ事ヲ掌ラシム、甚五左衛門天神馬場巷ニ家ス、爵世々小番タリ、禄六十石、

善太夫ハ故ノ御勘定奉行四郎兼風カ子ナリ、千石馬場ノ巷ニ家ス、爵世々小番タリ、上邸労ヲ以テ御馬廻トナル、清水盛之等ト友トシ善シ、其寺社方取次ヲ授ケラル、盛之蓋是ヲ与リ知レリ、

助左衛門ハ故ノ山奉行喜右衛門カ次子ナリ、兄傳仕テ御小姓タリ、早ク死ス カ後トナル、高麗町ノ里ニ家ス、爵世々小番タリ、次左衛門ハ山方下目附郷八カ嫡子ナリ、亦高麗町里ニ家ス、爵世々大番タリ、皆木藤武清ニ従テ近思録ヲ受ケ秩父・樺山ト断金ノ契アリ、二子志ヲ得ルニ及テ道路流言ス、次左衛門・助左衛門皆将ニ登用セラノ

ントスト、是ニ至テ果シテ御近習番ヲ授ケラル、

次郎右衞門ハ御作事方下目附納右衞門カ嫡子ナリ、上ノ園里ニ家ス、爵世々小番タリ、近思録ヲ木藤武清ニ受ケ又限元太平ト交ヲ結ブ、其登用セラル職トシテ是ニ由ル、

十次郎ハ宗門改役雅次郎カ嫡子ナリ、草牟田ノ里ニ家ス、爵世々新番タリ、茶事ヲ以テ清水盛之ト友タリ、其登用セラル盛之是ヲ与リ知レリ、

太郎殿志布志地頭職被仰付、勝部軍記山ノ口、清水源左衞門曾於郡、森山三十福山、限元平太郡山地頭職被仰付、

十四日　有馬次左衞門依願一郎ト改名被仰付、御側役日高次左衞門ヘ差合ニヨツテ也、

十五日　清水源左衞門御用人ヨリ御側御用人ヘ転役（御用人被仰付ヨリ是ニ至テ僅ニ五十余日）、限元軍六御納戸奉行ヨリ　若殿様御附御側役ヘ転役（御納戸奉行被仰付ヨリ是ニ至テ僅ニ十九日）、御小納戸有川恰御側目附ヘ改職、造士舘書役木藤市右衞門御広敷番之頭被仰付（諸座書役ヨリ直ニ六人賦御役人被仰付儀、不相成御格ノ処、此節ノ儀ハ人才ヲ以被仰付由ニテ御格ニ不構ト云云）

市右衞門名ハ武清、本姓江夏氏、今ノ次左衞門ト祖父ヲ同フス、父仲左衞門〔ママ〕テ木藤某（木藤休之進カ別族）カ後トナル、故ニ木藤氏ヲ冒ス、仲左衞門仕テ府蔵書役吏役タリ、職某氏ヲ娶テ二子ヲ生ム、長ヲ平右衞門ト称ス、嘗テ出物蔵役人タリ、見ニ事ニ座シテ終身ヲ禁錮セラル、次ハ即チ武清ナリ、武清次子ヲ以テ族ヲ別ニス天明五年乙巳造士舘書役助トナル、寛政九年丁巳十一月十二日進テ書役トナル、武清為人質朴ニシテ文飾ナシ、語言固渋ニシテ歩履軽忽ナリ、少ヨリ世利ヲ厭ヒ紛華ヲ遠ク、妄ニ〔ママ〕ト交ラス独太史本田親孚九孫（邸ト称ス後ニ見ユ）ト友タリ、学ヲ好テ篤ク志シ寒暑ヲ冒シ寝食ヲ忘ル彊テ息ス、敦ク程朱ヲ崇ヒ鳩巣ヲ信ス、力テ漢儒ヲ廃シ徂来ヲ斥ケ力ラヲ近思録ニ用ヒ、尤大極図ニ精シ旁通書正蒙ニ及フ、然トモ独学ニシテ師ナク孤陋ニシテ聞コト寡シ、故ニ思ヲ蓄ヘ慮ヲ研クト雖トモ杜撰臆見ノ病ナキコトヲ免レス、其学博キヲ勉ス、四子六経ト雖トモ未嘗テ通誦〔ママ〕ス、温公通鑑・朱子綱目ニ至テハ全然トシテ治ルコトナシ、常ニ

性命道徳ノ理ヲ講シ一本万殊ノ妙ヲ唱ヘ、君子己ヲ修メ人ヲ治ルノ道ニ於テハ不急ノ事トシ措テ問ス是ヲ以テ周禮ノ大経春秋ノ大義闇然トシテ弁フコトナク　里人嫡孫ヲ以テ祖ニ承ル者アリ、其祖母死ス、是カ為ニ重ヲ服ス、武清是ヲ疑フ、人曰ク、祖ノ後タル者祖父母ノ為ニ重ヲ〔ママ〕ルハ礼ノ通経ナリト、武清黙然タリ、　リ問フ異姓ヲ立テキカ武清曰、名アレハ義アリ、義アレハ感ス自然ノ祭祀に位ム、理ナリ、苟モ其名アル者異姓ト雖トモ神何ソ享サラントト亦莒人郳ヲ滅スノ義ヲ知サルニ由ルナリ、古今ノ治乱帝王ノ興廃悁如トシテ知コトナシ、教授嘗テ武清ヲシテ文庫ヲ開テ通鑑・威烈・王紀ヲ取来ラシム、反報シテ曰ク、通鑑時ニ或ハ山ニ遊ヒ水威烈王ナシト、其寡聞ナルコト如此、ヲ翫ヒ興ニ乗シテ詩ヲ賦シ文ヲ作ル、皆拙フシテ読ムヘカラス、故ニ博聞多識ニシテ有力ノ輩皆議笑シテ偏固ノ陋儒トシ従ヒ学フ事ヲ願ハス、浅見寡聞ニシテ微力ノ徒多ク仰キ慕フテ已ス、相唱テ周子ノ再来トス、是ニ於テ樺山久言・秩父季保・清水盛之・森山三十等皆其門ニ出テ日夜会集シテ大極図説ヲ討論シ吾道足レリトス、数子志ヲ得ルニ及テ相与ニ是ヲ

公ニ薦メテ道徳ノ先生トス、是ニ至テ遂ニ書役ヨリ挙ラレテ御広敷番之頭トナル、武清上ノ園里ニ家ス爵御小姓与タリ、禄ナシ、是歳四十四歳、

伊地知筑右衛門屋敷百五十坪高麗町下馬場　御買入ニテ隈元平太ヘ拝領被仰付、信濃殿ヨリ御用人相良此右衛門御取次ヲ以於敷舞台被仰渡之、今日於御座之間孟子公孫丑上篇　講義被仰付山本傳藏勉之、三御役衆伺候如例、

頃日両刀ヲ帯シ頭巾ヲ為被者近思録ヲ売ラント相呼リ毎夜高麗町上ノ園辺致徘徊ト云云　一夜其カ家ニ召テ直ヲ問フニ一冊二百両ナリト答フ、全部アリヤト曰ヘハ道体アツテ治、体ナシト云、其来ル所ヲ知ルコトナシ

十六日　隈元軍六御側役ヘ転役ニ付代々小番被仰付、木藤市右衛門御役ニ付一代新番被入置　二月朔日釈菜如例年被仰付旨被仰渡、　未刻後山本傳藏并山口大右衛門

御前ヘ被　召出近思録治体篇講義被仰付傳藏勉之、畢テ　御不審ノ儀共数条及　御尋、且明日御歌会有之ノ間致詩作可差上由ニテ傳藏ヘ　御題被下之、申刻比傳藏・大右衛門

御前退出ス、　今日巳ノ刻後御右筆頭格御家老座書役勤久保孝兵衛金山方ヘ差越シ、山本傳藏親類金山奉行

小倉喜藤太呼出シ、傳藏殿事島方訴〔ママ〕詔ノ願望有之由、弥於為其通ハ名前被差出可然、有左老体ニモ為被及間退役被願出含共ニテハ有之間敷ヤ、此旨我沙汰ニテハ無之私ヲ以及御尋由致演説、是従典膳殿ノ為御内意由相聞ユ（典膳殿当月御月番）、然レハ喜藤太早速御座致退出、同親類得能新助・牧瀬清右衛門申談シ、孝兵衛演説ノ趣傳藏ヘ可申聞由ニテ相列立御役宅ヘ差越ノ処、已ニ未ノ刻ニ相及ヒ傳藏儀ハ兼テ御諚有之未刻前ヨリ　御前ヘ罷出ルノ間行違ヒ不相逢、依テ罷帰迄相（虫クヒ）有成ノ趣申聞ルノ処、右体ノ儀可到来ト心当為致居由ニテ為騒体無之ト云云、

頃日一首ノ狂歌世ニ流布ス、不知何人所作

大極の中に引たる一ひきは
陰と陽との分れ待つ身か

（本文大極ハ蓋シ陰静陽動ノ図ヲ指シテ云、一圏ノ大極ヲ謂ニ非待松身三和訓相同）

十七日　山本傳藏助教黒田才之丞ヲ以御側御用人ヘ相付退役ノ願書差出ス、

十八日　申刻後木藤市右衛門初テ於大奥御前ヘ被　召出、大極図説講義被　仰付御菓子被下之、自是或ハ三日或ハ五日ヲ隔テ御前ヘ罷出講義相勤ト云云（市右衛門進講ニ因テ折節金子反物拝領被仰付ト云云）、

明十九日七ツ後
御前江被　召出候様之　御書付致承知候、此旨奉畏候、已上、

四月十八日
上封　御広敷　木藤市右衛門

御堅勝御出勤可被成奉賀候、然は私事今七ツ時より被　召筈候処ニ、昼時分より殊之外熱気差発リ、如何様疝気ニても候哉と存申事御座候、右ニ付罷出候儀御断申上候間、此旨　御届被仰上被下度　御頼申上候、已上、

四月廿一日
御広敷番之頭中様　木藤市右衛門

図説講義半アリ、中庸講義被相始両書合講ノ処、図説ノ儀ハ全篇相済通書ニ相移ル、中庸ノ儀ハ畢講為有之ヤ否ヤヲ不知、

十九日　御広敷医師山内元軒・御広敷寄番医師西玄嘉・無役森元高見共ニ奥医師被仰付、

高見名ハ貞謙、故ノ御下屋敷御番医師高見貞興カ嫡子ナリ、初元蘭ト称ス、後今ノ称ニ改ム、少フシテ家学ヲ伝ヘ又東武ニ遊テ業ヲ〔マ〕〔マ〕ニ受ク、既ニ反テ人ノ為ニ病ヲ治ム、往々回春起死ノ功アリ、是ニ由テ父ニ継ヒテ名ヲ都鄙ニ顕ハス、貞謙素ヨリ清水盛之ト金蘭ノ契アリ、又秩父季保ト交親シ是ニ至テ為ニ登用セラル、貞謙本天神馬場巷ニ家ス、後加治屋町里ニ遷ル、今頭屋馬場巷ニ住ス、家世々御厩附士タリ、父貞興ニ至テ始テ御小姓組トナルト云、元軒ハ故ノ御広敷御用人格奥医師元貞カ子ナリ、父ノ業ヲ継キ〔ママ〕医ヲ以テ御広敷ニ給事ス、是ニ至テ秩父季保カ為ニ挙ラル、元軒平馬場巷ニ家ス、先祖世々島津木工家臣タリ、父元貞ニ至テ始テ徴サレテ御小姓組トナルト云、

玄嘉少フシテ医ヲ業トス、仕テ御広敷寄番医師〔ママ〕神農堂講釈医師ノ事ヲ領ス、頗ル医経ニ通ス、是ニ至テ亦秩父季保ガ為ニ挙ラル、玄嘉〔マ〕〔マ〕ニ家ス、家本郡山郷士、給事ノ年労ヲ以テ一代御小姓組トナル、

御作事奉行御裁許掛勤山口孝右衛門不宜聞得ノ趣有之御役被差免御奉公方被障置、新番山口佐九郎孝右衛門兄、亡佐左衛門子母先年子細有之、親類中ヨリ親兒玉利右衛門当勇四郎祖父御広敷御用人当分隠居利中方ヘ相返置ノ処、佐九郎方ヘ呼取可致介抱旨被仰渡此一条其由来有之ト雖トモ事長キ故是ヲ記サス、別ニ断論一篇アリ、併考フヘシ

廿一日　山本傳蔵如願ノ御役被相免、多年首尾能相勤ノ間一世御養料五石被成下、紗綾四巻拝領被仰付、　御記録方添役助教勤黒田才之丞教授ヘ転役、造士館内ヘ不及引越私宅ヨリ可致日勤旨被仰付、御記録方添役造士館勤山口大右衛門御記録奉行ヘ転役、勤方本ノ通被仰付、御近習通訓導師勤東郷貞助助教被仰付、訓導師黒田新左衛門・教講藤井助左衛門共ニ御近習通被仰付、先是日置五郎太後ニ見ユ ヘ教授、木藤市右衛門ヘ助教被仰付御内諚ノ由風聞有之館中致動揺ノ処、今日如此被仰付ノ間良相静ルト云云、

廿二日　異国船掛書役薬丸良助唐船改被仰付　山本傳藏
御上下一具拝領之、
廿三日　太郎殿依願伊賀ト改名被仰付、
太郎殿事
秩父伊賀殿
右改名願之通被仰付候、此旨表方奥掛御勝手方江も可
致通達候、

正月　典膳

或曰ク、初季保河内ト改称セント欲ス、御記録奉行ニ
下シテ諱ム所無ヤ否ヤヲ議セシム、御記録方添役相良
甚太夫御家老座ニ造テ対テ曰ク、伊作家八世ノ主ヲ久
逸ト曰フ、河内守ト称ス、実ニ　大中公ノ曽祖考ナリ、
大中公大宗ノ後ヲ承ケ兼テ伊作家ノ祀ヲ主トリ玉フ、
故ニ臣子其称ヲ諱ムコト猶　先君ノ称ヲ諱ムカ如シ、
未嘗テ犯ス者アラス、公豈ニ是ヲ知サルカ、季保蹙然
トシテ曰ク、吾是ヲ知サルニ非ス、顧フニ先大夫二階
堂河内アルト、嘗テ其称ヲ犯ス、先史何ソ是ヲ斥ケサ
ル、甚太夫曰ク、是　特恩ニ出ツ、事体初ヨリ今日ト
異ナリ先史猶議ヲ上ツテ不可トス、然トモ命令已ニ行
下シテ復反スヘカラス、公是ヲ以テ例トセザレ、季保
良久フシテ曰ク、如此ナラハ当ニ以聞シテ進止ヲ取ル
ベシ、甚太夫声ヲ厲マシテ曰ク、公向ニ諱ム所無ヤ否
ヤヲ以テ某等ニ下シテ議セシム、故ニ某等議ヲ上ツテ
諱ム所アリトス、然ルニ又以聞セント欲ス、某於テ法
ヲ執ラズンハアラスト、季保辞ナシ、甚太夫乃チ退ク、
廿六日　御小姓組番頭島津藤次郎・御用人兼務当番頭島
津杢・同島津小平太共ニ御用人勤被仰付、御勘定方小
頭御徒目附勤有馬次郎右衛門金山奉行ヘ転役、〔ママ〕来月
朔日釈菜被召延島津兵庫殿ヘ
太守様御名代、島津將監殿ヘ
御隠居様御代参被仰付置被相免〔ママ〕諸郷御鷹場御引取
壱匁出銀御免被仰付旨被
仰出、今日御家老衆連名ノ御書付ヲ以被仰渡、御用人
石原龍助通達之、
一諸郷御鷹場一往御引取被　仰付、尾畔下御場之儀は
当分通

壱匁出銀牛馬船迄惣て御免
右は御所帯方極々被為及御難渋御領国中致困究、諸人別て難儀之旨被　聞召上、厚御仁徳を以、右之通引取又は可差免旨被　仰出奉承知候様誠ニ以難有次第奉存候、此旨可奉　承知旨表方江致通達、奥掛御勝手方江も可相達候、

正月　　将監
信濃
典膳
伊賀

今日
太守様　花尾山并　一ノ宮へ　御参詣、東俣御茶屋へ御逼留（逼カ）
廿七日　物奉行吟味役勤東郷半助何分被仰渡迄ノ間相慎可居旨被仰付
御所帯方御難渋ニ付　御古代様御振合ヲ以諸事可取縮様被仰出、今日御家老衆連名ノ御書付ヲ以被仰渡、相良此右衛門通達之、
御所帯向御難渋御勤向等も難相調程之御勢ニ成立候間、我々　御前江被　召出
御直ニ御趣意之趣奉承知
御古代様御振合を以万端取縮致吟味候様ニ
御内沙汰有之候間、諸御役場其考を以当御規定存合差扣候ては却て不本意之筈候間、右様之御趣意を奉汲受向々無遠慮御取縮致吟味早々可申出候、
右之趣表方江致通達、奥掛御勝手方江も可相達候

正月　　将監
信濃
典膳
伊賀

今日於花尾鹿倉御狩為有之由、　御獲物御納戸へ参ルト云云、
廿八日　大場市左衛門・上原源兵衛共ニ御役被差免逼塞被仰付、肝付彦八役儀被差免御奉公方被障置、吟味役大山郷右衛門蔵方目附へ貶秩被仰付、
伊賀殿御書付以諸向へ被仰渡趣有之、相良此右衛門通

達之、

諸郷御鷹場惣て御引取ニて尾畔下御場之儀は、是迄之通被仰付置候段は別段申渡通候、右ニ付てハ鹿兒嶋より三里四方鉄炮打候儀は已前より御禁制之事候条、弥以無違背可相守候、尤自分持留地抔ニて兎狩犬山鳥いたし候儀は不苦様ニ自然取違之者も候ては不可然候条、右体之儀は勿論作場等蹈荒シ候儀堅令停止候、此旨表方江致通達、奥掛御勝手方江も可相達候、

正月　　伊賀

今日

太守様花尾ヨリ　御帰殿

今月　隈元軍六於　御前大極図説首章講義被仰付　御疑ノ儀トモ及　御尋ノ処、刀ノ拵ニ譬ヲ取御答申ストニ云云、奈良原助左衞門・佐竹次郎右衞門・宇宿十次郎有馬一郎共ニ紬・丹後島・小倉島類四反宛、真綿一把宛拝領被仰付、主税殿疱瘡未相愈内懐同前被相煩養生不相叶死去、然レハ主税殿漸雖及平愈忌中ニテ未出勤無之ノ処、忌御免被仰付今月下旬比ヨリ出勤、　伊賀殿川上甚左衞門家屋敷（中渡瀬観音通ニ在）買取被引移、早速ヨリ修甫取付玄喚長屋等出来有之ト云云、

教授黒田才之丞・御記録奉行造士館勤山口大右衞門并学校目附與倉孫右衞門・福永仁右衞門御用有之間、主税殿宅へ可罷出旨従伊賀殿被仰渡、未刻後四人共ニ致伺候ノ処、主税殿御直対ニテ御用ノ趣被仰渡、才之丞・大右衞門ヘハ館中人物ノ善悪等別段御問条ト云云、

初秩父氏宅中村里ニ在リ、季保襲家ノ初仍是ニ居ル、既ニシテ其宅ヲ鬻キ還テ弟季達カ家ニ寓居ス、環堵蕭然風日ヲ覆ハス、御用人トナルニ及テ乃チ玄喚ヲ作ル、広サ一間四方、葺クニ茆茨ヲ以テス、尋テ大目附トナリ又国老トナル、室堂陋隘ニシテ公事治ルコト能ハス、是ニ至テ川上氏ト謀リ其宅ヲ買テ是ニ遷ル、

二月

二日　未ノ刻後大番頭以下御用人迄　御本丸外御庭御茶屋ノ被為　召、御吸物・御銚子并御菓子被成下御掛物

一幅宛拝領被仰付、麥麵切従相中進上之　御前　御出座、軈テ　御入有頃又々御出御挨拶等有之ト云云、

当御時節ニ付春秋釈菜一往御取止被仰付旨、従信濃殿被仰渡、

御隠居様御代安永二年巳八月聖堂御創建、以来毎年春秋釈菜相行ハレ三十年来間断無之ノ処、至是儀式被相止　先月式日飛脚被召延置今日被差立、

三日　隈元軍六　長崎御附人書役ニテ長崎ヘ相詰居ル節御用筋取馴御内用一件為致骨折由ニテ、御取分ヲ以去年六月廿五日已ニ宗門方御銀壱貫五百目御取替被仰付置ノ処、此節又々同御銀ノ内四貫目三部利無質物ニテ五ケ年限拝借被仰付、御物方御取替ヲ以長崎表他借御返済被成下旨被仰付、今日御勝手方御用人伊集院平取次御証文ヲ以被仰渡、

銀四貫目　　隈元軍六

右は多年長崎江相詰居地役人等之内段々懇意之向も有之、場所柄之儀ニて附届旁不軽及物入、都て他借を以差操置候処、此節俄ニ彼地引取候付ても至て令難渋候段、在勤御付人内訴申越趣有之、他所向取替ニ付ては難捨置、取分を以宗門方御銀之内、右之通三部利無質物ニて五ケ年限御取替申付、於長崎渡方之内意申出候付、御物方御銀之内右之通取替を以於長崎相渡、宗門方御銀廻合次第返銀申付候条、早々問合之上渡方等如例可申渡也、

辰正月廿八日

此表書之通如例可申渡也、

辰二月三日　　御勝手方印

造士舘内山本傳藏所被召置ノ御役宅引取被仰付旨被仰渡、　今日飛脚江戸ヨリ到着、

四日　御家老市田出雲殿当御役ニテ定府被仰付置ノ処、被　聞召通趣有之、御役并定府被差免旨被仰出、出雲殿聟御小姓組番頭赤松造酒（隠居円山嫡子）　御用ニテ被仰渡之、

来ル十日急ニテ罷上リ可列下旨被仰付（来月初江戸ヘ上着、四月中是非列下水上ヘ於致着ハ早速以飛脚可連越旨被仰付、）

五日　若年寄島津安房殿当年江戸詰被仰付、来九日急ニ

テ可致出立旨被仰渡、出雲殿御当地ニテ御役被差免ニ付

御隠居様へ為ニ御届被差越、御家老交替迄ノ間為ニ御留守詰被召置由相聞ヱ、

六日　伊賀殿嫡子秩父恒次郎　御前元服被仰付太郎ト改名将眞ト名乗ル、御折三合・御樽二荷・御太刀銀馬代進上之、小サ刀一腰拝領之、依秩父氏家例也、

八日　隈元軍六綾地頭職被仰付、　山本傳藏所被召置ノ御役宅入札払被仰付旨被仰渡、

九日　御側役讃良善助御側御用人へ転役、勤方本ノ通被仰付、

今日島津安房殿　御当地出立、用達廻次兵衛・旅用達久留助市被召付、中途宿札等都テ石神彦八名前可相用旨被候付ト云云、

十二日　御勝手方両御家老衆被仰渡趣有之、御勝手方御用人島津右平太覚書ヲ以諸向へ申渡ス、

一御勝手方江内意之趣を以訴詔事差出候節は、是迄は用達又は内用頼其外手便ノ者江相頼、於宅内意申込候上書付差出来候得共、以来は御用人取次を以可差出候、尤御用人も於宅内意等仕来候向を以承間敷候、

一吟味役書役之儀も於宅内意等承間敷候、

一依役場之向は訴詔事御勝手方御家老江直ニ申込候者有之候付、以来は右様之儀御用外致間敷候、

一役場訴詔之趣を以御用紙ニて内意事相認差出候向も有之、御用書付ニ紛敷甚如何之至候間、向後は御用紙御用書付外一切私用ニ召仕間敷候、

一奉行頭人并書役等之儀も諸人訴詔内意於宅一切承間敷候、

右之通可申渡旨御差図ニて候、以上、

二月十二日　　島津右平太

信濃殿口達覚書ヲ以被仰渡趣有之、御用人名越右膳諸向へ申渡ス、

御役場受持之儀何事ニ依す取扱方首尾合等何様ニ取計候旨、事々ケ条書を以委細可被申出候、

一御役場之内ニて掛リ相分リ候ハヽ、何々ニ付掛リ幾人ツヽ相分リ候段可被申出事、

一書役下役幾人ニて、右之内其式何方又ハ掛相分候ハ、何々ニて幾人差分候旨可被申出事、
但新規ニ相重候書役下役等は其訳可被申出候、
一触番手伝等仕等幾人召仕候旨可被申出事、
但新規ニ相重ニ分候其訳可被申出候、
一田舎旅有之候ハ、何様之儀ニ付年分幾人程幾日位致旅行候段可被申出候、
一筆紙墨其外入用之品員数品位可被申出事、
一御用品買入方并諸所江差送候仕向之次第可被申出事
一支配下之役所并御蔵々等之儀右ヶ条を以相糺可被申出事、
右之通向々江可申渡事、
二月
別紙之通信濃殿より口達之覚書を以被仰渡候間致通達候、
二月　名越右膳
十三日　御小姓組番頭市田壬生（市田出雲嫡子）親類御用ニテ、病気分ヲ以御役御断可申出旨被仰渡、名越右膳申渡之、
關山軍兵衛（壬生妹聟関山新六父、御小姓与番頭）承知之、
十四日　市田壬生依願御役御免、以前御近習通雖被仰付置是又被差免、　御勝手方両御家老衆被仰渡趣有之、
島津右平太書付ヲ以諸向へ申渡ス、
文化二年丑八月より同三年七月迄穀物は勿論金銀銭其外座々入用之品々迄も、本払御用之間総書一紙を以来月廿九日限可被申出候、尤支配下之内江入払有之向はさし文相糺不洩様可被申出旨御差図ニて候、
已上、
但御支配下之分取揃可被差出候、
二月十四日　島津右平太
十五日　巳刻後
太守様為御湯治踊安樂村へ　御光越、御側御用人勝部軍記・御側役限元軍六・御納戸奉行村田孝右衛門・御小納戸二階堂左守・大重五郎左衛門、奥御小姓平田肇吉井新七郎・野元源五左衛門・伊集院岩五郎（見後）・相良斧太郎・肝付孝吉・岩山半兵衛・早川太郎・伊集院萬次郎（見後）・鈴木吉太郎、奥御茶道村田山雪・西嘉長（見後、

奥医師永田元貳・馬場長雲・桑畑伯仙・安山検眼御供ニ候ス、午ノ刻比島津因幡殿登　城、為　御名代主税殿伊賀殿へ御用被仰渡、主税殿事御用有之〔ママ〕間江戸へ被遣、伊賀殿事当年江戸詰并来年御留守詰迄被仰付ト云云、先是伊賀殿唐物商売参覲御断十五年、金子拝借十五万両等為強訴江戸へ被差越含有之由風聞スル処ニ、今日如此被仰付、

十七日　従御湯治先限元軍六為御使主税殿宅へ被差遣、不知何旨趣、軍六今夜私宅へ一宿、翌日如元差越スト云云、

二月十五日已後為仕舞料椛山江壱貫目、秩父江弐貫目拝借被仰付候云云、外ニ拝借モ可有之欤、

十八日　伊賀殿御用有之御湯治先へ被差越、

十九日　大目附以上日勤台輪賀籠雖用来、一往歩行乗馬駕籠勝手次第ニテ供廻等モ相減シ、年頭・節句日迄当分ノ通可相心得様被仰付旨被仰渡、

廿日　釈菜一往御取止ニ付御献納銀ニ不及、春一度軽キ菓子類相備　御代参被仰付旨従信濃殿被仰渡、従教授依有相窺趣也、

廿一日　伊賀殿従御湯治先被罷帰、　今日限元平太へ所被下置ノ屋敷引渡方可致旨御勘定奉行へ被仰渡、

廿二日　宗門改日置五郎太物奉行へ転役、横目倉野善助表方御代官被仰付、

島津兵庫殿桝方御門勤番・島津筑後新橋御門勤番雖被仰付置共ニ被相免、両御門番所ノ儀ハ御兵具方足軽一人宛番人被仰付、

大番頭并道奉行・御鳥見頭・御鷹匠頭・御庭奉行・尾畔奉行・学校目附、共ニ御役場一往御引払被仰付（大番頭ハ御隠居様御代安永九年子七月、道奉行ハ同二年巳七月、御鳥見頭ハ同七年戌四月御鷹匠頭ハ天明元年丑五月、御庭奉行ハ同三年卯十月、尾畔奉行ハ同四年辰十一月被召立置、学校目附迄当御代寛政十年午正月被召立置ノ処此節都テ被相止）、

大番頭北郷作左衛門・島津矢柄山吹ノ間へ相詰、与方取締等是迄之通被仰付、新番支配并跡職延月限調御番帳仕付明所諸郷預被相免、道奉行澁谷次郎助・土岐次右衛門・二之宮藤太左衛門・永山與三右衛門・岩山長兵衛・時任左平太・小倉七左衛門・土岐藤左衛門・河内仙兵衛・黒葛原周右衛門・平田桑衛、道奉行御鳥見

頭勤野田勘兵衛、御鳥見頭土師孫左衛門、御鷹匠頭宮内左喜五郎・今藤市郎兵衛・五代喜平次・上原喜三次・近藤隆左衛門・松山直八、同見習川邊與右衛門、御庭奉行竹下覺右衛門、尾畔奉行赤崎丹四郎（圓カ）、学校目附與倉孫右衛門・福永仁右衛門、共ニ当御役ニテ御番勤被仰付、道奉行ハ十人賦、御鳥見頭・御鷹匠頭ハ為六人賦ノ間小番所御庭奉行尾畔奉行ハ五人賦、学校目附ハ為四人賦ノ間大番所ヘ相勤、御役料被相減五石宛被下置但道奉行御鳥見頭・御鷹匠頭ハ御役料不被成下人モ有之間被下来分ト云云 御役料被相減五石宛被下置 道奉行・御鷹匠頭勤大迫次郎九郎、御鷹方以前御鷹方山下・尾畔両所ヘ雖被建置先年御検約被仰出砌、尾畔ヘ一所ニ被相合ト云云 雖被引取、御鷹三居 御本丸奥ヘ被残置可飼置旨被仰付其余不残被相放ト云云 三居外ニ又三居被残置飼料ノ余リヲ以ノ間右ヘ被掛置、御役料是迄ノ通被下置御鳥見頭兼務被仰付、 御本丸ヘ相勤御鳥見頭為被召置役所ヘ可相詰旨被仰渡、以前ノ通若年寄ヘ跡職月限調御番帳仕付取扱方被仰付小番支配被相免、御小姓与番頭ヘ小番新番支配被仰付、月番御用人ヘ明所諸郷預被仰付、御作事奉行ヘ道奉行職分受持被仰付、以上皆従信濃殿、島津藤次郎・名越右膳取次ヲ以被仰渡、 御家老座小番掛書役一人柏原甚兵衛・同助二人久保藤右衛門左近允新助 共ニ同清書方書役助ヘ被召直、大番頭座書役四人神宮司筑兵衛・田代宅右衛門福島助右衛門・浜田伝右衛門 共ニ六組触役所書役助ヘ被召直、同助四人指宿仲左衛門・伊集院藤右衛門・植村七左衛門・重久正之進 共ニ被差免、道方下目附四人時任源兵衛・河野四郎・町田鳥羽似・西郷庄八・同定助四人篠原平之進・土持孫右衛門・新納勝蔵・武彦九郎・同定数年中助五人佐久間仲蔵・新納宗右衛門・高崎右衛門・鎌田休兵衛・佐野力蔵 同助十人堀切清兵衛・吉田小六・梅田七郎・鎌田平八・伊集院隆太郎・日置半蔵・美坂次右衛門・東郷源五右衛門・田尻善左衛門・海老原庄蔵 共ニ御作事方下目附助ヘ、道奉行所書役二人川越平八・伊藤与右衛門 共ニ御作事方書役助ヘ被召直、同支配諸組与力格父子二人萩原安右衛門・同半蔵 御作事方支配ヘ被相替、御鳥見十四人岩元半助・肥後与右衛門・中原甚助・大迫権兵衛・伊地知筑右衛門・大迫権左衛門・津曲仁右衛門・新納源四郎・松元喜左衛門・高崎善之進・中村四郎太・満尾喜三太・川上次右衛門・曽山甚左衛門 横目被仰付、是亦依御役場御引払也、 島津内膳殿急病差起養生不相叶死去、頃日大小付ヲ作リ狂歌ヲ付ケテ世ニ流布ス、不知何人ノ所為

万端　　秩父伊賀
諸事　　樺山主税ニ

変あらは大事
大変を治る程の伊賀ならは
主税をそえて変なしに小

別ニ狂歌一首同ク流行ス

椛伊賀は上よりは夫下よりは
　　はかと読たりがいと成なり

廿三日　未刻後信濃殿為　御使島津兵庫殿宅へ被差遣、兵庫殿并隠居飛彈殿へ　御叱被　仰付、領内仕置不宜家中令困究ノ由如何ニ被　思召上ノ条、屹ト可被相改ト云云、飛彈殿事昨日従私領加治木参　府、今日御届ノ処即日如此被　仰付、

廿四日　御記録方見習本田休七・同八田孝之進共ニ御記録方添役へ転役、同三原次郎四郎・同兒玉祝人共ニ当御役ニテ御番勤被仰付、祝人事是迄ノ通御役料五石被下置、次郎四郎事為百石以上ノ間不及其沙汰、御庭方六人平城主右衛門・森川仙左衛門・川上正九郎・福屋助左衛門・染川喜三太・敷根良助、御庭方書役一人相良伊左衛門、同助一人市来善兵衛共ニ御用掛相仕廻勤方被差免、即日御庭方六人共ニ御薬園掛被仰付、書役一人御薬園方書役助被仰付鞦韆鏊御番所御取除ニテ入札払被仰付旨被仰渡、　今日御勝手方両御家老衆被仰渡趣有之、御勝手方御用人伊東仙太夫書付ヲ以諸向へ申渡ス、諸御役場書役検者田舎諸行御奉公代合又は被仰付候節頭人数書を以可被申出候、左候て此節御役場御引取被仰付置候者御見合可被仰付候間、無間違可被申出旨御差図ニて候、以上、

二月廿四日

廿五日　主税殿為試業造士舘へ被為下、童子十一人へ暗誦、諸生十四人へ説経被仰付、御側御用人大山宗之丞御側役隈元平太・御目附本田助之丞・本田久米右衛門席詰、畢テ主税殿御書付ヲ以教授・助教へ被仰渡趣有之、宗之丞取次之、

一造士舘之儀は人才を育治体ニ相掛事候間、詩文之芸のみニてハ徳行も成就難成筈候間、向後猶又理義之討論講学親切ニ致体認、適被召建候　御趣意并学校之詮一涯相立候様、教育方は勿論各一身之慎惰行方左之通可被相心得、

一下地宜分て行義正敷才譏〔譏カ〕有之者は不差置可被申出事

一一統之交礼義を守互ニ親切ニ学問相進徳行致成就候様無隔心申読〔談カ〕、存寄之儀ハ不差置可申聞、若及再三

不相用者候ハヽ、無用捨可被申出候、

一第一程朱之書致熟読翫味道理明白ニ相窮致工夫、自後猶又教授・助教より諸生中〔江カ〕もも教育方行届候様可有之、何そ大形之無之筈候得共、若年之者共弁薄有之段先達て承候趣も有之候間、至極丁寧ニ此涯屹と可致教育候、

一先日申出趣も弁薄風説等ニ疑惑相生、教育方之妨ニ相成候旨被申出候得共、畢竟当分迄教育不行届処より道理之本体ニ不本附、心術正敷身之間正固ニ無之、夫故邪説等ニも相惑筈候間、一体風俗立直候様何篇心頭ニ掛万端可致精勤候、

一徂〔徠〕來書致読習候者は無之筈候得共、万一取扱候者も候ハヽ、可差留候、第一風俗を乱邪説生候基ニ候間、専ニ程朱之書可致信仰候、

或人曰、久言・清水盛之ヲシテ此文ヲ草セシムト、

或人曰、隈元軍六是ニ草スト、

廿九日　巳ノ刻聖堂神前へ菓子類相備ルノ間

太守様　御隠居様御代参將監殿被相勤、

今月森山三十嫡子十郎・二階堂左守養子八太郎、於御湯治先隈元軍六御取次ヲ以御前詰被仰付ト云云、両人共ニ前以内々　御沙汰有之、十郎・軍六事、八太郎事左守召列参候ノ処如此被仰付、学校目附福永仁右衛門御叱被仰付、於館中米銭利欲ノ致判断由風俗ニ相掛ル ノ処甚以不可然屹ト可相改ト云云、従主税殿御書付ヲ以被仰渡、黒田才之丞承知之、

三月

朔日　道奉行職分ノ儀御作事奉行受持被仰付ニ付、道橋破損所見分方等以前ノ通大目附取計被仰付旨、従信濃殿被仰渡、

三日　御側御用人ヨリ黒田才之丞御用ニテ主税殿御差図ノ趣申渡ス、橋口權藏事長々不致出勤由、先達テ　御前講義ノ儀ニ付心得違如此ニテハ有之間敷ヤ、於其儀ハ不可然間押テ可罷出旨可申達ト云云、

四日　毎月二日八ツ後教授講釈雖致来、以来四ツ後講釈ニ相交可致講義様被仰付旨従主税殿被仰渡、是従黒田才之丞依有相窺趣也、

五日　主税殿御書附ヲ以奉行頭人へ被仰渡趣有之、御用人西恰之助通達之、

近比諸御役場奉行頭人御用取扱向専書役等江相任置夫故御規模等も委敷不存候付、職分を尽兼吟味等も不行届向ニ成立風儀不宜、夫々御役場詮も薄候間、右体之儀無之候様心頭ニ相掛屹と可精勤候、尤依御用向は直ニ承儀も可有之候、然は兼て書役等江任置候処より、奉行頭人其節御用応答は勿論即座決断も難成、御用滞ニ相成不可然事ニ候、且又吟味役より諸向書役等江致御用談候儀も、畢竟奉行頭人間ニも受持之役場不案故、無是非書役等も致御用談事ニ成立候ては如何之至、殊更書役等御用筋取扱候処より諸人より内意も申込賄賂等いたし候基ニ候間、向後右通之儀無之様可相心得候、

右可申渡候、

三月　主税

橋口權蔵今日ヨリ致出勤、宮下主左衛門儀ハ去正月廿六日ヨリ出勤ト云云、

六日　尾畔御園内御庭籠并御鷹匠詰所御鷹部屋土蔵中門水溜等御取除ニテ、入札払被仰付旨被仰渡、

七日　道奉行所一軒御引取ニテ入札払被仰付旨被仰渡、

十一日　将監殿・伊賀殿御書附ヲ以諸向へ被仰渡趣有之西恰之助通達之、

御役又は御役替書役小役人等被召入候節参会屹と被差留置候、勿論無益之参会いたす間敷候、兼て申渡置候処、間ニは不守之向も有之、或内訴之依向内々致参会趣相聞得、当御時節如何之取違候間、以来参会不相催候様互ニ可差留候、乍此上不守之者も候ハ、屹と可及沙汰候、且礼儀相掛候音信等成長ケ軽可致候、此旨向々江申渡万一取違之者も有之候ハ、見分役之議ハ可申出候、

三月　将監　伊賀

加世田常潤院　日新公御影像、彫刻以来及二百余年、形容致損壊（壊カ）ノ間、於日新寺被加修飾、十三日御遷座有之ニ付、為

太守様御代参秩父伊賀殿、為
御隠居様御代参伊勢雅樂頭当番従今日被差越、
十五日　伊賀殿昨日加世田発足ニテ伊作町へ一宿有之、
今日御当地へ帰着、　桝形・新橋両所箱番可御引取ニ
テ入札払被仰付旨被仰渡、
十九日　物奉行格吟味役勤椎原孝助御役被差免逼塞被仰
付、孝助事昨日大坂ヨリ罷下今日御届申出ルノ処、如
此被仰付、
廿四日　尾畔御鷹方雖被引取　御城内へ被召立ニ付又々
書役被召入、
廿五日
太守様従安樂　御帰殿、
廿六日　銀但御納戸銀四貫目宇宿十次郎へ、同三貫目宛有馬一
郎・佐竹次郎右衛門へ拝借被仰付、小身者不時ニ御役
并江戸詰被仰付致当惑ノ由申立、御取分ヲ以如此被仰
付ト云云、
廿七日　森山十郎・二階堂八太郎共ニ
若殿様御付御小姓被仰付、
廿八日　森山三十事、休右衛門嫡子十郎事三十ト改名被
仰付、共ニ依願也、吟味役大野五左衛門役儀被差免
御兵具方書役加治木十郎・御数寄屋御茶道村田林齋中
急被仰付、来月四日被差立旨被仰渡、以前式日御使中
急被相止飛脚ニ被成置ノ処、今度如本中急被差越ト云
云、森山三十・二階堂八太郎共ニ紬丹後島・小倉島類
四反宛、真綿一把宛拝領被仰付、
今月上下町呉服所反物占方被仰渡、横目一人宛足軽召
列都合三十余箇所へ一同ニ馳込簞笥等へ加切封ト云云
四月
朔日　御鳥見役所書役二人和田覚之丞水間新之丞御用掛相仕廻勤方被ニ
差免一、
五日　横目大迫權兵衛・新納源四郎・高島善之丞先達テ
御鳥見御引取ニ付、御躾等ノ節ハ別勤ニテ御鳥見勤方
雖レ被ニ仰付置一、其節々迄ニテハ差支ルノ間、以来御鷹
部屋へ可レ致ニ日勤一様被ニ仰付一、御里通迄被レ成ニ御免一
旨被ニ仰渡一、今日独礼ノ面々不レ残可ニ召呼一旨被ニ　仰
出一、従ニ御側役一銘々内用頼御用人左衛門・佐渡共ニ西恰之助・美濃伊集院平・図書

筑後共ニ倉山作太夫へ相ニ達之一、申ノ刻後独礼島津美濃・島津圖書・島津石見・種子島佐渡麻上下着用参上（島津左衛門、父子在領ニテ不参上）、御一門島津若狭殿・島津兵庫殿・島津長門殿平服ニテ　御前へ被ニ相詰一、御家老主税殿・伊賀殿、御側役森山休右衛門・隈元平太・隈元軍六等　御側ニ伺候ス、時ニ　御咄ノ趣　御覚書ヲ以被ニ　仰聞一、主税殿被ニ読之一、畢テ　御覚書圖書ヘ被ニ相渡一致ニ順達一可ニ写取一旨被ニ　仰付一、御吸物・御銚子并御菓子（羊羹・糟平）被ニ下之一、御掛物一幅宛・手炉一宛拝ニ領之一、御肴一折従ニ相中一進上、但御取肴硯蓋一（橙・車海老・ユベシ・山芋外ニ一品）鉢一（差身・丼作）肴糸ト云云、

咄之覚

一門独礼は勿論大身分諸士ニ至迄当時致学問事候得共、畢竟文芸をのみ翫候故其身実ニ義理を致自得、忠孝之道正敷堅固ニ相守者少く、一所を領候者も平生驕惰ニ耽、心を不正身を不恪、家事不斉候処より領地も不相治令困窮国家之用ニ難立、殊ニ重役申付候ても役職之任を尽兼候向ニ相成候、第一兼て実ニ学問いたし、身持正敷徳行相進ミ、其身之才徳政事之任ニ堪候ハ、追々可召仕事ニ候、当分気質宜敷才智有之読書致出精者有之候得共、程朱之書を不致熟読候故、道之大本治体之要に本つかす、枝葉之学文ニて一向其身ニ益無のミならす、却て其身を持崩し正道を害し政治之妨と相成事に候、或御互之交益友不相選候故、終ニ驕奢惰弱ニ流れ、又は暴慢狂客之風俗ニ相成、其身を失ひ候基ニ候間、右通之交り等屹と相止可申候、心術より正敷不致候得は身不相恪徳行も成就無之事候、勿論異端古注を翫又は徂（徠カ）来ことき致学問者ハ屹と禁制申付置候、然処致学問者も間ニハ政事を専ニ致空論のみ、心を正し身を治め候事をいたさす人道を乱り、誠ニ聖門治　之奸賊売学之罪難逃候、適生質宜者も右通之者と徒ニ相交、互ニ私欲を以相結義理之切瑳無之、一生不用立候様相成候ては不明之至、下愚之事ニて其身之過とハ乍申誠ニ不便之至存候、国中之者ハ皆吾子ニて候、然処一人も身を失ひ候者有之候ては其父として致心痛事ニ

候、誠を立私を去自分我為ニ相励深切ニ可致学問候
一切人之為ニ不存候様志を可相立候、
一先年より度々倹約は勿論風俗質朴ニ有之候様申渡候得
共、尓今驕奢花美行レ風俗不正候、飲食衣服家作は勿
論惣体美飾之類自相禁、面々心頭に相掛身分之慎いた
し、質素廉恥之風ニ立直候様可被致候、才智有之者も
酒宴を催放蕩淫乱之者も有之、士風不相立別て如何之
至候間訖(屹与)而可相改候、
或人曰、久言、季保ト謀リ隈元軍六ヲシテ此文ヲ草
セシメテ上ルト、或云、日置兼儔是ヲ草スト、
六日　御徒目附川上休太夫、横目橋口次兵衛・三原七左
衛門・崎元直次郎御勝手方ヨリ御用ニテ罷出ルノ処、
台子ノ間ヘ被ニ召出一御勝手方両御家老衆御直対ニテ、
諸郷廻勤被ニ仰付一七箇条ノ御覚書ヲ以被ニ仰渡一ト云云
不レ知ニ何旨趣一、即日四人共ニ出立、休太夫事出水筋ヘ
次兵衛事谷山筋ヘ差越ス、余ハ未聞及ハス、
七日　巳ノ刻
太守様為ニ　御試業一造士館ヘ被レ為　レ入、童子十九人
ヘ暗誦諸生十九人ヘ説経被ニ　仰付一、御家老主税殿・
御側御用人勝部軍記・御側役隈元軍六・御側目附寄中
山次兵衛(本職御小姓頭取)御座ヘ伺候、御目附相良滿右衛門・坂
元彦右衛門廊下ヘ相詰、午ノ中刻隈元平太　御殿ヨリ
参上、
眞含院様(前太守継豊公御女・松平修理大夫重改主御夫人)先月十八日御卒去ノ段只
今飛脚到来ノ由申ストニ云云、依テ諸生九人ハ講釈不レ
聞ニ召上一即刻御帰殿、元来諸生詩作・童子清書於ニ講堂一
可ニ差上一ノ処、俄ニ　御帰殿ノ間教授　御殿ヘ致ニ持
参一、軍六ヘ相付差ニ出之一、
十日　隈元平太・隈元軍六共ニ所帯方困窮由ニテ、御取
分ヲ以、千田龍右衛門名前来ル午年代琉球館書役被ニ仰
付一、先例先御勝手方ヘ内訴申出吟味ノ上雖レ被ニ仰付
来一、此節ノ儀ハ不レ及ニ其沙汰一ト云云、今日講堂ヘ可レ
被ニ為　入一旨雖レ被ニ　仰渡置一、依レ為ニ　御慎内一御延
引被ニ　仰出一、
十三日　訓導師御近習通黒田新左衛門
若殿様奥御用被ニ仰付一四人賄料被ニ成下一、仕廻次第出

立、二木仲次郎（助教ニテ若殿様御相手）へ可レ致二交代一旨被二仰付一、
市田出雲昨夜下着ノ由ニテ今日御届申出ルノ処、何分
被二仰渡一迄ノ間心入ヲ以相慎可レ居旨被二仰付一、出雲事
先月十日安房殿并赤松造酒江戸へ到着、御役并定府被二
差免一段申渡ノ間、早速相仕廻同十三日致二出立一ト云云
今日
太守様中村御茶屋へ被レ為二 入一騎射稽古不図被レ遊二
御覧一、未刻 御帰掛 主税殿宅へ被レ為二 成一、軽御
料理等被二 召上一、申ノ刻過 御帰殿、 今夜急飛脚
従二江戸一到着、
十四日 未明御家老衆不レ残登 城、御用談有レ之ト云云
不レ知二何子細一、
太守様再度講堂へ被レ為二 入一、童子十四人へ暗誦、諸
生廿四人へ説経被二 仰付一、御家老将監殿・御側御用
人大山宗之丞・御側役讃良善助御座へ伺候、御目附小
島甚兵衛・町田孝太郎廊下へ相詰、畢テ詩作・清書従
教授宗之丞へ相付差二上之一、午下刻 御帰殿、
酉刻比胡乱（ウロン）体ノ者大奥御書院廊下辺へ致二推参一、女中
衆相捕へ御広敷へ引出ス、依テ及二穿儀一ノ処西田居住
上田早八（ウエハヤ）足軽名子敷右衛門子徳之助ト申者ニテ、年廿一
歳ノ由雖レ申、言語致二錯乱一子細不二相分一ト云云、
十五日 信濃殿江戸へ御用有之間仕廻次第急ニテ可レ致二
出立一旨被二仰付一、伊賀殿当年江戸詰并来年御留守詰迄
被二仰付置一ノ処、御用有レ之間是亦仕廻次第急ニテ被二
差立一旨被二仰渡一、信濃殿事先日飛脚到着、従二
御隠居様一御用有レ之間早々可二罷上一旨為レ被二 仰越一
由相聞ユルノ処、今日如レ此被二仰付一、伊賀殿儀ハ従二
太守様一御用有レ之被二差遣一ト云云、
思召ヲ以今日就二現夫一人一銭百文宛近在并諸郷百姓へ
被レ下レ之、庄屋方へ申受可二致配当一旨被二仰渡一ト云云、
十七日 橋口次兵衛谷山筋ヨリ罷帰御届申出ル、
廿日 信濃殿へ御参覲方御用雖レ被二仰付置一、今度出立ニ
付被二相免一、主税殿へ取扱被二仰付一、
太守様御参覲六月中可レ被レ遊二 御参府一〔ママ〕処、御持病
ノ御疝癪且御頭痛ノ御煩被レ為二 在一ノ間、右時節迄ハ
難レ被レ為レ調一段江戸へ御届被二仰上一旨被二仰渡一、

廿一日　伊賀殿嫡子秩父太郎此程ヨリ病気ノ処養生不ニ相叶一死去、行年十二歳、兼テ多病ノ上驚風差発全身狂敷如二病犬一ト云云、

太郎病テ床ニ臥ス、是ヲ侍医森元高見等ニ委ス、疾膏盲ニ入テ治ムヘカラス、季保乃チ地神盲僧肥後浄樂院、修験者流小牟田大正院ヲ延テ法ヲ修シテ是ヲ治メシメ、又用達伊地知正九郎ヲ遣シテ

大中公ノ廟ニ禱ラシム、有識ノ士是ヲ論スル者アリ、曰ク、君父ノ疾臣子切迫シテ名山大川ニ祈ル、礼ニ於テ有之、未君父臣子ノ為ニ禱ルコトアルヲ聞ス、名山大川猶禱ルヘカラス、況ヤ　先君ノ廟ニ於テヲヤ、季保平日大極図ヲ読テ大本ヲ知ルト称ス、而ルニ敬シテ遠ルコト能ハス、反テ是ヲ瀆ス知アリト云ヘケンヤ、左道ヲ執ツテ政ヲ乱ル者ハ殺ス先生ノ政典ナリ、盲僧道士皆左道タリ、季保平生近思録ヲ誦シテ治体ニ明ナリト称ス、而ルニ治テ懲ラスコト能ハス、反テ是ヲ信ス明アリト云ヘケンヤ、夫死生命アリ夭寿弐アラス、故ニ君子法ヲ行テ命ヲ待ツ、未嘗テ非礼ヲ禱ラス、非義ヲ求メス、如此ニシテ而後民ノ師表タルヘシ、今季保身大藩ニ相トシ名隣国ニ聞フ、而ルニ一旦所愛ノ故ヲ以テ疑惑恐懼スルコト如此、豈ニ大事ヲ済スニ足ンヤ、宜ナリ、其他日天下ノ僇トナルヲ免レサルコト、

川上休太夫出水筋ヨリ罷帰　御届申出ル、

廿五日　東郷半助不レ宜聞得ノ趣有レ之、御役被二差免一逼塞被二仰付一、養子実ハ弟横目東郷半兵衛・実子句読師助龜澤源右衛門共ニ役儀被二差免一、

五月

二日　主税殿去二月、伊賀殿同前江戸詰雖レ被二仰付置一、被二差立一程合未二相究一ノ処、伊賀殿事嫡子致二病死一此涯出立不レ被二相整一ノ間、主税殿先可レ被二差越一ニ為二相究一由相聞ユ、　御参覲方御用主税殿ヘ雖レ被二仰付置一、近日出立ニ付被二相免一、典膳殿ヘ取扱被二仰付一、奥掛浄光明寺掛信濃殿在旅中御家老衆月番廻可レ被レ為聞旨被二仰渡一、　今日主税殿・信濃殿・伊賀殿共ニ為二御餞別一　御前ヘ被二為　召一、御吸物・御銚子等被レ下之、

三日　信濃殿御当地出立、用達諏訪次郎太・旅用達野間直治被二召付一、中途宿札等次郎太名前雖レ被二仰付置一、昨日御吟味相替自分名前可二相用一旨被二仰渡一ト云云、今夜戌中刻松崎善助城谷拘地小屋出火、為二御殿方限一ノ間早鐘ヲ突コト半時計、御一門方独礼衆并重御役ノ面々不レ残登城、何モ騎馬高挑燈ト云云、伊賀殿兼テ乗馬高張ノ用意無レ之、弓形一張為レ持歩行ニテ被二罷出一乃ノ字ノ紋（実家伊地知氏家紋）ノ火羽織着用ト云云、木藤市右衛門火羽織迄ニテ袴不レ被二着用一御広敷ヘ罷出、為二御機嫌伺一如二大奥一罷通ノ処、同役大原林左衛門見咎差留ト云云、主税殿明日発足ノ間被二相仕廻一御用モ為レ有レ之カ登　城無レ之（火事最中ニ一人馬上ニテ指シテ駆ル者アリ、不レ知二何人一、或人曰、樺山氏ヘノ御使者、ナリト）御紋付ノ弓張ヲ持荒田ヲ

今夜火事ニ付狂歌二首世ニ流布ス、不レ知二何人作一、

馬も立す高挑灯も持すして
妾六人は伊賀な所存そ

季保国老トナツテ既ニ五ケ月、猶乗馬ヲ畜ス高挑燈ヲ制ラス、反テ婢妾六人ヲ買テ寝食ニ侍ス、故ニ国人謗ル者多シ、或曰、季保色ヲ好ムノ癖アリ、婢ヲ買フ毎ニ必自ラ択ブ、其畜フ所六人並ニ容色アリト云、

火事ぢやとて御殿に袴近思録
世事には木藤馬鹿な大極

四日　主税殿御当地出立、用達兒玉次郎兵衛・旅用達柴山四郎被二召付一、

或曰ク、久言将ニ江戸ニ如ントス、旅用達ヲ求ム、用頼東郷仲蔵為ニ友野平右衛門カ事ニ練習スルヲ言フ、久言因テ仲蔵ヲシテ請ハシム、平右衛門辞ス、固ク請フ、乃応ス、久言遂ニ是ト期シ某ノ夜ヲ以来見ヘシム、期ニ及テ平右衛門酒肴ヲ齎ラシ往テ門ニ候ス、命ヲ伝フ者内ニ入ル、久フシテ出ズ、平右衛門怪テ待ツ、間アツテ用達兒玉次郎兵衛出テ曰ク、大夫命アリ云フ、今夜来訪ヲ辱フス、適ニ賓客アリ（時秩父季保来テ座ニ在ト云）相見ルコトヲ得ス、且前日子ヲ以テ旅用達トセンコトヲ約ス、亦事故アリ（虫クヒ）ニ従ハシムルコト能ハス、両ナカラ是ヲ辞スト、平右衛門愕然トシ

テ曰ク、前日ノ事大夫東郷氏ヲシテ強(シヒ)テ請ハシム、故ニ辞スルコトヲ得ス命ニ応ス、而ルニ今是ヲ反(カエ)ス、必已ムコトヲ得サル者アラン、願クハ其説ヲ聞カン、次郎兵衛黙然タリ、良久フシテ曰ク、君赤松氏ニ出入スルコトナシヤ平右衛門曰、市正カ、赤松市正ニ見ユ用達タリ、平右衛門曰ク、然リ次郎兵衛曰ク、大夫辞スル所以(ユエン)ノ者某其詳ナルヲ知ラス、豈ニ赤松氏ノ故ヲ以テスルカ、平右衛門邑(アウ)然トシテ曰、図(ハカ)ラサリキ大夫我ヲ弄(ロウ)スルノ斯ニ至ラントハト、忽忽トシテ去ル、

今日市田出雲妻江戸ヨリ到着、先月十九日江戸発足ト云云、

五日　諸士男女十四人 児玉利中・平山恕休・執印伝左衛門・池田団右衛門・田中勘右衛門・種子島宇左衛門 祖母・猿渡嘉左衛門祖母・野村次右衛門母・税所五右衛門養祖母・能勢権蔵祖母・久保金兵衛曽祖母・平瀬孫太夫祖母・伊地知源左衛門祖母・二木新兵衛祖母 へ金子百疋宛(ヒキ)御納戸金、足軽女一人 御広敷足軽重信彦次郎祖母・町人女一人 上向築地名頭前田善左衛門養母・近在百姓五人へ青銅百疋宛被下之、何モ及九十余歳ノ由被聞召上長寿被賞

思召ヲ以被成下旨従典膳殿被仰渡、

六日　伊賀殿へ主税殿在旅中琉球掛寄被仰付、造士館掛主税殿在旅中御家老衆月番廻可被為聞旨被仰渡、

八日　典膳殿・伊賀殿早天より登　城、同道ニテ　御前へ被罷出、御側衆相払及御密談ト云云、不知何ノ子細ヲ、伊賀殿事今日

厳有院様大樹家綱公御忌日ニ付前以南泉院へ　御代参被仰付置ノ問、辰ノ刻過　御殿ヨリ直ニ被相勉、夫ヨリ再度登　城、御勝手方へ被参、取散有之諸書付取分、帳箱文箱へ入付銘々被加切封、其中御家老開封書役手掛無用ト云、自筆ノ札相付ト云云、未刻前伊賀殿御座退出、主税殿・伊賀殿共ニ先月九日於江戸御隠居様被　聞召通趣有之、御役被差免隠居被仰付、且主税殿事私領へ引越、伊賀殿事私宅へ引入深相慎可居旨被仰付、主税殿親類物頭相良典膳・御馬廻本城源四郎、伊賀殿親類新番相良市郎左衛門・蔵方目附伊地知新太夫江戸へ相詰居ノ間、何レモ当詰御断申出急ニテ罷下可相達旨被仰渡、四人共ニ即日致出立ノ由

ニテ昨夜下着ノ由相聞ユ、但典礼・源四郎事去六日於ニ出水米津一主税殿ヘ行逢被二仰渡一趣相達ノ処、従二太守様一大切ノ御用致二承知一趣有レ之間推テ可二罷上一旨被レ申、雖然強ニ差留置、典禮事主税殿ヘ相付出水ヘ扣居、源四郎事夜白罷通着掛直ニ典膳殿宅ヘ差越、以二内分一得二御差図一ト云云、

主税殿事為二出水地頭一ノ故、去ル六日出水ヘ到着ノ処、役々差出馳走奔走不二大形一、米津ヨリ乗船ノ賦ニテ已ニ用意相整ヒ押付可レ有二出帆一ノ処、典禮・源四郎致レ着、被二仰渡一趣相達スルノ間不興無二言計一ト云云、主税殿聽テ書付一通被二相認一、兒玉次郎兵衛ヘ為レ持信濃殿ヘ被二差遣一、次郎兵衛肥後比奈久ニテ漸信濃殿ヘ追付書附相渡返簡可レ給由申ノ処、片時モ早差急ノ間書認ル暇無レ之トテ、口達ニテ返答被二申含一ト云云、主税殿又別ニ一封被二相認一伊賀殿ヘ可レ届由ニテ源四郎ヘ被二相渡一、源四郎着ノ夜早速伊賀殿宅ヘ差越相届ト云云、

隈元軍六信濃殿ヘ御用有レ之急ニテ罷立於二中途一追付可二相達一旨被二仰付一、主税殿・伊賀殿於二江戸一御役雖レ被二差免一 思召有レ之其通不レ被二仰付一旨信濃殿ヘ為レ被二仰含一 被二差立一由相聞ユ、今夜軍六御当地出立、

九日 本城源四郎・相良市郎左衛門・伊地知新太夫昨日下着ノ筋ニテ今日御届申出テ 於二江戸一被二仰渡一御書付三通宛月番御用人ヘ相付銘々差二出之一、

樺山主税

右江戸詰被仰付置候ニ付、万一致出立旅中ニて行逢候ハ、直ニ引返シ、鹿兒嶋江着不致私領江列届、深相慎一間之外一切外出不為致、家内之者たりとも容易ニ面談不相成、親類其外他江文通之儀一切不相成、親類両人ツ、不明様宅番可為致候、万一緩セ之儀有之候ハ、親類中可及迷惑候、

右之通親類両人江屹と申渡、飛脚両人ツ、相付早速為致出立差急キ罷通、何方ニても直ニ右之飛脚を以極々急ニて届申越候様被仰付候間、間違無之様可申渡候、

四月 安房

樺山主税
親類江

右此節御役被差免候処、両人共江戸詰として出立之筈候付、若途中ニて行逢候ハヽ、其段相達、其趣直ニ飛脚を以江戸江申越候様との儀別段申渡候、右ニ付てハ御用封等持越候儀も難計候間其趣承届、自然公辺御勤向ニ相掛候日限之書付等有之候ハヽ、右以飛脚可差越候、其外は右親類共相受取於御国元月番御用人江可差出候、此旨可申渡候、

四月　安房

秩父伊賀

右被　聞召通趣有之御役被差免隠居家格小番被仰付候、江戸詰被仰付置候間若致出立道中ニて行逢候ハヽ、於其訳申聞早速為引返、飛脚・足軽両人ツヽ召付置候間早々江戸江可申上候、宅江列帰候ハヽ、一間之所江入置外出不相成、親類たりとも容易面談不相成、親類其外何方江も文通不相成候、親類両人ツヽ、不明様致宅番深可為相慎候、若緩セ之聞得も有之候ハヽ、

屹と可及迷惑候、

四月　安房

秩父伊賀
親類江

右御役御免隠居等被仰付候段ハ別紙申渡通ニ候、御用封等持越程合も難計候間、道中ニて行逢候ハヽ、其段承届、若　公辺江相掛候御用封は飛脚・足軽江為持江戸江可差上候、其外御用封は親類相受取御国元着之上月番御用人江相付可差出候、

四月　安房

主税殿・伊賀殿共ニ　思召有レ之御役不レ被二差免一間、先相慎可レ居旨被二仰付一、尤伊賀殿事御用ノ節ハ被二為召一儀モ可レ有レ之間其節ハ可二罷出一旨被二仰渡一、主税殿事私領ヘ不レ及二引越一如二私宅一可二罷帰一旨被二仰渡一、但主税殿事源四郎御用ニテ如二出水一罷越可二列帰一旨被二仰付一ト云云、今朝山之口地蔵堂ノ石垣ニ落書有レ之、主税・伊賀結党曳類ノ間被レ処二厳科一荷担ノ輩依二軽重一罪科被二仰付一度由相記、数十人ノ姓名載置ノ処、已刻

前上下着用ニテ下人為ニ召列一仁通掛リ取テ懐中スト云云、不レ知レ為ニ何人一（或曰、奈良原助左衛門取レ之）

十日　伊賀殿御用ノ節ハ可ニ罷出一旨雖レ被ニ仰出置一、慎被ニ仰付置一上ハ不レ可レ有ニ其儀一由ニテ御取返ト云云、

十一日　申刻比飛脚江戸ヨリ到着、去ル十三日江戸発足ト云云、

十二日　樺山主税・秩父伊賀共ニ被ニ聞召一通趣有レ之、御役被ニ差免一隠居被ニ仰付一、伊賀事家格（寄合）被ニ相下一小番被ニ仰付一、

樺山主税

右被　聞召通趣有之御役被差免隠居被　仰付候、

秩父伊賀

右被　聞召通趣有之御役被差免家格小番隠居被仰付候、

右之通先月十九日於江戸親類共江被仰渡候、此旨表方江致通達奥掛御勝手方江も可申達候、

五月　典膳

且主税事私領へ引越、伊賀事私宅へ引入従ニ江戸一被ニ仰渡一通深相慎居、親類両人宛不レ明様宅番可レ致旨被ニ仰越私領へ可ニ列越一旨被ニ仰付一ト云云、昨日飛脚着　御書（或曰、有馬左兵衛佐様御書）相達ノ処　思召相替及レ是由相聞ユ、主税赴ニ帰路一ノ処、右平太向田ニテ行逢ヒ被ニ仰渡一趣相達ノ間、引違へ如ニ私領一差越ト云云、

然ハ樺山權十郎（当番頭）・岩切六郎（進達掛）依レ為ニ主税親類一、三十日御暇ニテ藺牟田へ差越夜白致ニ警固一、伊地知助太郎・伊地知越右衛門・伊地知休蔵（物頭）・伊地知小十郎（後見）・伊地知嘉右衛門（堀甚左衛門弟伊地知嘉右衛門養子）・伊地知勘左衛門・伊地知正九郎・伊地知恕兵衛・伊地知安右衛門・伊地知平蔵・税所新助・川上甚左衛門（後見）・同姓甚兵衛（甚左衛門従弟）・同姓甚右衛門（甚左衛門従弟）・南雲新右衛門（伊賀姉子）・大島清太夫（伊賀妻養弟）・澁谷五郎太夫（伊賀妻ノ叔父）・東郷次郎太郎（伊賀実母ノ従弟）・大河原源右衛門・同姓喜左衛門・同姓喜八・野崎善助（後見）等依レ為ニ伊賀親類一六時更ニテ宅へ相詰昼夜致ニ守護一ト云云、

未ノ刻前勝部軍記・清水源左衛門・森山休右衛門・隈

元平太・木藤市右衛門・佐竹次郎右衛門・宇宿十次郎・有馬一郎以上八人勤方、可二差扣一旨被二仰渡一、銘々従二同席一相二達之一、同刻後八人共ニ典膳殿宅ヘ御用ニテ、軍記・源左衛門・休右衛門・平太・市右衛門事ハ被二聞召通一趣有レ之間、何分被二仰渡一迄ノ間相慎可レ居旨被二仰付一、次郎右衛門・十次郎・一郎事ハ何分被二仰渡一迄ノ間相慎可レ居旨被二仰付一、何モ親類罷出承二知之一、当番頭大野多宮御小姓与番頭ヘ、詰衆島津求馬当番頭ヘ、御供目附徳永利右衛門御納戸奉行ヘ、道奉行御番勤二之宮藤太左衛門・御目附北郷八右衛門・御広敷番之頭西川源八共ニ高奉行ヘ転役、道奉行御番勤永山與三右衛門御馬預ヘ、同黒葛原周右衛門御供目附ヘ改職、御記録奉行山口大右衛門御供目附勤被二仰付一、御記録奉行如レ元、御代官吟味役勤梅北大右衛門郡奉行ヘ転役、勤如レ元、助教町田長右衛門御記録方添役ヘ転役勤方如レ元、山奉行所書役藺牟田半右衛門山奉行被二仰付一、是樺山・秩父在職中雖レ為所二執申一、最早被二仰出置一ノ間不レ得レ已今日其通被二相行一由相聞ユ、

今日御役替ニ付狂歌数首世ニ流布ス、不レ知二何人作一、

投糞を食ふ肝先の山口は
小男なれと扱も大右衛門

利右衛門ハ西田ノ里ニ家ス、爵世々御小姓与タリ、上邸ノ労ヲ以テ御馬廻トナル、久フシテ御供目附ヲ授ケラル文化元年、頗ル才芸アリ、樺山・秩父カ為ニ識ラル、是ニ由テ超遷セラテ御納戸奉行ニ至ル、

傳内ハ西田ノ里ニ家ス、爵世々小番タリ、表御小姓ヨリ擢ラレテ御目附トナル天明六年、後家貧キヲ以テ請テ出水ニ地頭代タリ、既ニ反テ又郡奉行ヲ授ケラル文化二年、傳内素ヨリ清水盛行ト断金ノ交アリ、又盛之ニ因テ秩父季保ニ通ス、故ヲ以テ為ニ薦メラレテ御作事奉行トナル、

藤太左衛門ハ故ノ京都御留守居藤太左衛門政方カ子ナリ、草牟田ノ里ニ家ス、爵世々小番タリ、〔ママ〕ヨリ起テ御供目附トナル、後道奉行ニ出サル寛政五年、道奉行ノ官罷ムニ及テ又本職ヲ以テ直盧ニ給事ス是歳二月、是ニ至テ〔ママ〕ヲ二竪ニ納テ高奉行ヲ得タリ、

八右衛門ハ故ノ御側御用人八右衛門資〔ママ〕ガ次子ナリ兄八右衛門資〔ママ〕ノ嗣トナル、〔ママ〕里ニ家ス、爵世々小番タリ、初七左衛門ト称ス、後今ノ称ニ改ム、御鳥見ヨリ起テ御目附トナル天明九年、久フシテ遷サレス、是ニ至テ苞苴問遺イヲ以高奉行トナル、

源八ハ荒田里ニ家ス爵世々御小姓与タリ、御徒目附ヨリ起テ御広敷番之頭トナル文化二年、隈元平太ト友トシ善シ、其高奉行ニ遷サル、平太蓋是ヲ与リ知レリ、

周右衛門ハ故ノ古学先生周右衛門召三経祝髪カ子ナリ、高麗町里ニ家ス、爵世々小番タリ、上邸ノ労ヲ以テ御馬廻トナリ、既ニシテ御供目附ヲ授ラル、後道奉行ニ出サル、道奉行ノ官罷ムニ及テ又本職ヲ以テ直盧ニ給事ス、周右衛門素ヨリ大重氏ト同姓ノ義アリ、又隈元氏ト累世通家タリ、其御供目附ニ復スル、二氏蓋カアルニ与レリ、

大右衛門名ハ有用、郡山權助長興カ弟ナリ、出テ山口某カ後トナル、故ニ山口氏ヲ冒ス、幼フシテ童子ヲ以テ府学ニ入ル、長スルニ及テ表御小姓トナル、頗ル才略アリ、略書史ニ渉ル、寛政五年癸丑八月晦日御記録方添役ニ擢ラレ府学ノ事ニ預参ス、秩父季保志ヲ得ルニ及テ、季保ガ弟ノ妻ハ有用カ外姪女ナリ事ハ長興カ伝ニ見ユ故ヲ以テ為ニ用ヒラレ、屢々造士舘ノ事ヲ以テ是ニ告ク、季保既旧教授ヲ黜ケ有用ニ授クルニ御記録奉行ヲ以テシ、新教授ト共ニ学政ヲ図ラシム是年正月是ニ至テ又御記録奉行ヲ以テ御供目附ノ事ヲ掌ル、

十三日　奈良原助左衛門御用ニテ何分被二仰渡一迄ノ間相慎可レ居旨被二仰付一、親類罷出承二知之一、但助左衛門事三日以前ヨリ病気ニテ出勤無レ之ト云云或曰、次郎右衛門等同様昨日可レ被二仰付ノ処、未御上下拝領無レ之由ニテ先其事被二相行一ノ間今日及レ此ト云云、午ノ刻過御側役長崎甚七御用有レ之江戸ヨリ到着直ニ登　城、先月十五日江戸発足ト云云、御納戸奉行村田孝右衛門御用有レ之江戸ヘ被レ遣間、早速相仕廻急ニテ可レ致二出立一旨被二仰付一、今日飛脚江戸ヘ被二差立一、極々急ニテ罷通　隈元軍六ヘ於二中途一追付可二呼返一旨被二仰含一ト云云、

十四日　島津若狭殿江戸ヘ被レ遣儀モ可レ有レ之間其心得

ニテ内々可レ被二相仕廻一、尤可レ為二当番頭手廻一旨被二仰付一、内用頼御用人西恰之助承知之ト云云、御勝手方掛・琉球掛共ニ掛被二仰付一迄ノ間、御家老衆月番廻シ可レ被レ為レ聞旨被二仰渡一、今日村田孝右衛門御当地出立、

十五日　思召ヲ以乞食十八人・非人十四人ヘ銭一貫文宛被レ下レ之、御徒目附平川市左衛門・山田弐三次、廻方横目伊地知休右衛門・黒田市左衛門検使ニテ、於二南林寺本門前一相二渡之一、但今日先二百文被二相渡一、残八百文ハ南林寺ヘ致二格護一置、毎月十五日二百文宛時々可二相渡一由被二仰渡一ト云云、是樺山・秩父在職中雖レ為レ所二議定一、最早被二　仰出置ノ間一不レ得レ已今日其通被二相行一由相聞ユ、

廿日　飛脚江戸ヨリ到着、

廿一日　飛脚江戸ヘ被二差立一、

今月中旬比御小納戸松崎善八郎・奥御小姓伊集院岩五郎・伊集院萬次郎・野元源五左衛門共ニ　御叱被二仰付一善八郎ヘハ二階堂左守（御小納戸）、岩五郎・萬次郎ヘハ中山次兵衛（御小姓頭取）申二渡之一、隈元・森山等ヘ致二荷擔一張二権威一ノ由如何ニ被二　思召一上厳敷可レ及二　御沙汰一ノ処、被レ加二　御憐愍一此節迄ハ不レ及二其儀一ノ間、向後屹ト相改可二勤仕一ト云云、

六月

二日　御小納戸頭取山田助左衛門江戸ヨリ下着、

三日　中急飛脚江戸ヨリ到着、

四日　山田助左衛門

若殿様御付御側役被二仰付一、

八日　隈元軍六先月（ママ）日於二勢州桑名ノ駅一信濃殿ヘ追付御用ノ趣為二相達一由ニテ、今日酉ノ刻御当地ヘ到着、典膳殿宅ヘ差越御届申出ルト云云、

九日　隈元軍六御用ニテ被二　聞召一通趣有レ之、何分被二仰渡一迄ノ間相慎可レ居旨被二仰付一、親類罷出承二知之一

御供目附黒葛原周右衛門山奉行ヘ改職、御勘定方小頭御用部屋書役勤三島長藏屋久島奉行ヘ転役、關山才次・肝付郷十郎・大迫助左衛（彦左衛門ト改名）共ニ

若殿様御付奥御小姓、三原九兵衛・御近習番川上孝八郎

若殿様御付御小姓、平瀬宗之丞宗也ト改名、
同御付小坊主被仰付川上甚助御用雖被仰渡他行ノ由御届申出ル、
十一日　樺山主税・秩父伊賀共ニ親類御用ニテ深可慎居旨被仰付置ノ間、大形ハ無之儀雖勿論、猶又可慎相慎旨被仰渡、
十二日　飛脚江戸へ被差立
十八日
太守様当月中可被遊御参府ノ処御病気ニテ難被為整由、先月十九日牧野備前守様へ御届書被差出ノ処、為被為受取段申来旨被仰渡、
廿一日　午ノ刻飛脚江戸ヨリ到着去ル四日江戸発足ト云云、
廿二日　島津安房殿去ル三日於江戸
若殿様御名代ニテ御家老被仰付、加判同役同前、座順島津將監殿次被仰出、且所帯方難渋ノ趣被聞召通御役料高千石被下置段申来旨被仰渡、
廿五日　島津若狭殿御用有之江戸へ被遣間中途被差急出府可有之旨被仰付、
太守様御病気ノ故、島津玄蕃殿御名代ニテ於椿之間被仰付之、

閏六月

三日　村田孝右衛門先月五日江戸へ参着、御用相仕廻同十一日江戸発足ノ処今日申ノ刻過　御当地へ到着、
四日　島津若狭殿御当地出立、伊集院清右衛門・坂元廉四郎為旅用達被召付、七十人御賦被成下、現人数三十五人ニテ罷通、中途宿札等都テ舎弟島津靱負名前可被相用旨被仰付ト云云、
五日　信濃殿先月五日於江戸御勝手方掛・琉球掛被仰付、表御用可兼承様為被仰出段申来旨被仰渡、
十九日　卯刻両飛脚同時ニ江戸ヨリ到着、去〔ママ〕江戸発足ト云云、
廿日　信濃殿去五月廿八日江戸へ参着、　高輪へ伺候ノ処度々　御前へ被召出御問条等有之、都合宜敷御用致承知先月十五日江戸発足ノ処、今日巳ノ刻御当地へ到着、
廿一日　未ノ刻後秩父・伊賀評定所へ御用有之間、親類

相付只今可罷出旨従信濃殿被仰渡、御裁許掛惣連名ノ書附ヲ以申達ス、足軽両人私宅ヘ持越親類ヘ相渡之、評定所ヘハ為申渡物頭三崎平太・若松平八、為席詰御目附伊集院源七・御裁許方見習榎本新九郎・御徒目附種子島六郎・横目木原四郎左衛門・林休左衛門被差越已ニ用意相整雖待設、時刻押移申ノ初ニ及フマテ不罷出間、御兵具方足軽ヲ以テ催促及両度、猶依致遅滞肝煎差遣可搦取ト已ニ致其格護ノ処（都テ評定所申渡者催促及両度迄不罷出節ハ踏込搦捕儀御規ト云云）申中刻計ニ伊賀着服麻上下ニテ駕篭ニ乗、親類八田孝之進・兒玉祝人并伊地知嘉右衛門・伊地知正九郎（正九郎事麻上下着用ト云云）以上四人相付罷出ル、御届申出扣居ノ処押付評席ヘ被召出ノ間如例肝煎扣所ニテ刀大小戻（モヤ）取之并鼻紙袋取揚之、上下同可剝取ノ処不及其沙汰越度ノ由相聞ヘ追テ私宅ヘ差越取揚ト云云、足軽五人前後左右ヘ相付致警固、扨評席ヘ召居、御書附ヲ以猶又被聞召通趣有之、悪石島（七島ノ内最上ノ悪地）ヘ遠島被仰付旨申渡ス、三崎平太読之（元来物頭新役ヨリ申渡儀為規ノ間若松平八可読之ノ処依有子細平太ハ相頼ト云云）、畢テ先如私宅可罷帰由被召退、足軽五人如元致警固付添ノ親類ヘ引渡之、此時駕篭簾双方共ニ可剝取ノ処、足軽モ致仰天不及其沙汰ノ間如元簾相掛罷帰ト云云、

或曰、伊賀御召状ヲ蒙リ格護ヲ切腹ニ相究、畳ヲ揚サセ板敷ニ毛氈ヲ敷キ脇差ノ柄ヲ紙ニテ巻キナトスル処ニ、親類共推止メ楚忽ノ働不可然一先様子可聞合由ニテ、相良市郎左衛門・石原龍助（月番御用人）ガ宅ヘ差越シ、御取扱ノ様子内分ヲ以為知可給由雖申、取次役ノ儀ニテ一向不知由相答フ、伊地知筑右衛門評定所ヘ差越御裁許方書役共ヘ内分ヲ以雖聞合不答ノ間内山伊右衛門カ宅ヘ差越及内談是又対役場難答、伊地知正九郎、隈元平太カ宅ヘ差越帰来テ、出テ可被承知切腹無勿体由申ト云ニ依テ、伊賀共儀ニ従ヒ切腹之座ヲ取収メ已ニ赴ノ間刻限及遅滞ト云云、伊賀召ニ赴節ハ三官橋筋ヨリ山之口通ニ出、地蔵後ヨリ如松原通通ルノ処、見物ノ貴賤路次ニ致充満ノ間、帰宅ノ節ハ路筋相違ヘ天神馬場通ヨリ辺路ヲ（「虫喰不知」）通ルト云云、

伊賀帰宅ノ上石原龍助宅ヘ親類被　召出、被処遠島ニ

付便船有之迄ノ間於私宅座敷取拵被入置旨被仰渡（都テ評定）（所申渡者便船有之迄ノ間揚屋ヘ被召込儀御規ノ処、伊賀事御家老職為相勤訳ヲ以被加御宥免ト云云）、樺山主税親類御用ニテ信濃殿宅ヘ被召出、猶又被　聞召通趣有之於私領座敷取拵被入置旨被仰渡、島津藤次郎申渡之（未ノ刻後）、依之親類樺山權十郎・樺山八郎等従今夜如蘭牟田差越ト云云、勝部軍記・清水源左衛門・森山休右衛門・隈元平太・隈元軍六・木藤市右衛門以上六人信濃殿宅ヘ親類御用ニテ共ニ御役被差免、是迄ノ通相慎可居旨被仰渡（未ノ刻後）、堀甚左衛門・日置五郎太・大重五郎左衛門・小島甚兵衛・岡元千右衛門・税所新助・伊集院萬次郎・野元源五左衛門・大河平喜左衛門・東郷仲藏・田代清太・森岡孫右衛門以上十二人御用人座ヘ御用ニテ何分被仰渡迄ノ間相慎可居旨被仰付、親類名代ニテ承知之（未ノ刻前）、

甚兵衛名ハ〔ママ〕、故ノ御側役甚兵衛カ次子ナリ、兄佐平次（仕テ表御小姓タリ）カ後トナル、鞀韃鏊ノ里ニ家ス、爵世々小番タリ、初甚藏ト称ス、後佐平次ト改ム、又今ノ称ニ改ム、寛政五年癸巳二月廿八日大番頭座進達掛ヨリ起テ御目附トナル、初大重兼〔ママ〕ノ妻ハ〔ママ〕ガ兄ノ子ナリ〔ママ〕兄ノ後ヲ継キ又其嫂ヲ聘ス、故ヲ以テ兼〔ママ〕ト相親ムコト猶舅〔壻〕増ノ如シ、朋党ノ起ルヤ〔ママ〕兼〔ママ〕ニ因テ款ヲ両隈元ニ納ル、遂ニ樺山・秩父ガ為ニ任用セラレテ屢事ヲ案験ス、是ニ至テ兼〔ママ〕ト同ク罪ヲ得タリ、

千右衛門名ハ定〔ママ〕、故之当番頭千右衛門定好カ長子ナリ、高麗町ノ里ニ家ス、爵世々小番タリ、初仙兵衛ト称ス、後守度ト改ム、又今ノ称ニ改ム、寛政七年乙卯七月朔日御近習番ヨリ起テ御目附トナル、定〔ママ〕素ヨリ秩父季保・清水盛之ト友タリ、交水魚ノ如シ其会集スル必ス国政ヲ是非シ人物ヲ褒貶ス、定〔ママ〕カ父嘗テ二子カ為人ヲ悪ミ定〔ママ〕ヲ勧メテ交ヲ絶シム、定〔ママ〕聴ス、二子志ヲ得ルニ及テ却テ是カ耳目トナル是ニ至テ遂ニ罪ヲ得タリ、

清太名ハ〔ママ〕、今ノ助左衛門カ弟ナリ、始テ族ヲ別ニス、高麗町ノ里ニ家ス、爵大番タリ、初メ書役ヲ以テ御記録所・六組所等〔ママ〕給事ス、後山本某カ為ニ（虫喰不知）

徳島ニ附役タリ、既ニ反テ未宦セス〔ママ〕頗ル気節ヲ尚ヒ稍文字ヲ識ル、秩父季保・清水盛之等ト相往来ス、又隈元平太ハ従父兄弟ノ親アリ（清太カ父宗四郎ト称ス、本姓隈元氏平太カ父ト兄弟タリ、故清太ニ於テ云爾）朋党ノ起ルヤ道路流言ス、清太将ニ登用セラレントスト、既ニシテ事敗ル、卒ニ果サス、

孫右衛門名ハ〔ママ〕、本姓川畑氏（兄ヲ平太左衛門云、嘗テ御勘定所等ニ給事ス）出テ森岡澤右衛門カ後トナル、故ニ森岡氏ヲ冒ス、初平蔵ト称ス、後今ノ称ニ改ム、少フシテ御勘定所ニ給事ス、文化二年癸巳造士館書役助トナル、〔ママ〕頗ル理学ニ志シ木藤武清ニ従テ大極図説ヲ受ケ、性質魯鋭〔鈍カ〕通暁スル所ナシ、秩父季保・清水盛之ト友タリ、常ニ往来絡繹シテ殆ト虚日ナシ、其樺山久言ニ於ル母ノ主家タルヲ以テ仕テ（カ母嘗テ樺山氏ニ灑掃ノ役ニ給ス）特ニ請テ門客トナリ出入時ナク進退途ヲ殊ニス、蓋家人父子ノ礼ノ如シト云、久言・季保等ト皆志ヲ得ルニ及テ〔ママ〕造士館書役ヲ以テ其間ニ倍趨シ、凡聞見スル所是ニ告ケサルナシ、山本教授ノ職ヲ罷ラル〔ママ〕蓋是ヲ与リ知レリ、或曰季保〔ママ〕ヲ薦メテ御近習番トセント欲ス、〔ママ〕家貧キヲ以テ従ハス、季保乃チ久言ト謀リ授ルニ御代官ヲ以セントス、未果サスシテ事敗ルト、

市田出雲何分被仰渡迄ノ間相慎可居旨雖被仰付置、不及其儀旨被仰渡、

廿二日　村田孝右衛門御納戸奉行ヨリ御側役ヘ転役被仰付　島津登殿　御前御用雖被仰渡、病気ニテ罷出体無之由御届被申出、秩父伊賀本名ノ太郎ヘ復名被仰付、親類御用ニテ被仰渡之、太郎座圍昨夜為取拵由従親類御届申出ル、依テ横目平瀬孫太夫・上原源右衛門為見分被差越ノ処、圍切組麁末ノ上緯木（スキ）無之牀板（ユカ）相薄、別テ不締ノ由ニテ其段月番御目附ヘ相付申出ルノ間、早速親類被召出緯木相通シ牀板厚可取拵旨被仰渡、太郎遠島被仰付ニ付如例為跡改横目松岡覺兵衛・平瀬四郎被差越ノ処、親類立合御切米百俵・屋敷一ケ所・家一軒并手鑓一本・刀大小・上下一具・古綿入一致所持、其外都テ親類借物ノ由依申、右ノ品数相改立合ノ親類

へ預置、覚書ヲ以月番御目附へ相付差出スト云云、太郎遠島ニ付乗船手当被仰渡、島津藤次郎承知ニテ御船奉行へ申渡スト云云、

廿三日　御代官吟味役勤藤島民之丞・吟味役山内喜平次御用有之、江戸へ被遣間仕舞次第致出立、於大坂詰御留守居吉井七郎右衛門同道ニテ可罷上旨被仰付、是従高輪御国元并上方向諸辺為取馴仁両人可差越旨被　仰越故也ト云云、秩父太郎座圍如御差図為取拵由御届申出ル、依テ再度為見分横目両人被差越ト云云、

廿四日　蔵方目附伊地知新太夫役儀被差免、先達テ来巳ノ春渡海喜界島見聞役雖被仰付置是亦被召揚、依為秩父太郎実弟也、千田龍右衛門来午年代琉球舘書役雖被仰付置被召揚、依為隈元平太・同軍六か名代也、堀孫太夫同代琉球舘聞役雖被仰付置被召揚、雖為讃良善助名代、依為清水源左衛門実弟也、　御目附四本長右衛門・町田幸太郎・山田直記・御裁許方見習榎本新九郎従監物殿御用ニテ別勤被仰付、今度党類ノ儀ニ付先達テ御裁許掛へ聞合雖被仰付、不行届儀有之再聞合ノ由相聞ユ、秩父太郎跡改被仰付ノトコロ、家財品数別テ相少ニ付為再改横目両人被差越、土蔵一軒川上甚左衛門預物ノ由雖申押テ相改加切封ト云云、樺山主税座囲一昨夜為取拵由従親類御届申出ル、依テ四本長右衛門・町田幸太郎為見分被差越旨、従信濃殿石原龍助御取次ヲ以被仰渡、申ノ中刻両人共ニ発足、

廿五日　藤島民之丞・山内喜平次御当地出立、

廿六日　未刻後奥御小姓若松八郎平八二男・奥医師森元高見御参覲御供雖被仰付置、病気分ニテ御断可申出旨被仰渡、

廿七日　四本長右衛門・町田幸太郎昨夜従薩牟田罷帰今日御届申出テ、主税囲於仮屋内表座敷八帖并六帖都合十四帖敷取拵床棚迄相付居、雪隠・湯殿ハ敷外へ附添別テ手広不締ノ由申ス、依テ親類樺山權十郎被召出、八帖一間迄取拵雪隠・湯殿モ其中へ相構、床棚等ノ儀ハ可相除旨画図面ヲ以被仰渡、即日權十郎如薩牟田差越スト云云、今度徒党発起国中多事ニ付向後御政務ノ儀、

御隠居様被加御介助旨、御家老衆連名ノ御書附ヲ以被仰渡、島津藤次郎通達之、

御隠居様御儀当分御介助之儀は御名目迄も御断之御事ニは候得共、此節之一件ニ付向後江戸御国元共何篇　御下知被遊候間、此旨向々江不洩様可致通達候、

閏六月　　將監

信濃

典膳

廿八日　登殿若年寄ヨリ御家老へ転役、加判同役同前、座順頴娃信濃殿次被　仰出、御役料高千石被下置、

太守様御病気ノ故島津首令（美濃改名）御名代ニテ被仰付之、

風俗ノ儀ニ付従

御隠居様御筆ヲ以被　仰出趣有之、

太守様御承知ノ上御家老衆連名ノ御添書ヲ以被仰渡、

今日於敷舞台御右筆見習橋元甚助弘之、

領国中風俗之儀ニ付ては先年以来度々申渡趣有之候得共、比日ニ至リ其詮も無之、城下ニて向々与を立元来同朋輩之事候処、他与之者地所之者之様相隔候風儀有之、年若之筋ニ夜行辻立等之儀も不相止趣相聞得、畢竟右通風俗不宜所より全体一和不致党を結候事も成立、仕置之妨ニ相成不可然事候、依之大身小身共ニ第一兼て定置候作法を相守分限相応夫々身分を慎、専国中静謐之儀を心掛一統ニ致和熟、若輩之者共も喧嘩口論は勿論屹と夜行辻立等禁止之趣、其外言語容貌等之儀迄も申渡置候通忘却不致堅固相守、屹と風俗立直候様取計、受持之役々江も無緩疎諸取締行届候様可心掛候、此上万一相背候者も有之候ハヽ屹と咎目申付、就中党を与仕置之妨ニ相成候者有之候ハヽ、其身ハ厳科ニ申付親兄弟共も大形之依軽重相当之咎目可申付候、

右之通薩摩守江も申達領国中江申渡、其外締ニも相成候細々之儀ハ家老中申談、是非風俗立直候様可取計候、

六月　　家老中江

御領国中風俗等之儀ニ付此度於江戸

御隠居様御意之趣　御直ニ信濃承知仕、別紙写之通
御筆を以被　仰出候ニ付
太守様被遊　御承知被　仰出候御趣意通人々厚奉汲
受、此涯屹と其詮相見得候様と之御事ニて、風俗等
之儀ニ付ては先年以来度々被　仰出置　御当代猶又
追々被為及　御沙汰御事候処、比日ニ至リ其詮無之
甚以不可然候、此節
御隠居様分て被　仰出候趣御役々初奉承知通ニて、
我々共ニも奉恐入儀候条、於諸向も　御深慮之程奉
恐察万端相慎、屹と風俗等立直リ候〔廉カ〕簾相見得　尊慮
を奉安候様朝暮心頭ニ掛堅可相守候、就中年若之面
々江は父兄等より無油断可令教育候、万一不守之者
候ハヽ、当人は勿論身近キ者迄も相当之御咎目可被
仰付候条、此旨行届候様支配下下役等江も時々可申
含候、

閏六月　　將監
　　信濃
　　典膳

廿九日　上原源兵衛・大場市左衛門逼塞雖被仰付置、及
百八十日御赦免被仰付、雖然各依有其罪、源兵衛事小
普請被召入、市左衛門事御奉公方被障置、伊集院平於
私宅申渡之、
御倹約ノ儀ニ付
御隠居様被　仰出趣有之
太守様御承知ノ上御家老衆連名ノ御添書ヲ以被仰渡、
今日従島津藤次郎・石原龍助於席々為承知筋可相心得
由ニテ通達之、
此節江戸・国元共何篇致下知候様無拠承趣有之難黙
止其意ニ応し候処、第一所帯向極々難渋之時節ニて、
段々聞通趣も有之難差置急務ニ候故、乍省略中五ヶ
年之間猶又稠敷取縮之儀致工面、差当於爰元は掛之
者をも申付、何篇取しらへ申出候様先達て致沙汰置
候、然処既ニ段々省略可有之上之事候得は、一通之
取しらへニてハ致作略度心付候儀ニても、目前之差
支ニて最早手之付様も無之間、等閑ニ相成候儀も可
有之候得共、前文通何篇用向聞届致下知候上は、い

つれニも取縮之詮相見得、所帯向少々ニても立直リ候様無之候ては不相済儀候間、是非詮立候様ニと手元を始日夜是のみ致心労事ニ候、依之諸役々ニも此旨汲受是迄之倹約筋とは訳も相替候儀と相心得、実々一涯染入心頭ニ掛急度遂吟味候様可致候、勿論右通取縮向之事候得は諸役場難儀ニも可及儀も気之毒候得共、今形ニて差置候ては不遠弥増難渋ニ成立、其節は諸人之難儀も無申計事候故、兎角取縮無之候て不叶儀候間深此旨を可存候、乍然差当諸人迷惑ニも相成候儀は用捨可致候、畢竟所帯向立直り諸人も身分相応致渡世候様ニとの本意候間、旁右之趣意不取違此涯無油断諸事取しらへ、瑣細之儀迄も行届無延引申出候様可取計候、乍此上万一不頓着ニて打過候向も有之候ハヽ、屹と可及沙汰候条、右之趣諸役場下役迄も致得心候様申渡、於国元も右趣意ニ準し取計有之候様可申越候事、

六月

此節江戸・御国元共

御隠居様何篇　御下知被遊候処、第一御所帯向極々御難渋之御時節ニて難被差置御急務故、乍省略中猶又当年より五ヶ年之間厳敷御取縮被仰付、是非其詮相立候様、乍然差当諸人迷惑ニ相成候儀は御用捨可被仰付候、畢竟御所帯向立直り諸人も身分相応致渡世候様ニとの　御本意候間、旁　御趣意不取違此涯無油断瑣細之儀迄も取しらへ可申出、乍此上万一不頓着ニて打過候向候ハヽ、屹と可被及　御沙汰趣、別紙写之通被　仰出ニ付

太守様被遊　御承知厚御趣意被　思召上候間、御役々得と奉承知、極々せり詰吟味を尽し、何れも近年中御取縮之詮相見得奉安　尊慮候様無之候ては不相成事候条、一涯致精勤諸事取調無延引可被申出候、

閏六月　　將監

信濃

典膳

晦日　樺山主税座囲如御画図面為取拵由、従親類樺山八郎御届申出ル、依テ再度為見分四本長右衛門・町田幸

太郎被差越、書役一人・足軽二人被召付旨被仰渡、申刻後両人共ニ発足、

今度樺山秩父擅(ホイママニシ)政事乱国中ニ付、従御隠居様御直書ヲ以御一門方へ被　仰出趣有之、就中御家老衆・若年寄・大目附衆へハ御問条ヲ以　御糺問被　仰付ノ間、何レモ奉謝罪及差扣ノ由相聞ユ、

各事格別之家柄ニて依事名代をも被相勤身分候故、平日之政事向ニ差構儀は無之候ても、国中異変も有之節は気を付内沙汰等被致事共持前之事候処、此節家老以下多人数進退且又役場規定事引払等有之、国中騒敷江戸表迄も相聞得色々風説いたし、剰　公辺江も内々相闇(響カ)国家大事候処、各一言沙汰被致候儀も不承何様相心得候哉、一門之詮無之頼少事ニ存候、仍て難差置各存慮之程承度此段申達候、已上、

御名

六月十五日

島津若狭殿

島津兵庫殿

島津長門殿

島津因幡殿

右　御書於江戸信濃殿被相受取、御当地着ノ上御一門方へ被相渡、外ニ書附二通是亦信濃殿持参ノ由ニテ世ニ流布ス、何者ノ為拵ヤラン、全非御書ト云云

樺山主税

秩父伊賀

右党を拮(結カ)或規定事役場等を引払政事を我儘ニいたし言語同断ニ候、我等末後再勤之期も難計候間、屹と再勤不相成筋袖判ニも可相記置候、以上、

六月十五日

御名

家老中江

我等過去之身分ニて不差構事候得共、此節之儀ニ付不得止事再預政事候、存生之我等を差置、致規定置候役場等引払ニ付為何沙汰も不被申事不孝之至ニ付国中内乱之儀内々　公辺江も相聞得、既ニ伝領も御手を被下程ニ成立不忠之至ニ候云云、

七月

二日　御供目附山口丈右衛門　御参覲御供雖被仰付置、病気分ニテ御断可申出旨被仰渡、四本長右衛門・町田幸太郎今朝従藺牟田罷帰御届申出、座囲致見分ノ処如御画図面相違無之ノ間、鎖前切封等如例致置ノ由申ト云云

三日　御用部屋書役吉田喜平次　御参覲御供雖被仰付置病気分ニテ御断可申出旨被仰渡、中急江戸ヘ被差立式日飛脚被召延、

四日　春秋釈菜御取止雖被仰付置、向後名目ノ儀ハ被建置旨被仰渡、於谷山・阿多・加世田・伊作・飯野・馬關田鉄炮弾（ワナ）ニテ諸鳥取儀被差留、

六日

太守様来廿一日　御発駕ニ付今日　御首途、將監殿御名代被相勉、次第如　御直参、巳刻後両飛脚江戸ヨリ到着、共ニ先月十九日江戸ヲ発スル由相聞ユ、但追飛脚ノ儀ハ四時相後致出立ノ処、於出水本飛脚ヘ追及ト云云、未ノ刻後秩父太郎親類川上甚左衛門・相良市郎左衛門御裁許方ヨリ御用ニテ罷出ノ処、御裁許掛内山伊右衛門席詰ニテ、同有馬藤七郎ヨリ御差図ノ趣申渡ス、太郎事被処遠島座囲雖被入置、追々被　聞召通趣有之間親類心得ヲ以可相働ト云云、依之伊地知新太夫・税所新助其外相集及談合、被仰渡趣太郎ヘ申聞囲相開ノ処、押付座敷ヘ出手水髪結暇乞ノ盃等相仕廻、申ノ下刻比如元囲内ヘ入伊地知喜三次介借（錯カ）ニテ　実ハ川上甚左衛門切腹ト云云、即刻甚左衛門・市郎左衛門ヨリ御裁許方ヘ御届申出（今日御裁許方酉刻過迄長詰ト云云）、且廻前横目ヘ披露書差出ス其趣自身於囲内舌喰切致雖儀ノ間、不得已切封相解親類差添雖加養生急所ニテ難叶体相見得無是非添手相果スノ由、是亦従御裁許方御内意ノ趣ト云云、丑刻比廻前横目能勢權藏外一人為死体見分差越ス、従大目附衆疵改等委敷不及致由御沙汰有之ト云云、

七日　太郎死体御構無之旨被仰渡ニ付、今夜亥ノ刻出棺ニテ南林寺山中ヘ送葬、元来實相院雖為旦寺当時和尚（那脱カ）無住職ノ故、源舜庵名代ニテ引導之、法名月景院覺心宗徹居士、遺言ニテ　御城ノ方ヘ相向子息太郎ト面ヲ

合スト云云、

八日　勝部軍記・清水源左衛門・森山三十・隈元平太・隈元軍六・木藤市右衛門・堀甚左衛門・日置五郎太・大重五郎左衛門・小島甚兵衛・岡元千右衛門・伊集院万次郎・野元源五左衛門・奈良原助左衛門・佐竹次郎右衛門・宇宿十次郎・有馬一郎・税所新助・大河平喜左衛門・東郷仲藏・森岡孫右衛門・田代清太以上二十二人、親類御用ニテ月番御目附ヨリ以書付申渡ス、何モ相慎可居旨被仰付置ノ間、不守ハ無之儀雖勿論猶又深可為相慎、若緩ノ儀於有之ハ親類縁者迄モ可及迷惑ト云云、

九日　未ノ刻後御納戸奉行林安右衛門若殿様御附御小姓同藤十郎（安右衛門嫡子）・表御小姓若松左衛幾（平八嫡子）・御側御用人座書役三宅甚兵衛　御参覲御供雖被仰付置、病気分ニテ御断可申出旨被仰渡、

十一日　御家老座書役植木長兵衛　御参覲御供雖被仰付置、病気分ニテ御断可申出旨被仰渡、不時飛脚江戸ヨリ到着、先月十九日両飛脚共ニ極急ニテ江戸ヲ発スト云云、

十二日　清水源左衛門先達テ御役被差免相慎可居旨被仰付置ノ処、今暁致切腹為相果由ニテ親類清水善右衛門披露相遂ルノ間、廻前横目堀仁右衛門・田中源七差越死体致見聞ノ処、自殺ノ様子ニ相見得胸腹ノ間ニ刀疵一ケ所有之ト云云（或曰源左衛門カ死非自殺、親類先縦其頭而後加刃腹擬自殺ト云云）、

或曰、源左衛門自殺前日大目附衆召讃良善助（源左衛門姉聟）於臺子間達事、善助退テ与尾上甚五左衛門（同姉聟）密談、良久有頃甚五左衛門称有内用託同役テ帰、不知何故源左衛門死体御構無之旨被仰渡ニ付、今夜亥ノ刻出棺ニテ南林寺山中ヘ送葬、法名〔マ〕〔マ〕居士ト云云

林安右衛門并嫡子藤十郎御供御断可申出旨被仰渡ニ付一昨日願書差出ノ処、如元可被召列ノ間其心得ニテ相仕廻、且無遠慮可致出勤由ニテ今日願書被相下ト云云不知何子細、

十三日　未ノ刻前御勘定奉行島津内匠・御小姓与番頭山田静馬・当番頭島津彦太夫・当番頭御勝手方御用人勤島津右平太・御鉄炮奉行若松平八・同河野安之右衛門

・御広敷御用人八木孝次郎・御作事奉行木場傳内・御記録奉行御供目附勤山口大右衛門・長崎御附人御家老座書役勤八田源之進・高奉行西川源八・御小納戸永田佐一郎・松崎善八郎・御目附本田助之丞・同郡山權助・同西覺太夫・同曾木藤太郎・同御裁許掛尾上甚五左衛門・山奉行黒葛原周右衛門・御記録方添役八田孝之進・御裁許方見習愛甲半藏・御記録方見習御番勤兒玉税人・進達掛木場休右衛門・横目伊勢九郎八・同伊地知小十郎・藏方目附宇宿正十郎・御広敷横目大迫八次・御用部屋書役吉田喜平次・御側御用人座書役三宅甚兵衛・無役伊地知猪兵衛・隠居蘆谷驢齋以上三十一人何分被仰渡迄ノ間先相慎可居旨被仰付、御用人名越右膳御座又ハ私宅ニ於テ申渡之、或自身或ハ名代ニテ承知スト云云、

内匠名ハ久〔ママ〕モト故ノ大目附帯刀久名ノ次子ナリ、兄清太夫カ後トナル、高麗町ノ里家ス、爵世々一所持格タリ、世蔭ヲ以テ当番頭トナリ御小姓与番頭ヲ歴テ御勘定奉行ニ至ル、久フシテ遷サレス朋党ノ事起ルニ及テ、久〔ママ〕蓋隈元平太（久ト同社契アリカ為）・森岡孫右衛門（久ニ私事ヲ弁ス）ニ因テ欵〔款カ〕ヲ秩父季保ニ納ル、季保為ニ樺山久信〔言カ〕ト謀リ将ニ薦挙スル所アラントス、未果サシテ事敗ル、或曰、季保将ニ江戸ニ如ントス、久　先世ノ甲冑ヲ贈テ贐〔ハナムケ〕トスト、未果シテ然ルヤ否ヤヲ知ラス

靜馬名ハ有昌、故ノ御家老伯耆有儀カ子ナリ、平馬場里ニ家ス、爵世々寄合タリ、初震九郎ト称ス、後司ト改ム、又内藏ト改又今ノ称ニ改ム、父蔭ヲ以テ当番頭トナル、累ニ御小姓組番頭ニ遷サル、有昌河野安之右衛門通〔ママ〕ノ姉ヲ娶ル、実ニ秩父季保ト同母兄弟タリ、故ヲ以テ有昌季保ト来往スルコト猶姻家ノ如シ、其志ヲ得ルニ及テ遂ニ是カ耳目トナル、

彦太夫名ハ久〔ママ〕、故ノ当番頭齊記カ子ナリ、千石馬場巷ニ家ス、爵世々寄合タリ、詰衆ヨリ起テ当番頭トナル、頗風雅ヲ好清水盛行ト友タリ、交同袍ノ如シト云、

右平太名ハ久芳、故ノ当番頭直衛カ子ナリ、立野里ニ家ス、爵世々寄合タリ、世蔭ヲ以テ当番頭トナル、

尋テ本職ヲ以テ御勝手方御用人ノ事ヲ掌ル、初樺山久言カ義姑重富公子ニ嫁シテ今ノ鶴遊君及ビ久芳カ母ヲ生ム、而シテ久芳カ弟久〔ママ〕権十郎ト称ス 又出テ久言カ別族ノ後ヲ継ク、故ヲ以テ久芳久言ト往来交親シ、久言カ御勝手方ニ主タルヤ久芳御用人ヲ以其教令ヲ出入ス、廃挙ノ事蓋是ヲ与リ知レリ、

源之進名ハ友貞、常盤谷里ニ家ス、後新屋敷里ニ遷ル、爵世々大番タリ、少フシテ御家老座書役タリ、給事ノ年労ヲ以テ秩ヲ長崎御附人ニ進メラル、秩父季保ハ友貞カ壻伊地知季達ノ兄ナリ、其御勝手方御家老ヲ以テ表方ノ事ヲ兼行フヤ、友貞先生書役ヲ以テ其間ニ周旋ス、黜陟廃挙ノ事蓋是ヲ与知レリ、

孝之進ハ源之進カ嫡子ナリ、句読師助ヨリ起テ御記録方見習トナル、見習ノ職罷ムニ及テ添役ニ転セラル、是ニ至テ父ト与ニ罪ヲ得タリ、

祝人ハ源之進カ次子ナリ、出テ兒玉祝人カ後トナル、無役ヨリ起テ御記録方見習トナル、見習ノ職罷ムニ及テ本職ヲ以テ直盧ニ給事ス、是ニ至テ父兄ト共ニ罪ヲ得タリ、

佐一郎ハ故ノ御目附佐太郎カ子ナリ、加治木馬場巷ニ家ス、爵世々大番タリ、初盛之助ト称ス、後今ノ称ニ改ム、初公子雄五郎君奥御小姓タリ、後 世子御小納戸見習ニ遷サレ尋テ御小納戸トナル、佐一郎素ヨリ秩父季保・清水盛行〔之カ〕ト友タリ、交兄弟ノ如シ、又木藤武清ニ従テ近思録ヲ受ク、朋党ノ起ルヤ佐一郎時ニ江戸ニ在リ預リ知ル所ナキカ如シ、其反ルニ及テ輿論以為季保等是ヲ召還スト、是ニ至テ遂ニ連坐セラル、

助之丞ハ故ノ御側御用人助之丞カ嫡孫ナリ、父〔ママ〕早ク死ス、故ヲ以テ祖ニ嗣テ重ヲ承ク、〔ママ〕ノ里ニ家ス、爵世々小番タリ、〔ママ〕ヨリ起テ御目附トナル、両度支カ志ヲ得ルヤ為ニ任用セラレテ屢々事ニ案験ス、是ニ至テ遂ニ罪ヲ得タリ、

權助名ハ長興、故ノ御側御用人權藏カ子ナリ、平馬場里ニ家ス、爵世々小番タリ、幼フシテ童子ヲ以テ府学ニ入ル、長スルニ及テ奥御小姓トナル、遂ニ屋

久島奉行ニ擢テラレ寛政元年久フシテ御目附ニ遷サル文化三年
秩父季保カ弟伊地知季達カ妻ハ長興カ姉八田友貞カ妻ノ子ナリ、季達本季保ト同居ス、故ヲ以テ長興・季保ト来往スルコト季達ト異ナルナシ、其志ヲ得ルニ及テ遂ニ是カ耳目トナル、
覺太夫ハ故ノ当番頭御側御用人勤西覺兵衛カ子ナリ新屋敷里ニ家ス、爵世々小番タリ、上邸ノ労ヲ以テ御馬廻トナル、休右衛門ハ故ノ御馬廻休右衛門カ子ナリ、亦新屋敷里ニ家ス、爵世々小番タリ、幼フシテ童子ヲ以テ府学ニ入ル、長スルニ及テ進達掛トナツテ六組所ニ給事ス、覺太夫岡元千右衛門ト従父兄弟ノ親アリ覺太夫カ父覺兵衛ハ千右衛門カ父ノ弟ナリ、出テ西氏ノ後トナル、休右衛門清水源左衛門ト昏姻ノ義アリ休右衛門カ妻ハ源左衛門カ妹ナリ　又皆兵法ヲ学フヲ以テ樺山久言ト友タリ二子嘗テ久言ト共ニ兵法ヲ園田氏ニ学フ久言カ志ヲ得ルヤ遂ニ与俱ニ之カ用トナル、
九郎八ハ伊地知小十郎カ兄ナリ、頗ル知略アリ、秩父季保カ御勝手方ニ宰タルヤ箚子ヲ上ツテ利用ノ術ヲ言フ、季保是ヲ善トシ遣シテ大坂ニ如テ事ヲ図ラシム、諧ハスシテ還ル、尋テ季保亦敗ル、
小十郎本姓伊勢氏、出テ伊地知某カ後トナル、秩父季保ト嫡庶ノ義アリ、季保已ニ志ヲ得多ク親故ヲ挙ク、独小十郎ニ及ハス、小十郎季保ニ謂テ曰ク、上方豈ニ大無アランヤト、季保其言ヲ奇トシ将ニ登用セントス、未果サスシテ敗ル、
正十郎・猪兵衛ハ御春屋役宇宿正右衛門カ二子ナリ猪兵衛出テ伊地知某カ後トナル、故ニ伊地知氏ヲ冒ス、兄弟共ニ清水盛之ト莫逆ノ友タリ、
八次、本姓町田氏兄八右衛門今御広敷番頭タリ、出テ大迫某カ嗣トナル、故ニ大迫氏ヲ冒ス、高麗町里ニ家ス、爵世々大番タリ、秩父季保・清水盛之ト交通ス、琵琶ヲ善スルヲ以テ称セラル、
喜平次、本姓三島氏出テ吉田某カ後トナル、故ニ吉田氏ヲ冒ス、高麗町ノ里ニ家ス、爵世々大番タリ、素ヨリ隈元平太ト交厚シ、其御側役タルヤ喜平次御用部屋書役ヲ以テ其事ニ周旋シ、頗ル弥縫ノ跡アリト云、

驢齋ハ西田里ニ家ス、爵世々大番タリ、初御留守居附役ヲ以テ江戸ニ往来スルコト数年、頗ル才略アリ、善ク其職ニ称フ、後事ニ坐シテ職ヲ奪ハレ終身ヲ禁錮セラル、乃チ　命ヲ請フテ致仕ス、素ヨリ清水盛之ト断金ノ契アリ、其志ヲ得ルヤ毎ニ其門ニ候シ為ニ事ヲ策スル多シトス、

十六日　中小姓川上甚左衛門（秩父太郎従弟遠）・横目大橋八次郎（八田孝之進妻ノ兄）　御参覲御供雖被仰付置、共ニ病気分ニテ御断可申出旨被仰渡、今日

太守様五社へ　御参詣、

十九日　秩父太郎跡家屋敷并家来家財没収被仰付、代々所被下置ノ御切米被召揚之、妻子其外親類其身相果ノ故御構無之、跡職ノ儀ハ嫡子早世ノ間二男ヘ家格通可願出旨被仰渡ト云云、家来七人没収ノ上御春屋人足被仰付、内一人ハ秩父家普代ノ郎従隈城ノ住人棒澤六郎ト云云、

廿日　秩父太郎跡為家受取御作事奉行、為屋敷受取御勘定方小頭被差越、親類立合引渡之、　従今夜御作事方人足一人宛太郎御取揚屋敷ヘ屋番相勉、

廿二日　巳刻

太守様為　御参覲　御発駕御次弟如例、御側御用人讃良善助・御側役長崎甚七・御納戸奉行林安右衛門以下供奉、　今日急飛脚二人江戸ヘ被差立、

廿四日　秩父太郎居宅御取揚ニ付入札払被仰渡、

廿五日　中急飛脚江戸ヨリ到着、

廿八日　御納戸奉行徳永利右衛門・高奉行北郷八右衛門・二宮藤太左衛門・御馬預永山與三右衛門・寺社方取次伊集院善太夫・奥医師森元高見

若殿様御附御小姓森山清蔵（休右衛門カ弟ニテ木藤市右衛門カ門人也）以上七人何分被仰渡迄ノ間先相慎可居旨被仰付、月番御用人於御座申渡之、自身又ハ名代ニテ承知スト云云、

廿九日　御裁許掛鎌田四郎左衛門何分被仰渡迄ノ間相慎可居旨被仰付、申渡如昨日、自身承知ト云云醫學院講釈医師脇田了海被　聞召通趣有之、揚座敷ヘ被遣置旨被仰渡、表御茶道有馬眞齋何分被仰渡迄ノ間相慎可居旨被仰付、　式日飛脚被召延森善之丞・鎌田十右衛門

中急ニテ被差立、

八月

朔日　来巳春渡海島方代官附役先達テ樺山・秩父勤役内御内分ヲ以雖被仰付置、何モ先被召揚旨被仰渡、

十三日　島方役賦被相替種子島次右衛門へ、大島代官今村競・川上十郎左衛門・東郷長左衛門・福島半助・大田吉兵衛但両人中間・野田勘兵衛・大迫次郎九郎但両人中間へ同附役、町田主馬・平田掃部但両人中間へ徳島代官、倉山作太夫・津留八左衛門・山本傳蔵但両人中間へ同附役、伊集院蔵主へ喜界島代官、島津矢柄・島津相馬但両人中間へ同附役、相良此右衛門へ沖永良部島代官、橋口與三次・三原仲左衛門・小幡左司馬へ同附役可被仰付旨御内分ヲ以被仰渡、島津右平太・堀四郎太夫・八木孝次郎儀ハ御取揚切ト云云、森山休右衛門・隈元平太・隈元軍六、亡清水源左衛門勤役内異国方御手当書被渡置ノ処、御役雖被差免未致返上ノ間、今日親類被召出何モ可差出旨被仰渡、樺山主税・秩父太郎在職中所取扱ノ諸書附用不用共ニ焼捨被仰付、今日御勝手方書役数人別勤ニテ原良村辺へ持越不残焼捨ルト云云、

廿五日　来巳春渡海島方見聞役横目蔵方目附へ雖被仰付置樺山・秩父勤役内、何トモ先被召揚旨被仰渡、

廿九日　横目松岡覺兵衛へ大島、馬場彦右衛門へ喜界島見聞役雖被仰付置共ニ被差免旨被仰渡、奥御小姓伊集院岩五郎・奥御茶道村田山雪何分被仰渡迄ノ間先相慎可居旨被仰付、上町年寄西村三十格護所へ被入置旨被仰渡、

晦日　横目三原七左衛門・崎元直次郎・伊地知休右衛門・椎原平蔵・能勢龍右衛門以上五人何分被仰渡迄ノ間先相慎可居旨被仰渡、今日飛脚江戸へ被差立

九月

六日　木場傳内先達テ相慎可居旨被仰付置ノ処、病気相煩ヒ養生不叶今日死去、〔マヽ〕症ト云云、披露相遂ルノ処死体御構無之旨被仰渡、

九日　飛脚江戸ヨリ到着、先月十五日江戸ヲ発スト云云

十二日　御鷹匠頭近藤隆左衛門・宮内左喜五郎、御鳥見頭土師孫左衛門御番勤雖被仰付置、本職ノ通可相勤旨

被仰付、隈元平太・隈元軍六・森山休右衞門・勝部軍記・日置五郎太・岡元千右衞門・堀甚左衞門・小島甚兵衞・木藤市右衞門・大重五郎左衞門以上十人被　聞召通趣有之、相慎可居旨被仰付置ノ処、平太事臥蛇島ヘ、軍六事悪石島ヘ、休右衞門事寶島ヘ、軍記事諏訪ノ瀬島ヘ、五郎太事沖ノ永良部島ヘ、千右衞門事喜界島ヘ、市右衞門・五郎左衞門事德島ヘ、甚左衞門・甚兵衞事大島ヘ遠島可被仰付ニ罪科相究、今日未刻後評定所ヘ御用有之間明日六半時親類相付可罷出旨、従信濃殿被仰渡、御裁許掛連名書附ヲ以申達ス、次第如先規、但平太・軍六・休右衞門・軍記儀ハ前以親類御裁許方ヘ被召出、猶又被　聞召通趣有之評定所御用被仰渡ノ間、今晩中致切腹御届可申出旨被仰渡、御裁許掛樺山休太夫・御裁許方見習榎本新九郎申渡之、平太・軍六親類伊地知筑右衞門・折田清之進、休右衞門親類堀次郎左衞門・森山正右衞門、軍記親類能勢清右衞門・日高新左衞門承知之、依テ今夜酉刻ヨリ亥刻迄ノ間休右衞門事致自殺不及介錯、平太事伊地知正九郎（実ハ正九郎兄古川権蔵）、軍六事田代助之進（実ハ宮下市助）、軍記事池田龍助（実ハ龍助弟塚田金平）介錯ニテ切腹相遂御届申出ル、御裁許方ヘハ休太夫・新九郎不致退出相待居ノ間、四人ノ切腹承届子刻比主水殿宅ヘ差越申上之、主水殿宅ヘハ前以横目八人被召寄置ノ間、早速平太方ヘハ種子島小十郎・岩元半助、軍六方ヘハ藤野六郎右衞門・肥後與左衞門、休右衞門方ヘハ大橋八十郎・西田八郎右衞門、軍記方ヘハ鎌田藤之進・志和屋左太郎為見届被差越、廻前横目方ヘハ如例別段致披露ノ間、今日下方廻前山田増右衞門・本城仲治・柳元十藏共ニ四ヶ所ヘ差越死体見分スト云云

休右衞門将ニ死ニ就ントス、置酒（チンシュ）シテ家人ト訣（ハカ）ル、

献酬ノ間詩ヲ賦シテ曰ク、

慈母忽悲罹（カカル）阨身　古来如此幾忠臣
吾心自若如平日　不怨天矣不尤人

又倭歌ヲ吟シテ曰ク、

願ふそよ月にかゝれる浮雲を
　はや吹はらへ千代の神風

遂ニ起テ熨斗目ヲ服シ麻上下ヲ加ヘ、書院ノ中央ニ

坐シ自ラ刀ヲ引テ腹ヲ刺ス、間アツテ死セス、旁ニ
アル者相ケンコトヲ請フ、許サス、弟清藏ニ命シテ
後ヨリ抱カシム、既ニシテ命ヲ殞ス、或曰ク休右衞
門カ宗子森山正右衞門久ク御兵具方ニ在テ介錯ノ事
ニ習フ、休右衞門ヲ取テ柱ニ推付刀ヲ以テ其腹ヲ横
切テ是ヲ殺シ以テ自殺ニ擬スト、未実否ヲ知ス、

十三日　大重五郎左衞門事榎本助左衞門実ハ福島直之丞、日置五
郎太事日置友右衞門、岡元千右衞門事兒玉嘉林実ハ谷元庄之進、
堀甚左衞門事堀八左衞門、小島甚兵衞事高崎佐藤次介
錯ニテ夜前致切腹ノ由ニテ、今朝従親類評定所ヘ御届
申出ル、評定所ヘハ横目数人従早天相詰居ノ間、早速
五郎左衞門方ヘハ上原源右衞門・黑田作左衞門、五郎
太方ヘハ黑田市左衞門・石神万右衞門、千右衞門方ヘ
ハ山本新藏・染川源兵衞、甚兵衞方ヘハ奥山藤九郎・
三原藤五郎為見届被差越、廻前横目方ヘハ如例別段致
披露ノ間、今日下方廻前木脇八郎右衞門・淵邊良右衞
門五郎太・千右衞門方ヘ、上方廻前富山市兵衞・市來
傳右衞門・石川龍五郎甚兵衞方ヘ差越死体見分ス、但
五郎左衞門儀ハ夜前早相仕廻ノ間、昨日下方廻前見分
之、甚左衞門儀ハ家格為寄合ノ間、為見届并見分御目
附両人被差越ト云云、
物頭町田次郎九郎・藤野休右衞門・岩下佐八郎・新納
隼見外ニ一人姓名不詳、御目附坂本彦右衞門、御裁許掛樺山
休太夫、御裁許方見習榎本新九郎、御徒目附川上武右
衞門、横目木尾助右衞門・坂元平右衞門評定所ヘ相詰
待設ルノ処、五郎太・千右衞門・甚左衞門・甚兵衞共
ニ及切腹、木藤市右衞門一人如刻限親類相付罷出ル、
依テ評席ヘ被召出猶又被　聞召通趣有之德ノ島ヘ遠島
被仰付、便船有之迄ノ間揚座敷ヘ被遣置旨被仰渡、彦
右衞門・武右衞門・助右衞門席詰ニテ佐八郎申渡之、
次弟如先規、市右衞門被処遠島ニ付跡改被仰付、横目
木尾助右衞門・坂本平右衞門被差越家財相改覚書差出
如先例、税所新助・伊集院万次郎・野元源五左衞門・
奈良原助左衞門・佐竹次郎右衞門・宇宿十次郎・有馬
一郎・大河平喜左衞門・東郷仲藏・森岡孫右衞門以上
十人被　聞召通趣有之、御役又ハ役儀被差免是迄ノ通

相慎可居旨被仰渡、　亡清水源左衞門親類御用ニテ猶又被　聞召通趣有之可被処遠島ノ処、相果ノ間不及其儀家格御小姓与ニ被相下旨被仰渡、信濃殿御差図ニテ田畑武右衞門申渡之、

清水源左衞門

右被　聞召通趣有之、御役被差免相慎居様被仰付置候処、先達て致自害相果死体無御構旨申渡有之候、存生之内之儀猶又被　聞召通趣有之、家格御小姓与ニ被相下遠嶋被仰付筈之処相果候付、右体相当之御取扱被仰付家格御小姓与ニ被相下候条、諸帳面等如例可被申渡旨信濃殿御差図ニて候、已上、

九月十三日　　田畑武右衞門

隈元平太・隈元軍六・森山休右衞門・勝部軍記親類御用ニテ家格御小姓与ニ被相下、死体御構無之旨被仰渡、

隈元平太

右猶又被　聞召通趣有之、家格御小姓与ヘ被相下遠嶋申渡筈を以、評定所御用申渡候処致切腹候段親類より申出、右科相当ヲ以家格御小姓与江被相下死体御構無之ト云云、

日置五郎太・岡元千右衞門・堀甚左衞門・小島甚兵衞・大重五郎左衞門儀ハ、家格不及被相下死体御構無之旨被仰渡、　今夜酉ノ刻ヨリ亥ノ刻迄ノ間平太・軍六・休右衞門・千右衞門・甚左衞門・五郎左衞門出棺ニテ南林寺其外ヘ送葬ト云云、

十四日　清水源左衞門・隈元平太・隈元軍六・森山休右衞門・勝部軍記・日置五郎太・岡元千右衞門・堀甚左衞門・小島甚兵衞・大重五郎左衞門被処遠島ニ付跡改被仰付、源左衞門方ヘハ横目黒田市左衞門・肥後與左衞門、平太方ヘハ同遠矢金兵衞・鎌田藤之進、軍六方ヘハ同佐々木源兵衞・柳元十藏、休右衞門方ヘハ同田代宅右衞門・種子島小十郎、軍記方ヘハ同藤野六郎右衞門・木脇八郎右衞門、五郎太方ヘハ同市來與四郎・田中權四郎、千右衞門方ヘハ同小森新之丞・貴島甚五郎、甚左衞門方ヘハ同平瀬孫太夫・岩元半助、五郎左衞門方ヘハ川村勝左衞門・淵邊良右衞門、甚兵衞方ヘハ奥山藤九郎・石川龍五郎被差越、家財相改覚書差出

如先例、尾畔下・上伊敷村・下伊敷村・西田村・武村・荒田村・中村・郡元村并谷山・飯野・加久藤・馬關田・田布施・加世田・阿多・伊作御鷹場被相建、諸事如以前被仰付旨被仰渡、　御鷹部屋十五軒尾畔へ被召立、

十七日　新納内藏・岩下佐次右衞門・高橋霽山・赤松圓山共ニ親類御用ニテ、慎等ノ不及勘弁世間徘徊勝手次第可為致旨被仰渡、信濃殿御差図ニテ桂太郎兵衞申渡之、

新納内藏
岩下佐次右衞門
高橋霽山
赤松圓山

右相慎候様ニと之儀は無之候得共、若其身之心入ニて右通之儀も候ハヽ、慎等之不及勘弁世間徘徊勝手次第可為致旨内々親類江可申付事、

廿四日　小野村・草牟田村・田上村御鷹場如以前被相立旨被仰渡、

廿五日　樺山主税親類樺山權十郎・樺山休太夫大目附衆ヨリ御用ニテ罷出ルノ処、主税事於私領座敷取拵雖被入置、追々被　聞召通趣有之間為致切腹御断可申上旨御内分ヲ以被仰渡、依之權十郎・休太夫并樺山八郎等即日如藺牟田差越スト云云、御勘定方小〔ママ〕御勝手方書役勤四本八右衞門（奈良原助左衞門姉聟）・御家老座書役植木長兵衞（見前）藏方目附宇宿正十郎・横目伊地知筑右衞門（曾祖父筑右衞門事隈元軍六先祖串良郷士隈元吉兵衞二男ニテ伊地知筑右衞門養子トナル）・同高島善之丞（隈元軍六内用頼）・御納戸奉行德永利右衞門・御側御用人座書役三宅甚兵衞・御柄巻市來正藏・造士館書役助園田勘右衞門以上九人御役又ハ役儀被差免逼塞被仰付、伊地知猪兵衞・古川權藏（伊地知筑右衞門次弟）・野崎善助（秩父太郎旅用達被仰付置）・伊地知喜三次（秩父太郎内用）・伊地知正九郎（伊地知筑右衞門三弟秩父太郎用達）・兒玉次郎兵衞（樺山主税用達）・本田孫九郎（木藤市右衞門学友）以上七人逼塞被仰付、御詰衆島津清太夫（内匠嫡子）・御側医師西玄嘉御役被差免、共ニ依有被聞召通趣也、御裁許掛内山伊右衞門何分被仰渡迄ノ間先相慎可居旨被仰付、自身承知之、

廿六日　未ノ刻後松崎善八郎・本田助之丞・郡山權助・

西覺太夫・曾木藤太郎・奈良原助左衞門・宇宿十次郎・永田佐一郎・有馬一郎・佐竹次郎右衞門以上十人御用人座ヨリ親類御用ニテ罷出ルノ処、被加御憐愍於主水殿宅被仰渡、御用有之間明日五ツ半時親類両人可罷出、尤楚忽ノ働等不為致様可申談旨被仰渡、尾上甚五左衞門評定所ヘ御用有之間、明日六半時親類相付可罷出旨被仰渡、御裁許掛連名書附ヲ以申達ス、次第如先規、

廿七日　尾上甚五左衞門評席ヘ被召出ニ付、物頭岩下佐八郎・藤野休右衞門、御目附東郷長左衞門等従早天評定所ヘ相詰居ノ処、夜前尾上喜右衞門介錯ニテ（実ハ東郷藤兵衞）致切腹ノ由従親類御届申出ル、依テ詰横目松岡覺兵衞外一人為見届被差越、廻前横目方ニハ如例別段致披露ノ間、今日廻前松元喜左衞門・田代宅右衞門・別府善左衞門・今井安左衞門差越死体見分スト云云、辰中刻松崎善八郎・本田助之丞・郡山權助・西覺太夫・曾木藤太郎・奈良原助左衞門・宇宿十次郎・永田佐一郎・有馬一郎・佐竹次郎右衞門親類両人宛主水殿宅ヘ罷出相扣居ノ処、押付座敷ヘ被召出被聞召通趣有之何モ御役被差免、善八郎事平島ヘ、助之丞事寶島ヘ、權助事中島ヘ、覺太夫事諏訪瀬島ヘ、藤太郎事沖永良部島ヘ、助左衞門事喜界島ヘ、十次郎・佐一郎事德島ヘ、一郎・次郎右衞門事大島ヘ遠島被仰付、便船有之迄ノ間座敷取拵被入置旨被仰渡、御用人相良此右衞門・田畑武右衞門席詰ニテ申渡之、

平島　松崎善八郎
外九人略ス

右被　聞召通趣有之、右之通被処遠嶋ニ、

右之通大目付於宅評定所申渡之格を以親類江申渡便船有之迄之間揚坐敷江遣置候場ニて座敷内取拵入置候様申付候条、早速其通取斗届可申出旨をも可申渡候、

九月廿七日　典膳　本田助之丞

右御役被差免候条可申渡候、

九月廿七日　典膳

末ノ刻島津内匠・島津彦太夫・島津右平太・河野安之右衞門・黑葛原周右衞門・若松平八・吉田喜平次・兒玉祝人・八田孝之進・八木孝次郎・愛甲半藏・西川源八以上十二人典膳殿宅ヘ御用ニテ、被　聞召通趣有之御役又ハ役儀被差免、内匠事山之口十輪寺ヘ、彦太夫事馬關田威德院ヘ、右平太事大姶良〔ママ〕ヘ、安之右衞門事大口〔ママ〕寺ヘ、周右衞門事高限〔ママ〕寺ヘ、平八事高原海藏寺ヘ、喜平次事大崎〔ママ〕寺ヘ、祝人事鶴田寺ヘ、孝之進事田代寶光院ヘ、孝次郎事本城〔ママ〕寺ヘ半藏事秋目香泉寺ヘ、源八事吉松光照院ヘ寺入被仰付早速被差越旨被仰渡、御用人島津小平太申渡之、親類名代ニテ承知ト云云、未ノ刻後八田源之進・山口大右衞門・大迫八次・森岡孫右衞門・田代清太・森元高見・伊勢九郎八・伊地知小十郎・木場休右衞門以上十人親類御用人座ヨリ只今御用ニテ被加御憐愍、於主水殿宅被仰渡、御用有之間明日九時親類両人可罷出旨被仰渡、桂太郎兵衞申渡之、樺山主税昨夜致切腹ノ由ニテ今夜子ノ刻從親類　畑武右衞門宅ヘ御届申出ル、急用事有之ノ間可差越旨申遣ニ付不及御暇罷越ノ処、今更不調法存当為御断致切腹ノ間脇差可遣由申ノ条難黙止応其意ノ処、軈テ致自刃ニ付不顧恐囲相開同氏惣兵衞ヲ以令加介錯、差扣ノ儀ハ別段可奉窺ト云云、是從大目附衆御内意ノ為趣由相聞ユ、　御所帶方御難渋ノ趣御隱居様被　聞召上、一夊出銀御免雖被仰付置、從当年五箇年以前ノ通被仰付、五升重出米雖被仰付置二升被相免三升宛、是又五箇年是迄ノ通被仰付旨被　仰出、御家老衆連名ノ御書附ヲ以被仰渡、

御隱居様当時何篇　御下知被為在候ニ付、御所帶方御難渋之趣被　聞召上至て　御世話被遊、精々御取縮被仰付、既江戸表御続料之内壱万両は被相減候、此度猶又大坂表之儀細々被　聞召通候処、御産物料ニてハ江戸・京・大坂御続料御利払等大分之及御不足、御仕登品相重候様可被尽御吟味事ニは候得共、弥々御吟味無之候てハ急速詮立候程之御取計無之、此涯之御取凌方不相見得、御領国中一統差迫居候折柄ニて猶可及難儀事と御気之毒被　思召上候得共、

不被得止事当辰年より先キ五ヶ年壱匁出銀被仰付候左候て牛馬は出銀不被相掛候、且高壱石ニ付五升重出米被仰付置候得共、右出銀も被仰付候付御用捨被為　在弐升は御免被仰付、当辰年より先五ヶ年三升ツヽ重出米被仰付候、

右之通

御隠居様被　仰出候旨申来候条

御趣意之程難有奉汲得於諸向も一涯倹約相用、少事迚も費筋之儀共無之様兼て懸心頭可令省略候、左候て上納方付ては以前之振合通可相心得候、此旨表方江致通達奥掛御勝手方江も可相達候、

九月　　將監

信濃

登

典膳

廿八日　子ノ刻八田源之進・山口大右衛門・大迫八次・森岡孫右衛門・田代清太・森元高見・伊勢九郎八・伊地知小十郎・木場休右衛門親類、主水殿宅へ罷出ルノ処被　聞召通趣有之、源之進事臥蛇島へ、大右衛門事〔ママ〕島へ、八次事　島へ、孫右衛門・高見事徳島へ、清太事〔ママ〕島へ、九郎八事〔ママ〕島へ、小十郎事〔ママ〕島へ、休右衛門事〔ママ〕島へ遠島被仰付便船有之迄ノ間座敷取拵被入置旨被仰渡次第如昨日例、尤孫右衛門・清太外七人共ニ御役被差免、御用人桂太郎兵衛・島津木工席詰ニテ申渡之、未ノ刻山田靜馬・北郷八右衛門・二宮藤太左衛門・永山與三右衛門・内山伊右衛門・森山清藏・伊集院善太夫・野元源五左衛門・伊集院万次郎・森元宗節高見弟・有馬養節一郎弟・森元道哲高見甥島津左衛門家来以上十二人典膳殿宅へ御用ニテ被　聞召通趣有之、靜馬事百次主松寺へ、八右衛門事高城浄具寺へ、藤太左衛門事都城天長寺へ、與三右衛門事山川龍山寺へ、伊右衛門事小林觀音寺へ、清藏事中郷〔ママ〕滿寺へ、善太夫事大姶良報恩寺へ、源五左衛門事勝岡長久寺へ、万次郎事松山蓮花寺へ、宗節事内浦玄忠寺へ、養節事曾木觀音寺へ、道哲事須木一麟寺へ寺入被仰付旨被仰渡、尤源五左衛門・万次郎・宗節・養節以外七人御役被差免

尾上甚五左衛門被処遠島ニ付跡改被仰付、横目平瀬孫太夫・黒田市左衛門為改人被差越、首尾如例、　松崎善八郎以下十人昨夜座囲為取拵由従親類御届申出ル、依テ横目富山市兵衛・西田八郎右衛門善八郎方ヘ、同三原藤五郎・満尾喜三太助之丞方ヘ、同肥後與左衛門・川口千次郎權助方ヘ、同田代宅右衛門・益山金左衛門覺太夫方ヘ、同藤野六郎右衛門・志和屋左太郎藤太郎方ヘ、同〔マ〕　〔マ〕助左衛門方ヘ、同橋口新助・松元喜左衛門十次郎方ヘ、同川村勝左衛門・能勢權藏佐一郎方ヘ、同佐々木源兵衛・市來與四郎一郎方ヘ、同種子島小十郎・本田權五郎次郎右衛門方ヘ為見分被差越、跡改可兼勉旨被仰付、諸首尾如例、樺山主税切腹御届申出ルニ付、為見分御目附梅田九左衛門・坂本彦右衛門ヘ書役一人（町田仲左衛門）召付藺牟田ヘ被差越、

未ノ刻過爰元発足、今晩飛脚従江戸到着、

廿九日　木場傳内先達テ雖致病死、存生内ノ儀被　聞召通趣有之、可被処遠島ニ相究ルニ付跡改被仰付、横目加治木孝左衛門・大野鐵兵衛為改方被差越、首尾如例八田源之進以下九人昨夜座囲為取拵由従親類御届申出ル、依テ横目岩元半助・〔マ〕　〔マ〕源之進方ヘ、同堀仁右衛門・隈崎喜右衛門大右衛門方ヘ、同吉田貞助・五代勝左衛門八次方ヘ、同〔マ〕　〔マ〕孫右衛門方ヘ、同石神万右衛門・今井安左衛門清太方ヘ、同〔マ〕　〔マ〕高見方ヘ、同蓑田新藏・名越彦兵衛、九郎八（伊勢）・小十郎（伊地知）方ヘ、同吉田清九郎・染川源兵衛休右衛門方ヘ為見分被差越、跡改可兼勉旨被仰付、両首尾如例、　未ノ刻梅田九左衛門・坂本彦右衛門従藺牟田罷帰御届申出ル、　御勘定奉行島津相馬若年寄ヘ転役、席順島津仁十郎上被　仰出、御役料高三百石被下置、

太守様御留守ノ故島津長門殿御名代ニテ被仰付之、無役新納内藏大目附被仰付、席順町田監物次被召置、御役料高二百石被下置、従去年十一月免御家老職至是十一箇月、無役市田壬生御勘定奉行被仰付、従去二月退御小姓与番頭至是八ヶ月ト云云、樺山主税・秩父伊賀在職中所取拵ノ諸書附有用無用共ニ焼被仰付旨被仰渡

樺山主税・秩父太郎勤役中致取扱置候義は何も不用ニ被仰付、帳面等都て焼捨被仰付候間、於諸向も右両人致差図等置候儀は帳面等焼捨申付候、右ニ付以来之取扱不得差図候て難計儀も有之候ハ、無延引可申出旨、向々江不洩様可申渡候、

九月　信濃

十月

朔日　三原七左衛門・崎元直次郎・伊地知休右衛門・椎原平蔵・能勢龍右衛門以上五人親類御用ニテ猶又相慎可居旨被仰渡、横目岩元半助・中原甚助・肥後與左衛門如元御鳥見被仰付、

二日　木場清蔵（亡伝内嫡子）何分被仰渡迄ノ間相慎可居旨被仰付、藥丸猪右衛門・高田猛太夫・國分市郎右衛門・市來蔀以上四人慎等ノ不及勘弁世間徘徊勝手次第可致旨被仰渡、如新納・岩下等例、

三日　八田源之進被処遠島ニ付座囲被入置ノ処、病気有之間為養生為致出囲度旨従親類願申出ル、依テ横目小倉喜平太・別府四郎兵衛為病体見分被差越ノ処、言語不相分起臥不任心ノ由見及ト云云、

四日　八田源之進病体ノ成行従小倉喜平太・別府四郎兵衛申出ニ付、早速出囲被仰付入念可加養生旨被仰渡ト云云、

八日　島津若狭殿去ル七月江戸ヘ参着、高輪ヘ伺候ノ処早速御目見被仰付、御前首尾克相済押付御暇被下八月四日江戸出立ノ由ニテ、今日申刻過御当地ヘ到着、於江戸百人御賦被成下中途現人数ニテ被罷通、尤宿札等都テ自分名前ト云云、

十日　横目有馬覺太郎（御船奉行覚右衛門嫡子）樺山・秩父在職中御用有之京都ヘ被差越ノ処、御用相仕廻一昨八日致下着、昨九日御届申出ノ処、今日何分被仰渡迄ノ間相慎可居旨被仰付、松崎善八郎・本田助之丞・郡山權助・西覺太夫七島遠島被仰付置ノ処、折節七島船致上国近日令帰帆ニ付、右便ヨリ四人共ニ船張ニテ被差越旨被仰渡、

十一日　卯ノ刻松崎善八郎等四人為遠島乗船、中途羽飼付ニテ足軽両人宛警固スト云云、

十六日　御納戸奉行林安右衛門・御同朋頭渡邊盛阿彌・

奥御小姓矢野清右衞門・伊集院十郎次・鈴木吉太郎・奥御茶道西嘉長・奥医師新納為政・山内玄軒・御能方勤三島五太夫以上九人、

太守様御供ニテ先月九日江戸ヘ参着ノ処、即日何分被仰渡迄ノ間不致出勤相慎可居旨被仰付、翌九日何モ御役被差免早速可罷下旨被仰渡、同十一日・十二日引続出立ノ由ニテ一昨日・昨日ニ相懸ケ御当地ヘ到着、今日九人共ニ御届申〔ママ〕「此一枚紙切レ不知」

水殿宅ヘ親類御用ニ〔マ〕〔マ〕島ヘ遠島被仰付〔マ〕〔マ〕〔十カ〕取拵被入置旨被仰渡、宅郎次・吉太郎・嘉長・爲政・五太夫事〔マ〕〔マ〕殿又被〔マ〕聞召通趣有之、安右〔マ〕〔マ〕寺ヘ、吉太ヘ、清右衞門〔マ〕〔マ〕寺ヘ、嘉長〔マ〕〔マ〕寺ヘ寺領被仰付、爲政郎〔マ〕〔マ〕寺ヘ、嘉長〔マ〕〔マ〕寺ヘ寺領被仰付、爲政・五太夫共ニ逼塞被仰付旨被仰渡、玄軒儀ハ御咎目ノ不及沙汰ト云云、

廿日　飛脚江戸ヨリ到着、

廿一日　皆吉二郎昨夜長崎ヨリ帰着、今日御届申出ルノ処、即日　殿宅ヘ御用ニテ被聞召通趣有之、出水寺入寺領被仰付旨被仰渡、

〔二〕廿一日　御小姓頭取中山次兵衞高奉行ヘ転役被仰付、諸島代官附役被仰付、

〔表紙〕

秩父帳留

文化朋党一条

文化朋党名前

一御家老　樺山主税

右文化五年辰閏六月廿一日、於私領座敷被入置候旨被仰渡候、

一御家老　秩父伊賀

右同日八ッ後評定所御用被仰渡罷出候所、悪石嶋へ遠嶋被仰付、便船有之迄ノ間囲ニ被入置候、

一御側御用人　清水源左衛門

一御側役　勝部軍記

限元　平太

森山休右衛門

限元　軍六

一御広敷番之頭　木藤市右衛門

右同日御役被成御免、何分被仰渡迄之間慎居候様被仰渡候、

一御近習番　奈良原助左衛門

有馬　一郎

宇宿十次郎

佐竹次郎左衛門

右同日何分被仰渡迄ノ間慎、

一御納戸奉行　堀　甚左衛門

一御小納戸　大重五郎左衛門

一御目附　岡元千右衛門

一物奉行吟味役　小島甚兵衛　一当番頭　島津彦太夫

一吟味役　日置五郎太　一御作事奉行　木場　傳内

税所　新助　一御目付　郡山　權助

一御近習番　東郷　仲藏　一御供目付　西　覺太夫

大河原喜左衛門　一物頭　山口大右衛門

本田助之丞

野元源五左衛門　一長崎御付人　河野安右衛門

伊集院萬次郎　一御記録方添役　若松　平太

八田源之進

八田孝之進

一造士舘書役　森岡孫右衛門　一御記録方稽古　兒玉　税人〔祝カ〕

吉田喜平太

三宅甚兵衛

無役　田代　清太

永田佐一郎

松崎善八郎

右同日同断、

一御勘定奉役〔行脱カ〕　嶋津　内匠　一御小納戸

芦谷　謙助

一隠居　曾木藤太郎

一御小姓組番頭　山田　靜馬　一御目付

尾上甚五左衛門

一当番頭御用人勤　嶋津右平太　一御裁許掛

一進達掛　伊地知伊兵衛
一高奉行　宇宿正次郎
一御広敷御用人　伊地知小十郎
　伊勢九郎八
　木場休右衛門
　西川　源八
　八木孝次郎
　大迫八次
一山奉行　黒葛原用右衛門
　愛甲　半藏
　右七月十三日、何分申渡迄之間、先慎罷在候様被仰付候、
一高奉行　北郷八右衛門
　宮藤太左衛門
　永山與三右衛門
一御馬頭　德永利右衛門
一御納奉行〔戸脱カ〕　伊集院善太夫
一寺社方取次　森元　高見
一御側医師　森山　清藏
一御近習番　右七月廿八日右同断、
一御裁許掛　鎌田四郎左衛門
　右七月廿九日同断
　伊集院岩五郎
　村田　山雪
　右八月廿九日同断、
　能勢龍右衛門
　椎原　平藏
　三原七左衛門
　伊地知休右衛門
　崎元直次郎
　右八月晦日同断、
一詰習　嶋津清太夫
一御側医師　西　玄嘉
　右被聞召通趣有之、御役被成御免候条可申渡候、
　九月廿五日
　内山伊右衛門

右何分被仰渡迄之間先慎、

一逼塞

德永利右衞門
四元八右衞門
植木長兵衞
伊地知筑兵衞
高島善之丞
市來　正藏
園田勘右衞門

右被聞召通趣有之、御役又ハ役儀被差免、右之通被仰付候、

右九人御用人田畑武右衞門宅

一逼塞

伊地知猪兵衞
古川　權藏
野崎　善介
伊地知喜三次
兒玉二郎兵衞
本田孫九郎
伊地知正九郎

右被聞召通趣有之、右之通被仰付候、

九月廿五日　典膳

右七人御小姓番頭伊集院藏主宅申渡、

秩父　太郎

右遠島被仰付砌本名右通被仰付、家格モ本之小番ニ被入置、隱居被仰付置候処、七月二日切腹

清水源左衞門

右七月十二日切腹

勝部　軍記
森山休右衞門
隈元　平太
隈元　軍六
堀　甚左衞門
大重五郎左衞門
岡元千右衞門
小島甚兵衞

日置五郎太

右九月十三日許諚〔評定カ〕所御用被仰付切腹、

木藤市郎右衛門

右同日右同断被仰渡罷出候処、徳之島江遠島被仰付、便船有之迄ノ間揚座敷江被入置候、

一中之島江遠島　郡山　權助

一寶島江右同　本田助之亟

一諏訪之瀬島右同　西　覺太夫

一平島江右同　松崎善八郎

一沖永部〔良脱カ〕島江右同　曾木藤太郎

一徳之島江右同　病死　永田佐一郎

一右同　宇宿十次郎

一喜界島江右同　奈良原助左衛門

一大島江右同　有馬　一郎

一右同　佐竹次郎左衛門

右九月廿七日大目付喜水〔入カ〕主水殿宅へ、御評定所ノ格ヲ以親類へ被仰渡候、便船有之迄之間揚座敷へ遣置候場ニ座敷江被入置候、

一山之口十輪寺江寺入　島津　内匠

一大姶良　島津右平太

一馬關回〔田カ〕　午年赦免　島津彦太夫

一大口　河野安右衛門

一高島　高山カ高城カノ誤ナラン　巳五月病死　若松　平八

一本城　八木孝次郎

一田代　八田孝之進

一鶴田　巳年赦免　兒玉　祝人

一久志・秋目　愛甲　半藏

一大崎　午年赦免　吉田喜平次

一吉松　西川　源八

一高隈　黑葛原周右衛門

右九月廿七日鎌田典膳殿宅ニ於テ申渡、

一大島江遠島　木場休右衛門

一領地島へ右同　無渡病死　八田孝之進

一喜界島江右同　森岡孫右衛門

一右同　大迫　八次

一右同　伊地知小十郎

一大島へ右同　田代　清太
一右同　伊勢九郎八
一右同　山口太右衛門
一徳之島江右同　森元　高見
右九月廿八日喜入家ニテ、
一百次へ寺入年年赦免　山田　靜馬
一宮之城右同　宮藤太左衛門
一山川　永山與三右衛門
一小林　内山伊右衛門
一大根占　巳年赦免　伊集院善太夫
一中郷　森山　清藏
右九月廿八日典膳殿ニテ、
一勝岡　野元源右衛門
一松山　伊集院萬次郎
一内之浦　森元　宗節
一曾木　有馬　養節
右九月廿八日山岡齊宮宅、
一次木島津左衛門家来　森元　道哲
右同日寺入被仰付候、　木場　清藏
右十月二日慎被仰付候、
一拾二人切腹外ニ桃山一人
一拾九人遠島外ニ木藤一人
一弐拾参人寺入外ニ家来一人
一十六人逼塞
一十三人慎
一野尻本光寺江　林　安右衛門
一高山白新院江　矢野清右衛門
一馬越黒坂寺江　西　嘉長
一諸縣郡吉田昌明寺江　鈴木吉太郎
一飯野愛染院江　伊集院十郎次
右大野多宮殿宅ニ於テ十月十六日寺入被仰付候、
一逼塞　新納　意政
巳正月十七日赦免
右同日同人宅ニテ被仰付候、進達掛高城六右衛門
勤之、

一口之島へ遠島　渡邊盛左衛門

右十月十六日大目付衆宅ニテ被仰渡候、

一出水寺入　皆吉　仁郎

右

一領地島江遠島　大河平喜左衛門

一中之島右同　税所　新介

一末吉寺入　伊地知休右衛門

一高江　椎原　平藏

一湯之尾　崎元直次郎

一加久藤　三原喜左衛門

一串良　能勢龍右衛門

一姶良　伊集院岩五郎

一高城郡高城　有馬覺太郎

一小根占　村田　山雪

一平佐　久留　宗安

一東郷　木場　清藏

一志布志　東郷　仲藏

一御役御免　奉公障　岩山　半藏

一役儀御差免　右同　馬場彦右衛門

一右同　松岡覺兵衛

一御呵　國分平次郎

覚

一拙者髢髪遺置申候間、相果候ハヽ、右ヲ以テ御殿之方へ墓所相向、又は福昌寺之方へ向御立可給候、無窮之世迄モ

太守様御恩ヲ奉報度、後ヲ向候テハ一切不相成候、如此ニテモ致忠臣之心ヲ尽シ申度御座候間、万々可然御頼申入候、以上、

文化五辰年閏六月廿五日　秩父太郎季保

伊地知道之助殿

伊地知新太夫殿

南雲新右衛門殿

其外御親類中

一文化四年卯十一月、秩父太郎道奉行ヨリ当番頭御役ニテ御用人勤被仰付、同十一月廿八日大目附御役被仰付候、同十二月六日御家老御役被仰付、御役料高千石被下置候事、

一文化五年辰四月九日、於江戸川上右近ヨリ伊地知新太夫御用被仰渡罷出候処、秩父伊賀被聞召通趣有之御役被御免、家格小番、隠居被仰付候旨、右近御取次ヲ以被仰渡候、左候テ別紙ヲ以テ親類両人ツヽ不明様宅番被仰付候、伊賀事江戸詰被仰付置候ニ付、中途ヘ差越候儀モ難計、親類両人相良一郎左衛門・伊地知新太夫江戸出立被仰付候ニ付、若途中ヘ差越候ハヽ、行逢候処ヨリ御国元ヘ列帰候様可致旨被仰渡候ニ付、翌十日江戸致出立罷下候、尤樺山主税同日同様ニ被仰渡、彼方親類相良典禮・本城源四郎同日出立ニテ中途同道罷下候、足軽両人ツヽ我々ヘ被召付、行逢候処ヨリ江戸表ヘ右足軽ハ御届申上候様被仰渡候、然ル処大井川満水ニテ嶋田ヘ五日滞宿致候、川明ヨリ直ニ出立致候処五月朔日小倉ヘ致着居候処、御国元ヨリ被差立候足軽共ヘ行逢候ニ付、主税殿・伊賀殿出立之儀相尋候得ハ、主税殿ハ不差越筈ニテ、顕娃信濃殿四月廿八日御出立ニテ、伊賀殿廿九日出立、中急キニテ通行候段承候ニ付、則我々ニモ昼夜差急キ、可成丈ケ御国近キ方ニテ行逢候方可然申談差急キ候処、筑前於木屋瀬人足差支一緒ニ難差出段承候ニ付、樺山家親類申談、我々ノ儀モ少ニテモ差急キ行逢候処ヘ待合候筋申談、昼夜差急キ候処、五月五日夜九ツ時分日奈久ヘ致着候処、同刻信濃御着ニ付、右帰舟ヨリ出水迄致乗船度候ニ付、宿亭主ヘ右舟相頼呉様申付候処、則其通致約束致〔ママ〕候得ハ、信濃殿用達迄成行之儀、極内分ヲ以申入置不申候テハ不都合之儀共有之候テハ如何ト申談、用達野間勘介ヘ取会、内分ヲ以テ御役御免等ノ儀申立候処、信濃殿ニモ日奈久ヘ滞宿之趣内々用達ヨリ承候、我々ニモ何様可致哉之段承候ニ付、御滞宿ニ候ハヽ、我々ニモ滞宿致本城相良相待居可申、大形明早朝遅クモ四ツ時分ニハ樺山家親類爰元ヘ着可有之ト相考候ニ付、相待居申筋申談致滞宿〔ママ〕致居候、然ル所伊賀不被差越、主税殿明日

米之津ヨリ日奈久ヘ着有之筈候勘介ヨリ承、折角源四郎・典禮相待居候得ハ、翌六日昼過迄日奈久ヘ着無之故、決シテ松葉瀬ヨリ為致乗船哉ト致吟味、飛脚ニテモ遣度申談候得共、今更飛脚遣候テモ間ニ逢間敷申談差遣不申候、然ル処八ツ後ニテモ候半勘助〔ママ〕参候テ、我々方ヘ被召附置候足軽最早此方入用無之筈候間、彼方ヘ差遣呉候テ御国元之様被差遣度段承候ニ付、於江戸富山逸見ヨリ、我々ヨリ先キニ書状ニテモ不差遣候様承居候ニ付、御国元ヘ飛脚被差遣候儀可宜トハ難申上、右之趣信濃殿ヘ被仰上被下、其上可差上トノ儀ニ御座候ハヽ、随分差上可申候、御家老衆ヨリ之御事ニ御座候得ハ相成不申トは難申上、此上ハ御差図次第ニ仕度勘介ヘ申達候処、左様ノ儀ニ候ハヽ、不及其儀段即答承候、左候テ信濃殿ニモ日奈久出立有之段承候ニ付、左候ハヽ、我々ニモ出立致シ、兎角出水米之津ニテ樺山家親類〔ママ〕申談、致舟手当五月六日七ツ過日奈久致出帆、翌七日四ツ時分米之津ヘ致着、御番所詰横目橋口新蔵ヘ致着候御届申出、米之津町ヘ致着候処、相良典禮名前宿礼相見候ニ付、直ニ典禮宿ヘ参シ、通行之儀共承候処、松葉瀬ヨリ五月五日晩方乗船致、五月六日八ツ時分米之津ヘ致着船候処、樺山家乗船前ニテ直ニ樺山家旅宿ヘ参、於江戸被仰渡候趣申達有之候段承候、我々ニモ直ニ出立致鹿兒島ヘ早ク致着候様典禮ヨリ承候ニ付、人足等早々手当致、五月七日四ツ時過ヨリ米之津致出立中途差急キ候処、五月八日夜明ケ市來港ヘ致着、同日晩景鹿兒島ヘ致着、相良一郎左衞門宅ヘ直ニ致着、税所新介ヘ申遣、新助同道ニテ伊賀宅ヘ参、於江戸被仰渡候御書付之趣申達候、左候テ翌九日八ツ後親類十人計伊賀宅ヘ相招、宅番之儀共申談、折角緩セ之儀無之様致相談、不〔ママ〕様繰廻ニ差越候日割等致シ通達致シ、出番有之候事、

一閏六月廿一日八ツ前評定所御用被仰渡、親類中吟味之上罷出候方可然申談罷出候処、猶又被　聞召通趣有之惡石島ヘ遠島被仰付候段申渡有之、席詰御裁許掛橋本新九郎、物頭若松平八ニテ為有之由候、左候テ石原龍助宅ヘ親類伊地知休藏御用ニテ罷出候処、惡石島ヘ遠

島被仰付候ニ付、便船有之迄之間座敷内取拵入置候様被仰渡、則其通取計、翌日召入候御届申出候処、横目平瀬孫太夫差越見分有之候処、貫通方無之段沙汰為有之由候処、翌日伊地知休蔵へ貫通方有之候様被仰渡作直候事、

一七月六日川上甚左衛門・相良一郎左衛門御裁許方ヨリ御用ニ付罷出候処、御裁許掛有馬藤七郎・内山伊右衛門ヨリ、大目附衆ヨリ被仰渡候秩父伊賀遠島被仰付置〔候脱カ〕得共、親類共ヨリ相働候様被仰付候旨申渡有之候、左候テ席ヲ少シ下候テ、有馬藤七郎ヨリ相良一郎左衛門へ内分ヲ以申達候ニハ、江戸表ヨリ飛脚致着、御取扱被成難ク儀申来候由、無是非ケ様被仰付候間、披露書之儀ハ舌喰切難儀ノ体見兼申候間、何某手ヲ添へ候筋申出、可宜候申聞候ニ付、其致披露書差出候事、表向ハ其身ヨリ変死致候筋申出サセ、内々ハ右之通之事ニテ候事、

一七月十九日家財没収、居屋敷並家ニ付被成下置候御扶持米御取上、家来都テ揚者被仰渡候、同日晩家内引移翌廿日引移候届申出候事、尤其身相果候ニ付、親類無御構段被仰渡候事、

口上覚留

私共親秩父太郎事被　聞召通趣有之、先達テ隠居仰付置候処、先月廿八日惡石嶋へ遠島被仰付、便船有之迄之間座敷内へ召入置候処、去ル六日変死仕候、右ニ付名跡ノ儀ハ何様可仕候哉奉得御差図候、此等之趣被仰上可被下儀奉願候、以上、

本文伺置候処御張掛〔紙カ〕ニテ

進達掛

伊地知助太郎

山田柳馬与小番

川上甚左衛門

辰七月九日

跡職無御構候条御

法之通可願出候、

七月　登

一番

触役所

一伊賀事太郎ト改名被仰付候段、伊勢雅樂ヨリ伊地知休蔵致承知候事、

一同年十一月廿七日思召被為　在、家被召禿候旨被仰渡候、親類伊地知助太郎致承知、信濃殿ヨリ御用人桂太郎取次ヲ以テ仰被渡候事、

一家被召禿候ニ付テハ、親類家内入不願出候テ不叶事故、太郎妻死去前致離別置、死後出生致候二郎袈裟、伊地知新太夫男子無之養子ニ内約仕置候筋申出、娘サタ新太夫養女内約仕置候筋願書差出度、新太夫ヨリ無拠秩父家並実家親類へ申談候処、皆々同意ニ候間、諸御座ニ段々承合候処、養女ノ儀ハ可相済事モ可有之候得共外ノ事ハ決シテ相済間敷ト申事ニテ取止ノ筋申談、養女迄願出候処、是又段々助太郎殿ヨリ承合候処、決テ六ヶ敷、大目付御座古帳抄伊地知半助見合候処、先例不仰付帳留ハ有之候得共、被仰付候書留不相見段助太郎承知申候ニ付、今一往何分致吟味願書下、家内入之筋可然助太郎より南雲新右衞門へ被申候段致承知候ニ付、右通ノ事候ハヽ無是非事候間弥申下之筋相究、大島家へモ右之趣申達候処、却テ不都合之儀共成立、親類迷惑共ニ相掛候テハ不宜筈候ニ付、弥申下之筋致相談呉候様承候ニ付願書申下ケ、新太夫家内入奉願候処都テ家内入願之通被仰付候事、

一樺山主税殿於江戸同日御役御免ニテ候処、出水於米之津親類行逢被申、直ニ私領藺牟田之様ニ被差越、是モ同様宅番被仰付置候処、同六月廿一日座敷内ニ入置候段被仰渡、然ル処樺山權十郎・同休太夫町田監物へ御用ニテ罷出候処、主税事一世座敷内へ入置候得共、同役伊賀モ致切腹候ニ付、主税事モ切腹致候テ可宜、江戸表同役ヨリモ右之趣申越候ニ付、致切腹可宜旨為申渡由候、腹切同役ト被申候ハ川上右近ニテ候事、

九月廿五日親類へ被仰渡趣有之、樺山權十郎・同惣兵衞・同休太夫藺牟田へ被差越候テ切腹為有之由、披露書之儀ハ其身ヨリ無拠訳合有之、不致候テ不叶訳有之候ニ付、是非座敷ヨリ出呉候様類リニ承候ニ付、親類落度ニ可相成存申候得共、無是非出申候処切腹仕候段披露為有之由承候事、

一九月十二日御側役森山休右衞門・隈元平太・隈元軍六・勝部軍記此四人評定所御用被仰渡、左候テ御裁許方

ヨリ親類御用被申渡、評定所御用申渡置候得共罷出候テハ不宜候間、致切腹御届申出候様為被申渡段承候、皆々切腹ニテ有之候事、家格御小姓与被仰付候事、

一同日御目附岡元千右衛門・小島甚兵衛、御納戸奉行堀甚左衛門、御小納戸大重五郎左衛門、物奉行日置五郎太、御広敷番頭木藤市右衛門評定所御用被仰渡、皆々切腹ニテ、木藤市右衛門一人評定所ヘ罷出候処、徳之島ヘ遠島被仰付揚座敷ヘ被遣候事、

一同九月廿六日、御裁許掛尾上甚五衛門評定所御用被仰渡、切腹ニテ候事、

一九月廿六日、親類両人ツヽ御用ニテ、於御用人御用人〔座脱カ〕ヨリ被仰渡候ニハ、明日評定所御用被仰渡筈候得共、御〔憐〕隣愍ニテ大目附喜入主水宅ニテ評定所ノ格ヲ以テ親類両人御用被仰渡候間、ソコツノ働一切無之様御達ニテ御用人ヨリ被申渡候、人数左通、

御目附中之島　郡山　權助
同　寶島　本田助之丞
同　諏訪之瀬　西　覺太夫
御小納戸平島　松崎善八郎
同　德之島　永田佐一郎
御近習番大島　有島　一郎
同　奈良原助左衛門
御目付沖之永良部　曾木藤太郎
同　佐竹次郎右衛門
奥医師德之島　森元　高見

一九月廿七日、親類一人御用座〔人脱カ〕御用ニテ、明廿八日親類両人喜入主水ヘ御用ノ人数左之通、

長崎御付人ニテ御家老座御書役勤　臥蛇島　八田源之進
進達掛　大島　木場休右衛門
御広敷横目　仝　大迫　八次
無役　仝　田代　清太
造士館書役　仝　森岡孫右衛門
御供目付　大島　山口太右衛門
横目　仝　伊勢九郎八
同　喜界島　伊地知小十郎

一十一月江戸ヨリ被差下役儀御免ニテ着、翌日遠島被仰

付候テ、渡邊盛阿彌右遠島之人数都テ揚座敷ノ場ニテ召入置候様被仰渡候事、

一十一月廿五日新納内藏宅ヘ親類両人御用ニテ、（高奉行ニテ吟味役勤）中之島税所新介、（吟味役勤）臥蛇島大河平喜左衛門遠島被仰付、便船有之迄之間座敷内ヘ召入置候様被仰渡候事、

一九月廿七日寺入之人数

御小姓組番頭	山田　靜馬	御小姓	森山　清藏
御勘定奉行	島津　内匠	同	野元源五左衛門
当番頭	島津彦太夫	御裁許掛	内山伊右衛門
当番頭御勝手方御用人勤	島津右平太	高奉行	二之宮藤左衛門
物頭	河野安之右衛門	寺社方取次	伊集院善太夫
御記録〔録〕方添役	八田孝之進	高奉行	西川　源八
御記録方見習ニテ御番勤	兒玉　祝人	同	北郷八右衛門
御広敷御用人	八木孝次郎	御裁許方見習	愛甲　半藏
医師	有馬　養拙	御小姓	伊集院岩五郎
同	森元　宗節	物頭	若松　平八
同	森元　道哲	御用部屋書役	吉田喜平次
		無役	木場　清藏
		御納戸奉行	林安右衛門
		横目	崎元直次郎
		医師	皆吉　鳳德
		横目	椎原　平藏
		同	橋口次兵衛
		同	山下喜右衛門

奥茶道　西　嘉長　宇宿正十郎
横目　三原七左衛門　伊地知猪兵衛
能師　三島五太夫　德永利兵衛門
御小姓　矢野清右衛門　本田孫九郎
横目　有馬覺太郎　植木貳三太
吟味役　東郷　仲藏　四本八右衛門
横目　能勢　龍助　兒玉次郎兵衛
同　伊地知休右衛門
御小姓　鈴木吉太郎
久留宗阿彌

三十日ニテ放免被仰付候

一逼塞之人数左之通、

伊地知筑右衛門
伊地知正九郎
伊地知喜三次
古川　權藏
野崎　善助
高崎善之丞
園田勘右衛門

一御広敷医師西玄嘉・山之内玄見役儀被差免逼塞、
一御側御用人清水源左衛門御役御免ニテ慎被仰付置候処
七月十一日暁切腹ニテ候事、其時之風〔脱〕設、清水殿親類
讃良善助殿へ於御殿大目付町田監物殿御逢被成、何欲
長御対談有之候趣　風聞有之候、左候テ御裁許掛尾上
甚五左衛門八ツ前退出致罷帰、直ニ源左衛門宅へ被参
候段風聞ニテ候、悉敷儀不相知候事、切腹之別条無之
候事、家格御小姓組ニ被仰付候由承候、其後家財没収
高・屋敷御取場被仰渡候事、
一五月八日相良一郎左衛門・伊地知新太夫晩景着致候御
届、表御用人田畑武右衛門申出候、左候テ翌九日一郎

左衛門御用人座へ罷出、伊賀御役御免ノ御届申出候処鎌田典膳ヨリ田畑武右衛門御取次ヲ以、伊賀御役不被成御免可被召儀モ可有之候間、其心得ニテ罷居候様其身ヘモ為申聞置候様被仰渡候、暫一郎左衛門相控居候様被仰渡相控居候処、其身ニハ右之趣為申聞候ニ付〔ハカ〕不及、左様相心得居候様被仰渡候、左候テ両三日過候テ表御用人ヨリ御用ニ付一郎左衛門罷候処、於江戸被仰渡候通相心得候様被仰渡候事、

一横目馬場彦右衛門・松岡覺兵衛役儀被差免、御奉公方被障置、逼塞、

一御小姓与岩山半兵衛御役御免ニテ、御奉公方被障置候事、

一上町々人西村三十惡石島ヘ遠島被仰〔付脱カ〕候事、

一伊賀様御事御勝手方御家老ニテ、表御用モ兼相勤候様被仰渡置候事、

一逼塞被仰付置候人数之内、九十日ニテ御赦免被仰付候人モ有之候事、

一秩父太郎御役替被仰付候節

太守様ヨリ御意之趣左ニ相記候、

一御家老・大目付被　召候テ、此節太郎事大目附ヨリ家老迄申付度被　思召候段被仰出候処、鎌田典膳ヨリ御答被申上候ニハ、衆人帰腹仕間敷被申上候処、夫ハキコエヌ何様ノ訳ニテ左様申候哉、此節大事ヲ計ルニ段々人ヲ撰ヒ候得共、其任ニ当ル者太郎外ニ無之、夫故ケ様申付度存候得共、其方抔同意不致候ハヽ、何ソ押々ニ申付ルニ不及候、其方抔用ニ不立ト申事ニテハ無之存慮之儀有之ケ様之事候間、得ト吟味致、何分可申旨被仰渡候処、被罷下吟味之旨、弥　被仰出候通可宜旨御返答為被申上由、其時之御家老頴娃信濃・嶋津將監・鎌田典膳・大目附町田監物・喜入主永・樺山權左衛門主税事、

一御前ヨリ伊賀ヘ被遊御意候ハ、市田出雲手先之者共都テ役御免申付置候、市田壱人ニ相成居候、夫ニ付町田監物ヨリ市田役御免一件書付差出置候、是ヲ見ヨト御渡被遊御意候ハ、シカトワカラヌ書付ニテ候ト被遊御意、左候テケ様ニ監物ヨリ申出候得共、先監物ヘハ弥

役御免之儀不相決内ハ申聞セ間敷、監物ハ決テ注進致者ニ候間、其心得ニテ罷居候様被遊御意候由、側役之者共誰ニモ不申聞、隈元軍六申聞候様被遊御意候由、左候テ其後御家老大目附被　召候テ被仰出候ニハ、此節市田出雲役御免申付候様被仰出候処、鎌田典膳ヨリ被申上候ニハ、是ハ六ケ敷者ニ御座候、公儀ニ段々ヒビキ合有之候者ニテ御座候段被申上候処、先年役御免為申付者ニテ、其時ヨリ公儀ニヒヾキ合有之、今ト申何ソ相替儀ハ無之、役御免難申付訳無之筈ト被遊御意候処、典膳二言不申上別テ込入候様ニ相見得候間、則伊賀ヨリ申上候ニハ、典膳申上候通、出雲儀ハ公儀ニヒヾキ有之候ヨリ別テ六ケ敷者ニ御座候、然レトモ被仰出候通先年之御役御〔衍カ〕役御免為仰付者ニテ御座候得ハ此節ニ限リ不被仰付訳ハ無御座筈候、典膳申上候モ其身存慮之程申上、是ガ則忠ト申者ニテ御座候、被　仰出候ヲ不宜ト申事ニテハ無御座、随分被仰出候通御役御免被仰付可宜御答申上候処、末座ヨリ監物小笑ニテ私共申上候通被仰出難有奉存候段御礼被申上候由、

一市田出雲事江戸御留守詰、其上一往定府被仰付置候処御国元ニテ御役御免被仰渡、市田親類赤松造酒ヘ出雲御役御免ニ付列下候様被仰渡、造酒事江戸ヘ差越出雲同道ニテ罷下候事、其時御隠居ヨリ出雲被　召タル由候得共不罷出、翌晩高輪ヘ上リ候様ニモ風説有之候得共、実正之儀不相知、出雲妻ハ　御内證様ヨリ御金五拾両被下候由承候、造酒江戸着晩、高輪御付御側役伊集院隼衛出雲所ヘ参、長対談為有之ト専風〔説カ〕設有之候、左候テ造酒着翌々日出雲事江戸致出立罷下候、尤モ出雲罷下候左右〔黒田重政室〕眞含院様極々御〔大カ〕太切之飛脚便ヨリ御国元ヘ相知、　太守様別テ御満悦被　思召上、大切成御左右御承知被遊候得共、市田下ニ付テハ今晩奥ニテ少シ御祝可被遊旨被遊被意候由、

一市田出雲此節無口能罷下候ニ付テハ、偏ニ其方抔カ力ニテ　我様ニモ別テ安堵被遊、頓ト帯ヲトキ候心持ニ相成候、右ニ付何カシト存候得共無之故、先不取敢此方乍寸志拝領被仰付候旨被遊御意御手渡、主水正々清御拵迄拝領被仰付候、其段ハ側役共ヘモ申聞置候段被

遊御意候、同日樺山主税・秩父伊賀、同作同様之御拵御腰者拝領有之候事、

但辰二月七日ニテ候事、

一金子弐百両転宅用トシテ御内々ヨリ秩父伊賀へ拝領被仰付候事、

但辰十二月三日

一二月十三日秩父伊賀当詰ヨリ御留守詰迄江戸詰被仰付候事、同日樺山主税江戸へ御用之儀有之被遣候段被仰渡候事、

一御隠居様ヨリ顕娃信濃江戸ヨリ御用被仰渡候節、伊賀へ　太守様ヨリ被遊御意候ニハ、信濃事此節高輪ヨリ被召候得共、遣候テハ決テ不宜者ニ候、彼方へヒツ付可申儀案中ニ候、此節之儀ハ国ノ吉凶ニ相掛大事之時節ニ候間、信濃儀ハ被遣間敷被遊御意候、其時伊賀ヨリ申上候ニハ、信濃事ハ被召候者候間被遣候テ可宜、私・主税両人参候テハ決テ高輪御目見被仰付間敷、信濃事ハ被召候者ニ候間、御目見被仰付候、別条無御座候ニ付、信濃へ取次、是非御目見得被仰付候様信濃ヨリ申上候得ハ都合モ可宜奉存候間、私共信濃同道ニテ罷登申候テ、旁都合可宜申上候処、ナラ其通可被仰付、信濃ハ念遣敷者ニテ候ト被遊御意候由、其後信濃・主税・伊賀被召候テ、信濃へ被遊御意候ニハ、江戸へ参候ハ、決テ高輪ヨリ主税・伊賀御役御免可被仰出、其時決テ御請仕候テハ不相成候、何様之儀被仰出候テモ一切御請致候テハ不相成候、其時ハ何様御答可申上哉ト被遊御意候得ハ、信濃ヨリ申上候ニハ、右両人ハ格別御用立者共ニテ、御役御免被仰付者共ニテ無御座、御勝手向則印相見得、決テ御役御免被仰付者共ニテ無御座段、御答可申上旨御返答被申上候由、此節之儀我等申付候通、首尾宜申カナヘ罷下候ハヽ、一角ノ御取扱可被仰付旨被遊候由、左候テ白木鞘ノ御腰物拝領被仰付、拵方致シ被下筈候得共、急成事故其儘可被下トノ趣被遊御意候由、伊賀事信濃同道ニテ罷登候処、嫡子致病死出立難成、主税信濃同道被仰付・信濃事四月廿八日出立、主税事同廿九日出ニテ候処、於江戸御役御免被仰渡、親類両人被差下、四月十日江戸出立ニテ、

五月六日出水於米之津行逢、御役御免ノ儀申達出水ヨリ引返被申候事、五月九日方ニテモ候半、御側役限元軍六信濃ヘ御用之儀有之急ニ被差出候処、漸大津・草津之間ニテ追付被申タルヤト申事ニテ候、其時之御用何様之御用ニテ被遣候儀不承候事、追付候処ヨリ軍六罷下候事、

一五月八日主税ヨリ御役御免之儀被相伺候処、御家老・大目附被召候テ被遊御意候ニハ、此節之儀市田ヨリ為ス業ニテ候間、今日則御手討ニ可被遊為被遊御意由、其時伊賀ヨリ申上候ニハ、今日出雲御手討被遊候ト、後日私共高輪可被成御殺候間、御手討ノ儀ハ御無用被遊度被申上候由、左候テ又被遊御意候ニハ、主税・伊賀不被成御役御免、折返江戸ヘ可被遣被仰出候、伊賀ヨリ申上候ニハ、是非可被遣被思召上候ハヽ、随分罷登可申候得共、決テ御目見得不被仰付、左候得ハ罷登候テモ詮立不申、此上是非被遣儀ニ候ハヽ、御立ヲ早メ、私共御供被仰付被召列候ハヽ、如何ニモ申開可仕、此上罷登候得ハ決テ私共ヘ切腹可被仰付、其時ハ御前ヨリ私共身ノ上御助ヶ被下、此上ハ　御前之御身之上ハ私共奉救上、私共身ノ上ハ　御前ヨリ御救不被下候テハ事成就不仕候段申上候処、成程左様ヂヤ、左様ナラ得ト相考可申旨被遊御意候ニハ、出雲事決テ再勤可被仰付、其時ハ如何様可致哉ト被遊御意候処、典膳ヨリ被申上候ニハ、是ハ何様被仰出候テモ私共御請不仕、アレト肩ヲナラヘ御奉公ハ不仕ト被申上候由、又被遊御意候ニハ、自分ニハ決テ押込隠居被仰出、其時ハ如何様可致ト被遊御意候ニ付、伊賀ヨリ申上候ニハ、是私共目之見得申処ニテ無御座候得共、是ハ国中之者共合点仕間敷御答為被申上由、然処又被遊御意候ニハ、引入候テハ頓ト我様御相談被遊候人無之候間、御役御免ハ不被成候間、明日モ致出勤様被仰出、其方ヵ引入呉候テハドウモ御成不被成候ニ付、罷出候様被遊御意候ニ付、高輪ヨリ被仰出候儀ヲ私罷出候テハ不宜候間、是非罷出申儀ニ御座候ハヽ、表向屹ト被仰渡被下候ハヽ、随分出勤可仕ト伊賀ヨリ為申上由、左候テ翌日親類ヨリ御役御免御届申出候処、典膳ヨリ田畑武右衛門御

取次ヲ以テ、相良一郎左衞門へ被仰渡候ニハ、伊賀事御役御免ハ不被成明日モ可被召儀モ可有之候間、其身ニモ右之趣申聞セ置候様被仰渡、暫ク相控居候様被仰渡相控居候処、其身ニハ申聞セ候ニ不〔及脱カ〕左様相心得居候様被仰渡候、両三日過候テ於江戸被仰渡候通相心得候様被仰渡候事、

鹿児島県史料編さん関係者

顧問
聖心女子大学講師　大久保利謙
前早稲田大学教授　竹内理三
東京大学教授　新田英治

委員
桃園恵眞
四本健光
桑波田興
山下千本芳
田島秀隆
原口虎雄
五味克夫
村野守次
即正

館長　新納義
副館長　坂口徳幸
調査史料課
晋哲哉井
山下由美田
新山真代畠
浜平公子
上明文
田中三代子
山みちる

鹿児島県史料　　斉宣・斉興公史料

昭和59年12月1日　印刷
昭和60年1月21日　発行

非売品

編集　鹿児島県歴史資料センター黎明館
発行　鹿児島県

印刷所　合名会社　文尚堂印刷所
鹿児島市西千石町1－8